

高松市埋蔵文化財調査報告 第48集

宮西・一角遺跡

市道林町47号線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



2000. 3

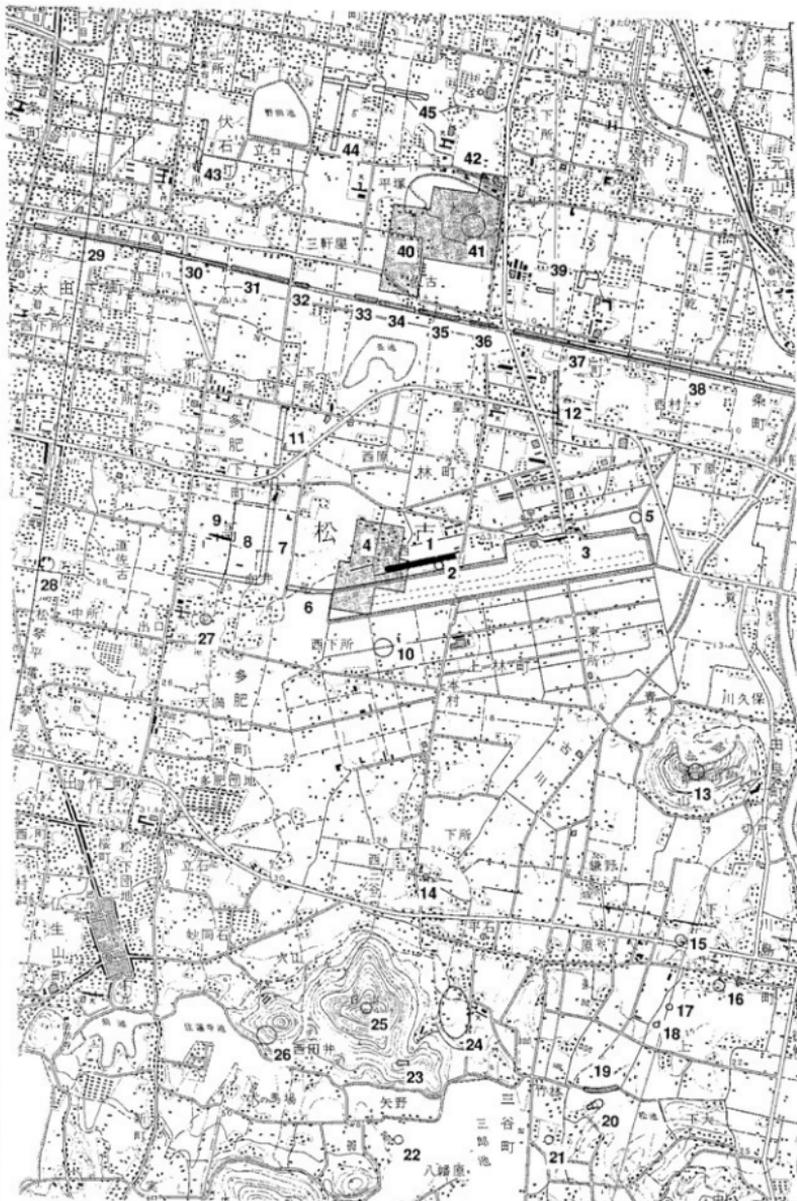
高松市教育委員会

宮西・一角遺跡正誤表

ページ	行数	誤	正
本文目次	23	遺物	遺構

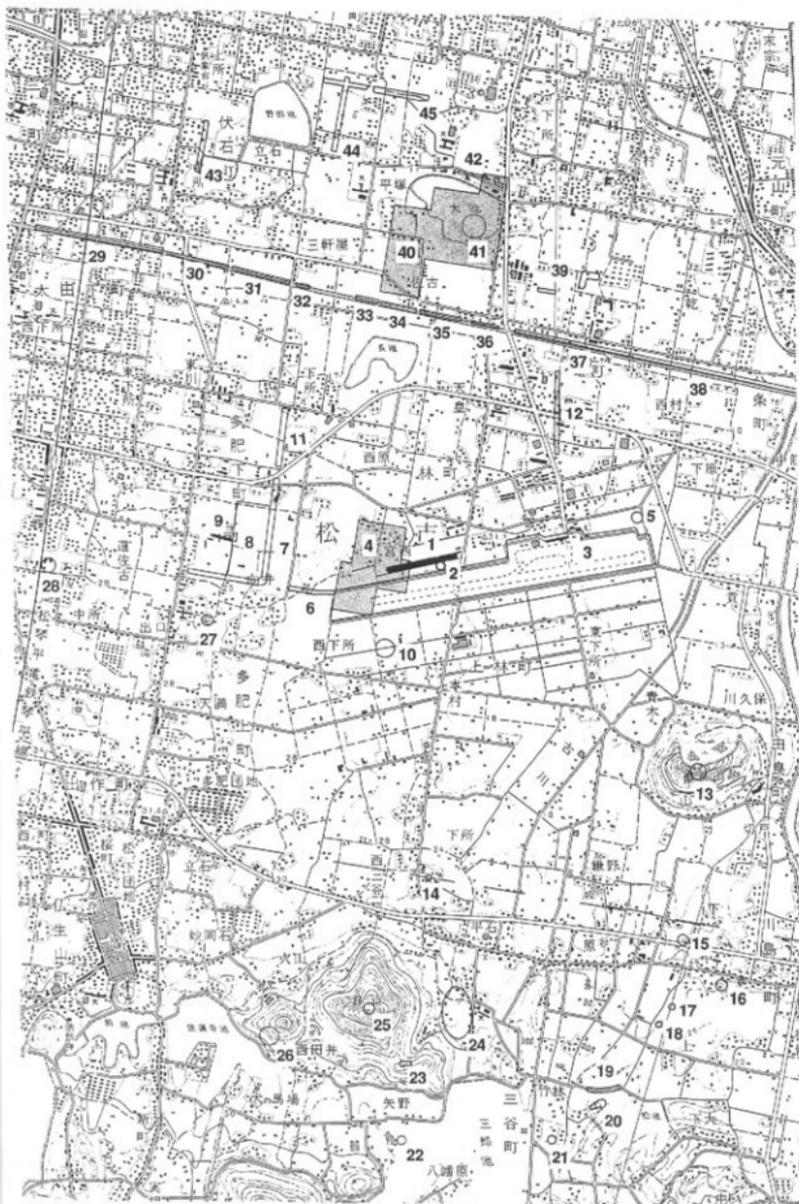
092
Ta42
48

本文5P第3図 遺跡位置図の遺跡番号に誤りがありましたので、下図に差し替えをお願いします。



第3図 遺跡位置図

本文5P第3図 遺跡位置図の遺跡番号に誤りがありましたので、下図に差し替えをお願いします。



第3図 遺跡位置図

はじめに

多くの方がご存じのように、国指定重要文化財「弘福寺領讃岐国山田郡田図」は、奈良時代の本市林町周辺を描いた日本最古の絵図として有名であります。本市教育委員会でも、この田図に描かれた場所を探り、高松の古代史を解明するため、昭和62年度から1次、2次調査合わせて延べ10年にわたって、弘福寺領讃岐国山田郡田図調査事業を進めてまいりました。これにより、田図に描かれた場所の比定、古代の官道である南海道の調査など、古代の高松を考えるうえで貴重な成果をあげることができました。

さて、昨今の都市化の波は、それまで田園地帯でありました田図比定地にも押し寄せてまいりました。田図南地区に比定されている地域において、市道を拡幅する必要が生じ、これに伴い本市教育委員会が発掘調査することとなりました。

宮西・一角遺跡と名づけられた本遺跡では、弥生時代前期末と後期の集落が確認されるとともに、田図と同じ時期である奈良時代の遺物も確認され、この地において、当該時期に人々の活動があったことがわかりました。また、田図の条里地割と一致する室町時代頃の溝も確認され、この地域の条里制検証する史料も得るなど、多くの成果をあげることができました。

最後になりましたが、今回の調査に際し、多大なご理解とご協力をいただきました地元の方々や関係者に感謝の意を表するものです。

平成12年3月

高松市教育委員会
教育長 山口 寮 氏

例 言

- 1 本報告書は、市道林町47号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、高松市林町に所在する宮西・一角遺跡の調査報告を収録した。
- 2 発掘調査および整理作業については、高松市教育委員会が実施した。
- 3 調査から報告書作成に至るまで、下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。

香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 讃岐文化遺産研究会
石上英一（東京大学史料編纂所所長） 金田章裕（京都大学大学院文学研究科教授）
工業善通（元奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長）
杉本和樹（西大寺フォト） 高橋 学（立命館大学理工学部教授）
外山秀一（皇學館大学文学部助教授） 丹羽佑一（香川大学経済学部教授）
山中敏史（奈良国立文化財研究所集落遺跡研究室長）
吉野川上流域弥生土器検討会参加諸氏
- 4 宮西・一角遺跡の調査は、平成6年度は文化振興課文化財専門員山本英之が、平成7年度は同専門員山元敏裕が、平成8年度は山本が、平成10年度は山本・山元が行った。整理作業は、平成11年度に山元が行った。
- 5 本報告書の執筆は、第3章第1節の弥生土器の原稿を川部浩司が行った以外は山元が行い、編集についても山元が行った。
- 6 本文の挿図として、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「高松南部」および高松市都市計画図2千5百分の1「42 太田」「43 林」を一部改変して使用した。
- 7 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会が保管している。
- 8 本報告書の高度値は海拔高を表し、方位は第1～3図が座標北を、その他は磁北を表す。
- 9 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。

SD……溝 SH……竪穴住居 SK……土坑 SP……柱穴 SA……柵列
SX……不明遺構
- 10 遺構番号は東から通し番号とした。ただし、柱穴については調査年次ごとに番号を与え、1次調査の柱穴1であればISP01とした。

宮西・一角遺跡発掘調査報告書

本文目次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	2

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

第3章 調査の成果

第1節 弥生時代前期末～中期初頭の遺構と遺物	17
第2節 弥生時代後期の遺構と遺物	44
第3節 古墳時代後期の遺構と遺物	49
第4節 平安時代の遺構と遺物	52
第5節 中世の遺構と遺物	54
第6節 近世の遺構と遺物	63
第7節 旧河道と遺物	76

第4章 調査のまとめ

第1節 遺物の変遷について	89
第2節 弥生前期末から中期初頭の遺構・遺物について	89
第3節 中世後半の区画溝と柱穴（屋敷跡）について	91
第4節 弘福寺領山田郡田岡南地区との関係について	91

挿 図 目 次

第 1 図	調査地位置図	1
第 2 図	調査地位置図	2
第 3 図	遺跡位置図	5
第 4 図	宮西・一角遺跡遺構配置図(1) 折り込み	7
第 5 図	宮西・一角遺跡遺構配置図(2) 折り込み	9
第 6 図	宮西・一角遺跡遺構配置図(3) 折り込み	11
第 7 図	宮西・一角遺跡遺構配置図(4) 折り込み	13
第 8 図	宮西・一角遺跡遺構配置図(5) 折り込み	15
第 9 図	SK 0 1 平・断面図	17
第 10 図	SK 0 2 遺物出土状況図	17
第 11 図	SK 0 2 平・断面図	17
第 12 図	SK 0 2 出土遺物実測図(1)	18
第 13 図	SK 0 2 出土遺物実測図(2)	19
第 14 図	SK 0 4 平・断面図	20
第 15 図	SK 0 4 出土遺物実測図	21
第 16 図	SK 0 5 平・断面図	22
第 17 図	SK 0 5 出土遺物実測図	22
第 18 図	SK 0 7 平・断面図	22
第 19 図	SK 0 7 出土遺物実測図(1)	23
第 20 図	SK 0 7 出土遺物実測図(2)	24
第 21 図	SK 0 8 平・断面図	24
第 22 図	SK 0 8 出土遺物実測図(1)	25
第 23 図	SK 0 8 出土遺物実測図(2)	26
第 24 図	SK 0 8 出土遺物実測図(3)	27
第 25 図	SK 0 8 出土遺物実測図(4)	28
第 26 図	SK 0 9 平・断面図	28
第 27 図	SK 0 9 出土遺物実測図	28
第 28 図	SK 1 0 平・断面図	29
第 29 図	SK 1 0 出土遺物実測図	29
第 30 図	SK 1 1 平・断面図	30
第 31 図	SK 1 1 出土遺物実測図	30
第 32 図	SK 1 5 平・断面図	31
第 33 図	SK 1 5 出土遺物実測図	31
第 34 図	SK 1 7 平・断面図	31
第 35 図	SK 1 7 出土遺物実測図	32
第 36 図	SK 1 8 平・断面図	32
第 37 図	SK 1 8 出土遺物実測図	33
第 38 図	SK 2 0 平・断面図	33
第 39 図	SK 2 0 出土遺物実測図	33
第 40 図	SK 2 4 平・断面図	34
第 41 図	SK 2 4 出土遺物実測図	34
第 42 図	SK 2 6 平・断面図	35
第 43 図	SK 2 6 出土遺物実測図	36
第 44 図	SK 2 9 平・断面図	37
第 45 図	SK 2 9 出土遺物実測図	38
第 46 図	SK 3 5 平・断面図	39
第 47 図	SK 3 5 出土遺物実測図	39
第 48 図	SK 3 6 平・断面図	39
第 49 図	SK 3 6 出土遺物実測図	40
第 50 図	SK 3 7 平・断面図	41
第 51 図	SK 3 7 出土遺物実測図	41
第 52 図	SK 3 8 平・断面図	41
第 53 図	SK 3 8 出土遺物実測図	41
第 54 図	SD 1 1 断面図	42
第 55 図	SD 1 2 平・断面図	42
第 56 図	SD 1 2 出土遺物実測図	42
第 57 図	SD 2 0 断面図	42

第 58 図	SD 2 3 断面図	43
第 59 図	ISP 1 0 ~ 1 1 4 平面図	43
第 60 図	ISP 1 0, 1 1 出土遺物実測図	43
第 61 図	SH 0 1 平・断面図	44
第 62 図	SH 0 1 出土遺物実測図	45
第 63 図	SK 0 6 平・断面図	46
第 64 図	SD 0 6 平・断面図	46
第 65 図	SD 0 6 出土遺物実測図	47
第 66 図	SD 0 9 断面図	47
第 67 図	SD 0 9 出土遺物実測図	47
第 68 図	ISP 0 1 断面図	48
第 69 図	ISP 0 1 出土遺物実測図	48
第 70 図	SX 0 2 平・断面図	49
第 71 図	SX 0 2 出土遺物実測図	50
第 72 図	SK 2 7 平・断面図	52
第 73 図	SK 2 7 出土遺物実測図	52
第 74 図	SD 0 1 断面図	53
第 75 図	SD 0 1 及び 7 層出土遺物実測図	53
第 76 図	SK 0 3 平・断面図	54
第 77 図	SK 0 3 出土遺物実測図	54
第 78 図	SD 1 7 断面図	54
第 79 図	SD 1 8, 1 9 遺物出土状況図	55
第 80 図	SD 1 8, 1 9 断面図	55
第 81 図	SD 1 8 出土遺物実測図	57
第 82 図	SD 1 9 出土遺物実測図	58
第 83 図	SD 1 8, 1 9 周辺出土遺物実測図	59
第 84 図	ST 0 1 平・断面図	60
第 85 図	ISP 0 2 平・断面図	61
第 86 図	ISP 0 2 出土遺物実測図	61
第 87 図	ISP 2 3 平・断面図	61
第 88 図	ISP 2 3 出土遺物実測図	61
第 89 図	SK 0 7 出土遺物実測図	62
第 90 図	SK 2 3 平・断面図	64
第 91 図	SK 2 3 出土遺物実測図	64
第 92 図	SK 2 5 出土遺物実測図	64
第 93 図	SK 3 4 出土遺物実測図	64
第 94 図	SD 0 2 平・断面図	65
第 95 図	SD 0 2 出土遺物実測図	65
第 96 図	SD 0 3 断面図	66
第 97 図	SD 0 3 出土遺物実測図(1)	67
第 98 図	SD 0 3 出土遺物実測図(2)	68
第 99 図	SD 0 3 出土遺物実測図(3)	69
第 100 図	SD 0 6 平・断面図	70
第 101 図	SD 0 6 出土遺物実測図	71
第 102 図	SD 0 8 平・断面図	71
第 103 図	SD 0 8 出土遺物実測図	72
第 104 図	SD 1 3 断面図	73
第 105 図	SD 1 3 出土遺物実測図	73
第 106 図	SD 1 4 断面図	73
第 107 図	SD 1 5 断面図	73
第 108 図	SD 1 5 出土遺物実測図	74
第 109 図	SD 2 1 断面図	74
第 110 図	SD 2 1 出土遺物実測図	75
第 111 図	SX 0 1 平・断面図	75
第 112 図	SX 0 1 出土遺物実測図	75
第 113 図	SR 0 1 平・断面図 折り込み	77
第 114 図	SR 0 2 平・断面図	77

第115図	SR 0 1	2 2・2 3層出土遺物実測図1)・79	第122図	SR 0 3	4 a層上面水田平面図……………83
第116図	SR 0 1	2 2・2 3層出土遺物実測図2)・80	第123図	SR 0 3	5 a層上面水田平面図……………83
第117図	SR 0 1	2 2・2 3層出土遺物実測図3)・81	第124図	SR 0 2	出土遺物実測図……………85
第118図	SR 0 1	2 2・2 3層出土遺物実測図4)・82	第125図	SR 0 3	6層以下出土遺物実測図……………86
第119図	SR 0 1	1 8・2 0層出土遺物実測図……………82	第126図	SR 0 3	西肩出土遺物実測図……………87
第120図	SR 0 3	平・断面図……………83	第127図	SR 0 3	4層出土遺物実測図……………87
第121図	SR 0 3	西肩遺物出土状況図……………83	第128図	SR 0 3	3層出土遺物実測図……………88

挿表目次

第1表	宮西一ノ角遺跡調査一覧……………2
-----	-------------------

図版目次

図版1-1	第1次調査西半完掘状況(東から)	-3	SX 0 2土層堆積状況
-2	同(西から)	図版16-1	II SP 0 2遺物出土状況
-3	第1次調査東半完掘状況(東から)	-2	同下層遺物出土状況
図版2-1	第1次調査東半完掘状況(西から)	-2	I SP 2 3土器埋納遺構
-2	SD 2 3付近完掘状況	図版17-1	SD 1 9遺物出土状況
-3	SK 2 3付近完掘状況	-2	SD 1 8遺物出土状況
図版3-1	SD 2 1付近完掘状況	-3	SD 1 8交差部分遺物出土状況
-2	SD 2 2付近完掘状況	図版18-1	SD 2 2完掘状況
-3	第2次調査西半完掘状況(東から)	-2	SD 1 3完掘状況
図版4-1	SR 0 2完掘状況(西から)	-3	SK 3 1完掘状況
-2	3次調査完掘状況(西から)	図版19-1	SX 0 1完掘状況
-3	3次調査完掘状況(東から)	-2	SD 0 8-2完掘状況
図版5-1	Na 1 6北付近完掘状況	-3	SD 0 7完掘状況
-2	Na 1 7北付近完掘状況	図版20-1	SD 0 6完掘状況
-3	Na 1 8北付近完掘状況	-2	岩田神社横松並木
図版6-1	Na 1 8~1 9北付近完掘状況	-3	岩田神社参道
-2	Na 1 8~1 9北付近完掘状況	図版21-1	SR 0 3完掘状況(東から)
-3	Na 1 9北付近完掘状況	-2	SR 0 3土層堆積状況
図版7-1	Na 1 9~2 0北付近完掘状況	-3	SR 0 3西肩遺物出土状況
-2	Na 2 1北付近完掘状況(西から)	図版22-1	SD 0 6遺物出土状況
-3	Na 2 1北付近完掘状況(東から)	-2	SR 0 3 4層上面水田畦畔検出状況
図版8-1	SK 2 9遺物出土状況	-3	SR 0 1 5層上面水田畦畔検出状況
-2	SK 0 4遺物出土状況	図版23-1	SR 0 1完掘状況
-3	SK 3 6遺物出土状況	-2	SD 0 1完掘状況
図版9-1	SK 3 5遺物出土状況	-3	池台池堤防部分土層堆積状況
-2	SK 0 7遺物出土状況	図版24-1	SK 3 6出土遺物
-3	SK 2 6遺物出土状況	-2	SK 1 8出土遺物
図版10-1	SK 2 4遺物出土状況	-3	SK 2 9出土遺物
-2	SK 1 1遺物出土状況	図版25-1	SK 1 1出土遺物
-3	SA 0 1完掘状況	-2	SK 1 0出土遺物
図版11-1	SK 1 0検出状況	-3	SK 0 8出土遺物
-2	遺物出土状況	図版26	SK 0 7出土遺物
-3	遺物出土状況(拡大)	図版27-1	SK 0 8出土遺物
図版12-1	SK 0 8遺物出土状況	-2	SK 0 8出土遺物
-2	土層堆積状況	図版28-1	SK 0 2出土遺物
-3	SD 1 2遺物出土状況	-2	SK 0 2出土遺物
図版13-1	SK 0 2上層遺物出土状況	-3	SD 1 2出土遺物
-2	SK 0 2下層遺物出土状況	図版29	SR 0 1 2 2・2 3層出土遺物
-3	SK 0 2完掘状況	図版30-1	SK 1 7出土石器
図版14-1	SH 0 1東端土層堆積状況	-2	SX 0 2出土土器
-2	ガラス玉出土状況	-3	I SP 2 3出土土器
-3	SD 0 9完掘状況	-4	SK 0 7出土土器
図版15-1	SX 0 2完掘状況	-5	SD 1 8出土土器
-2	同東端遺物出土状況		

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯



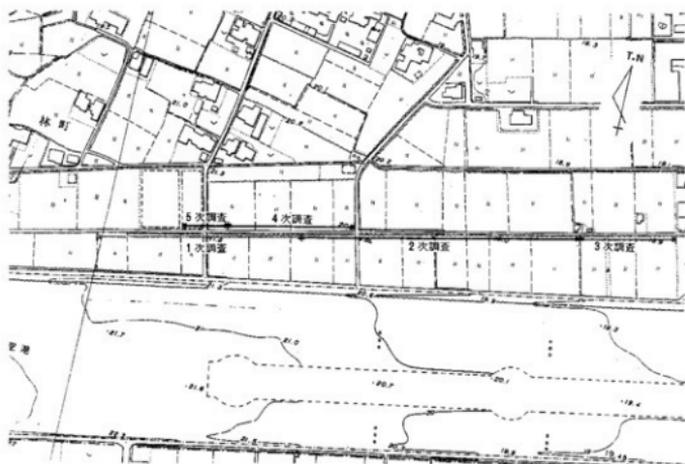
第1図 調査地位置図

本書に報告する宮西・一角遺跡は市道林町47号線道路拡幅工事に伴い、調査したものである。当遺跡の南側に位置する林町76番地14において社会福祉法人すみれ福祉会が、特別養護老人ホーム（さくら荘）の建設を計画し、時期を同じくして市道林町47号線の工事が実施されることが判明した。道路課の予定では、平成6年度から県費補助を得て5カ年計画で現道の拡幅工事を実施するとのことであった。

文化振興課では、さくら荘建設予定地の発掘調査、弘福寺領山田郡田岡南地区の発掘調査も近接地で予定されていること、空港跡地遺跡の遺跡の状況から道路拡幅予定地にも遺跡が広がっていることが十分予想できることから、道路課と協議を行い工事実施前に発掘調査を行うことで合意した。発掘調査の実施にあたっては、現道が生活道として利用されていることから道路の両側部分の側溝、擁壁工事で地下遺構に影響のある範囲（幅約2m）について調査を実施した。

第2節 調査の経過

上記のとおり、市道予定地内の発掘調査を行ったが、発掘調査費を含む工事費が県費補助を得ており、補助金の交付が毎年秋頃であることから、本格的な事業着手は稲刈りが終了した冬場になってから、発掘調査は工事と並行して進められた。各年度の調査範囲、調査期間等については第2図、第1表のとおりである。このうち調査箇所を示すNoは、調査地東側を南北に走る市道西境界を起点とする工事に20m間隔で設定された基準を利用した。発掘調査は平成11年度も調査を実施し、平成12年度を最終年度として調査を実施する予定である。平成11年度以降の調査成果については、別に報告する予定である。



第2図 宮西・一角遺跡調査区位置図（1：4,000）

	調査箇所	調査期間	調査面積(m ²)
1次調査	南No.1 8 + 4 m ~ No.2 7	H 7. 1.31 ~ H 7. 3.31	4 5 0
2次調査	南No.6 + 3.5m ~ No.1 8 + 4 m	H 7.12. 8 ~ H 8. 3. 8	4 6 0
3次調査	南No.1 + 10m ~ No.6 + 3.5m	H 9. 1.24 ~ H 9. 2.12	1 6 0
4次調査	北No.1 5 + 15m ~ No.2 1 + 7.5m	H10.12.16 ~ H11. 2. 1	2 2 5
合計			1, 2 9 5

第1表 宮西・一角遺跡調査一覧

第3節 整理作業の経過

本報告書の整理作業は、各年度の調査中に土器洗浄、一部注記作業までの基礎整理を行い、大規模事業の整理作業の合間に土器の実測作業等を鋭意進めた。報告書作成の本格的な整理作業は平成11年度に行った。報告書作成にあたり、川部浩司（花園大学）、信吉純恵、増田ゆず（徳島文理大学）の協力を得た。

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。いずれの山地も花崗岩の上に緻密で侵食を受けにくい安山岩がキャップロックと呼ばれる形でかぶさっており、そのため侵食開析から取り残された台状の平坦面を有する山地（メサ）あるいは孤立丘（ビュート）となっている。西側の五色台は、平坦な頂部をよく残しており、屋島もまた同様に開析から取り残された台地である。東側の立石山山地はこれより開析が進んでおり、紫雲山・白山・由良山など多数の孤立丘とともに高松平野の自然景観を特徴付けている。

高松平野は、これら侵食が進んだあと、完新世に入ってから堆積されて形成されたもので、讃岐山脈から流下し、北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川を主体として本津川・春日川・新川などによって搬送された堆積物により緩やかな傾斜の扇状地を形成している。

現在石清尾山塊の西を直線に北流する香東川は、17世紀はじめの河川改修によって人工的に開削されたもので、それ以前には現在の香川町大野付近から東へ分岐した後、石清尾山塊の南側を回り込んで平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧主流路は、現在では水田及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林町から木太町へかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査によってもその痕跡が確認されている。なお、17世紀の庵川直前の流路は御坊川としてその名残をとどめている。

これらのため池は、年間1000mm前後と降水量に乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠のものであるが、林、多肥地区周辺では扇状地末端部に当たることから、ため池に加えて出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。しかし、昭和50年の香川用水の通水によって、この一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ、農業用水確保の不安が払拭された反面、大池、長池等のため池が三郎池の子池となり、地元水源を核とした水利慣行が急激に消滅するとともに、ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

第2節 歴史的環境

宮西・一角遺跡が所在する林町周辺では近年の大規模開発に伴う発掘調査によって多くの遺跡が調査され、高松平野でも遺跡の状況が最もわかる地域である。おおまかではあるが、各時代を追って遺跡の状況をみていきたい。

縄文時代の遺物を出土する遺跡は晩期を中心に当遺跡周辺にも散見されるが、土器が溝、土坑から確認されるのみで、住居を伴う集落遺構は現在のところ確認されていない。この中で林・坊城遺跡では旧河道から多量の縄文時代晩期の突帯紋土器とともに、狭楕などの農耕具が出土している。居石遺跡では同様に旧河道から縄文時代晩期中頃の土器の頸部に爪形紋を施す特徴をもった多量の土器と共に打製石斧の柄の未製品が出ているほか、打製石斧の柄と同様なサイズに切断された加工前の材木も出土している。縄文時代の遺跡の状況が今一つ不明である中で、住居遺構は伴わないが、遺物の出土量から遺跡の中心部に近いことは想定される晩期の2遺跡が旧河道沿いに立地している点は、今後晩期の遺跡を考える上での一つの目安となろう。

弥生時代前期前半の遺跡は遺物の出土はみられるが、遺跡の詳細がわかるものはない。

弥生時代前期末～中期初頭になると遺跡の状況がややわかりやすくなる。宮西・一角遺跡の西半から空港跡地遺跡の北東にかけてこの時期の遺構が密集する地域で、溝・土坑などから土器が多く出土することから、一つのまとまりとして括れそうである。ただ、削平の激しい地域であることから、竪穴住居などは削平されたものと想定できる。この時期の遺構で特徴的なものは旧河道Aの後背湿地に形成される小区画水田である。弥生時代前期末と考えられる小区画水田は浴・松ノ木遺跡、浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、弘福寺領山田郡田図北地区B、C区、上西原遺跡などで確認されており、広域に水田耕作が行われていたものと考えられる。

弥生時代中期の遺跡は旧河道Aの両岸に集落が形成される。多肥・松林遺跡、松林遺跡、日暮・松林遺跡が一つのまとまりとして捉えられ、竪穴住居などのまとまりをもとに、いくつかの小グループに分けられる。多肥・松林遺跡で確認された旧河道の出土遺物量、出土した土器の時期差から中期を通して集落の継続が考えられる。

もう一つのまとまりは、同じ旧河道下流域の浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、井手東Ⅰ遺跡が一つのまとまりとして捉えられる。竪穴住居のまとまりをもとに小グループに分けられる。多肥・松林遺跡同様、浴・長池遺跡で確認された旧河道から出土した多量の出土土器から中期を通して集落の継続が考えられる。

弥生時代後期では、大きく前半と後半に分かれるが、前半では空港跡地遺跡北東部から田図南地区B調査区、宮西・一角遺跡にかけて後期前半の住居跡が確認されている。後半になると遺跡数の増加がみられる。当遺跡周辺では空港跡地遺跡、日暮・松林遺跡、凹原遺跡などで住居跡がまとめて確認されている。

古墳時代前期では、後期から継続する空港跡地遺跡で前方後方形、円形、方形の周溝墓などが3箇所点に点在する。この時期、丘陵部に造られる古墳と立地の違いが、何に起因するものか今後詳細に検討していく必要がある。

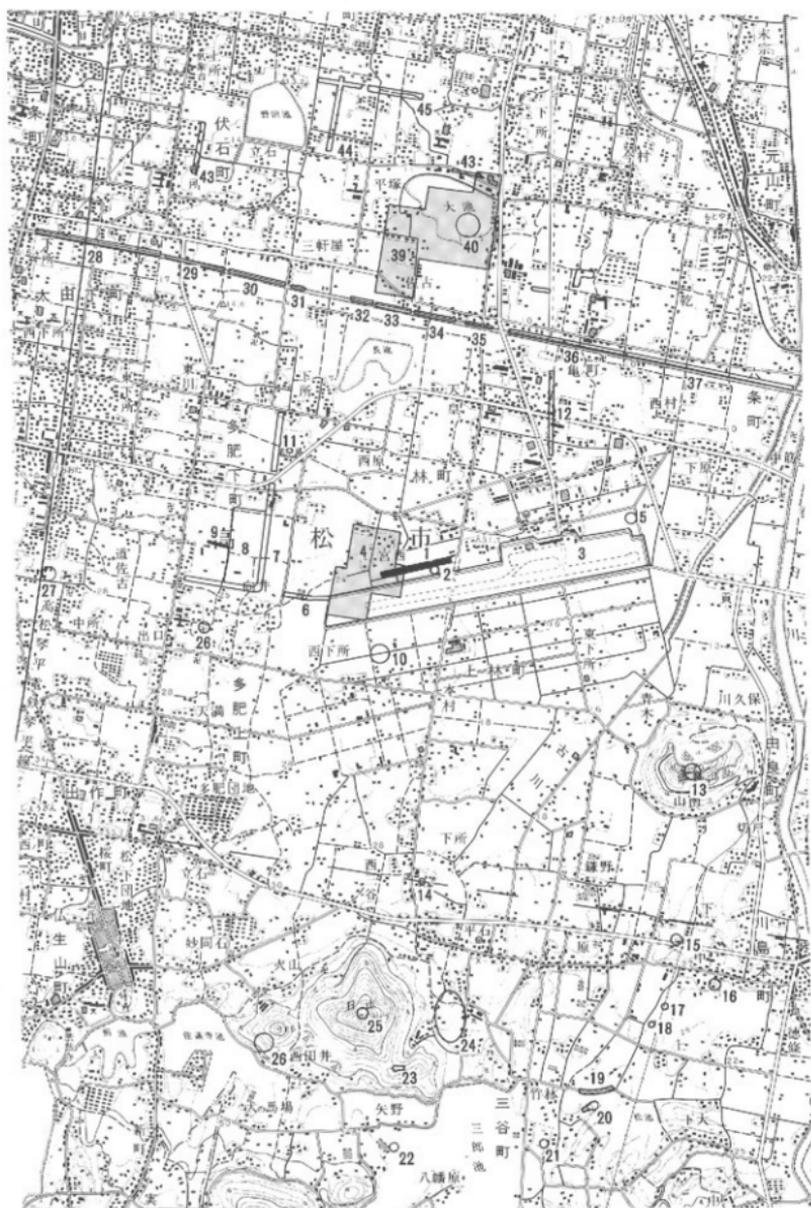
古墳時代中期末から後期初頭では空港跡地遺跡の西端と大田下・須川遺跡で同時期の住居跡が確認されているが弥生後期の遺跡数に比べて激減する。

古墳時代後期では空港跡地遺跡などで住居跡がみられるが中期同様少ない。

古墳時代終末から奈良時代にかけては空港跡地遺跡中央部南側で掘立柱建物跡が確認されている他、当地域は日本最古の田図として名高い「讚岐国山田郡田図」の南地区の比定地となっているが、田図比定地を明確に裏付けるような遺構は現在のところ確認できていない。

平安時代では多肥・松林遺跡で掘立柱建物跡が確認されている他、空港跡地遺跡から宮西・一角遺跡にかけて連続する微凹地に水田がつくられている。高松平野で確認されている水田遺構は一区画が10㎡前後のもので、最大でも20㎡を越えるものは少ない。条里制施行以降、一町四方の区画を中心とする水利慣行が存在するが、その内側においては、水を溜める作業は容易ではないことを立証する事例である。

鎌倉時代以降では空港跡地遺跡に溝に区画された建物跡が中世を通じて確認されており、当時の村落のあり方が判明し始めている。同様の屋敷跡は一部であるが宮西・一角遺跡でも室町時代の屋敷跡と考えられる遺構を確認している。

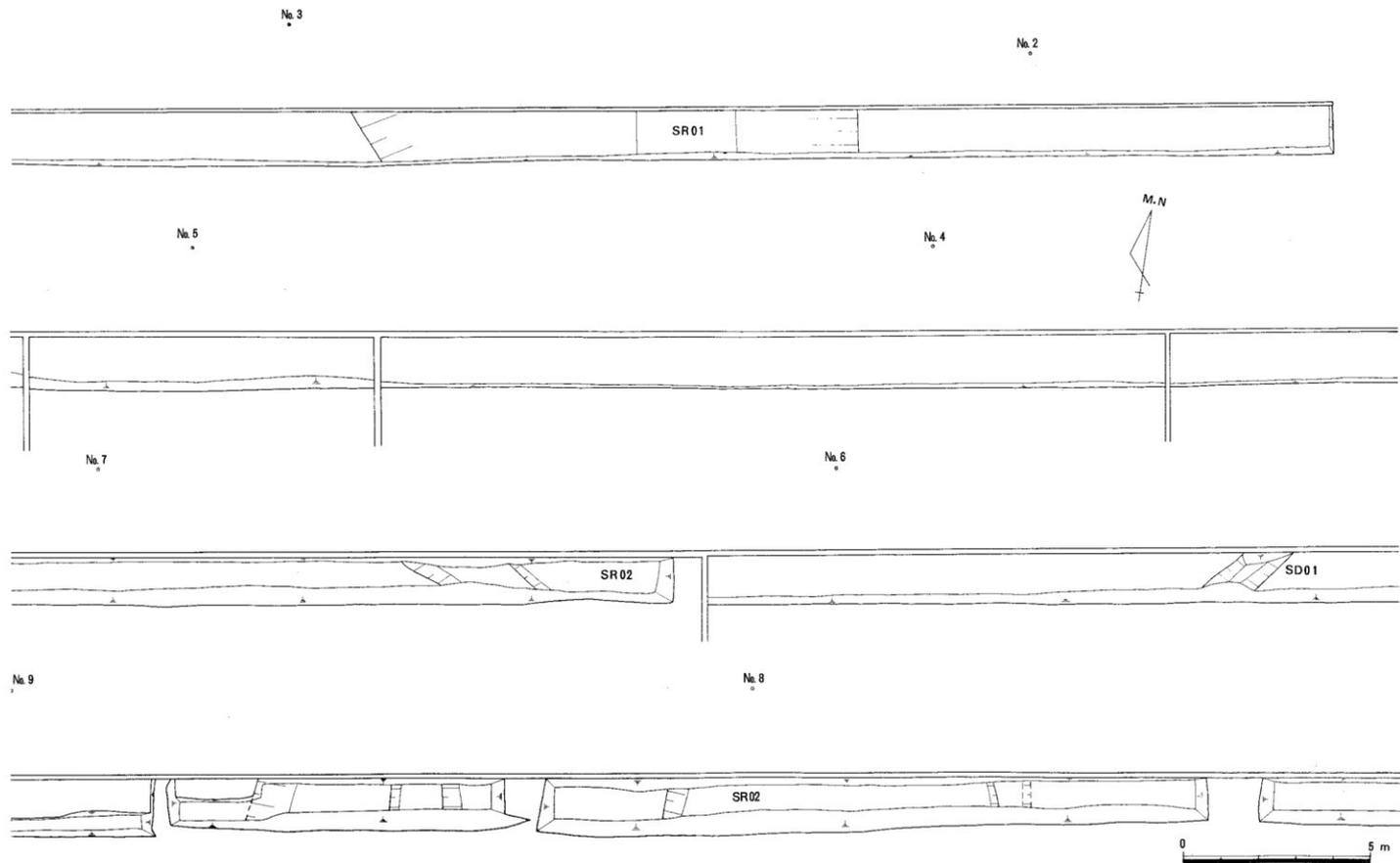


第3図 遺跡位置図

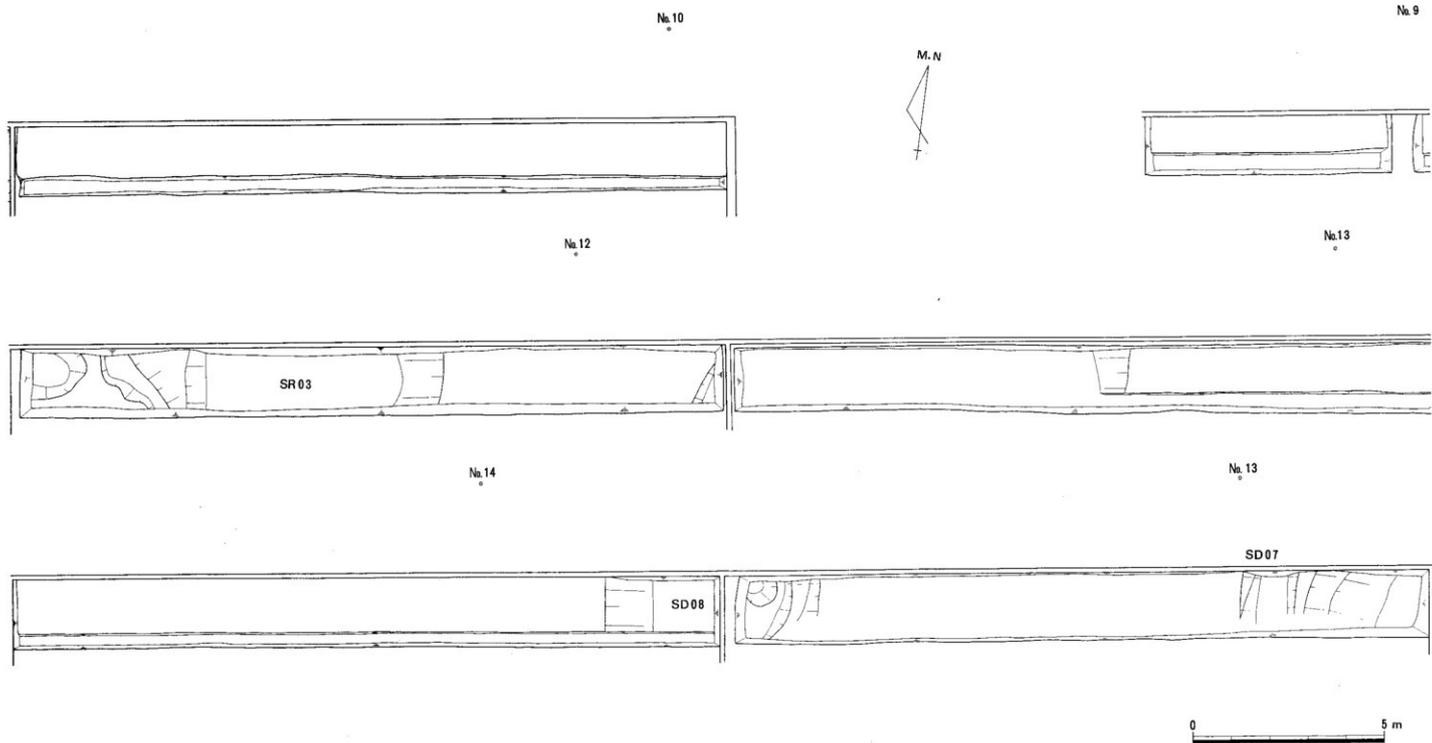
- | | | |
|------------------------|--------------|-------------------------|
| 1. 宮西・一角遺跡 | 16. 高野庵寺 | 32. 井手東Ⅱ遺跡 |
| 2. 一角遺跡 | 17. 高野南1号墳 | 33. 井手東Ⅰ遺跡 |
| 3. 空港跡地遺跡 | 18. 高野南2号墳 | 34. 浴・長池Ⅱ遺跡 |
| 4. 弘福寺領山田郡田図
比定地南地区 | 19. 三谷石船池古墳群 | 35. 浴・長池遺跡 |
| 5. 亀ノ町遺跡Ⅰ, Ⅱ | 20. 三谷石舟古墳 | 36. 浴・松ノ木遺跡 |
| 6. 多肥・宮尻遺跡 | 21. 三谷城跡 | 37. 林・坊城遺跡 |
| 7. 日暮・松林遺跡 | 22. 矢野面古墳 | 38. 六条・上所遺跡 |
| 8. 多肥・松林遺跡 | 23. 小口山1号墳 | 39. 林・浴遺跡 |
| 9. 松林遺跡 | 24. 平石上古墳群 | 40. 弘福寺領山田郡田図
比定地北地区 |
| 10. 拝師庵寺 | 25. 日山山頂経塚 | 41. 大池遺跡 |
| 11. 凹原遺跡 | 26. 雨山南遺跡 | 42. 上西原遺跡 |
| 12. 宗高・坊城遺跡 | 27. 高木城跡 | 43. キモンドー遺跡 |
| 13. 山良城跡 | 28. 多肥庵寺 | 44. 松縄・下所遺跡 |
| 14. 加摩羅神社古墳 | 29. 太田下・須川遺跡 | 45. 境日・下西原遺跡 |
| 15. 高野丸山古墳 | 30. 蛙股遺跡 | |
| | 31. 居石遺跡 | |

参考文献

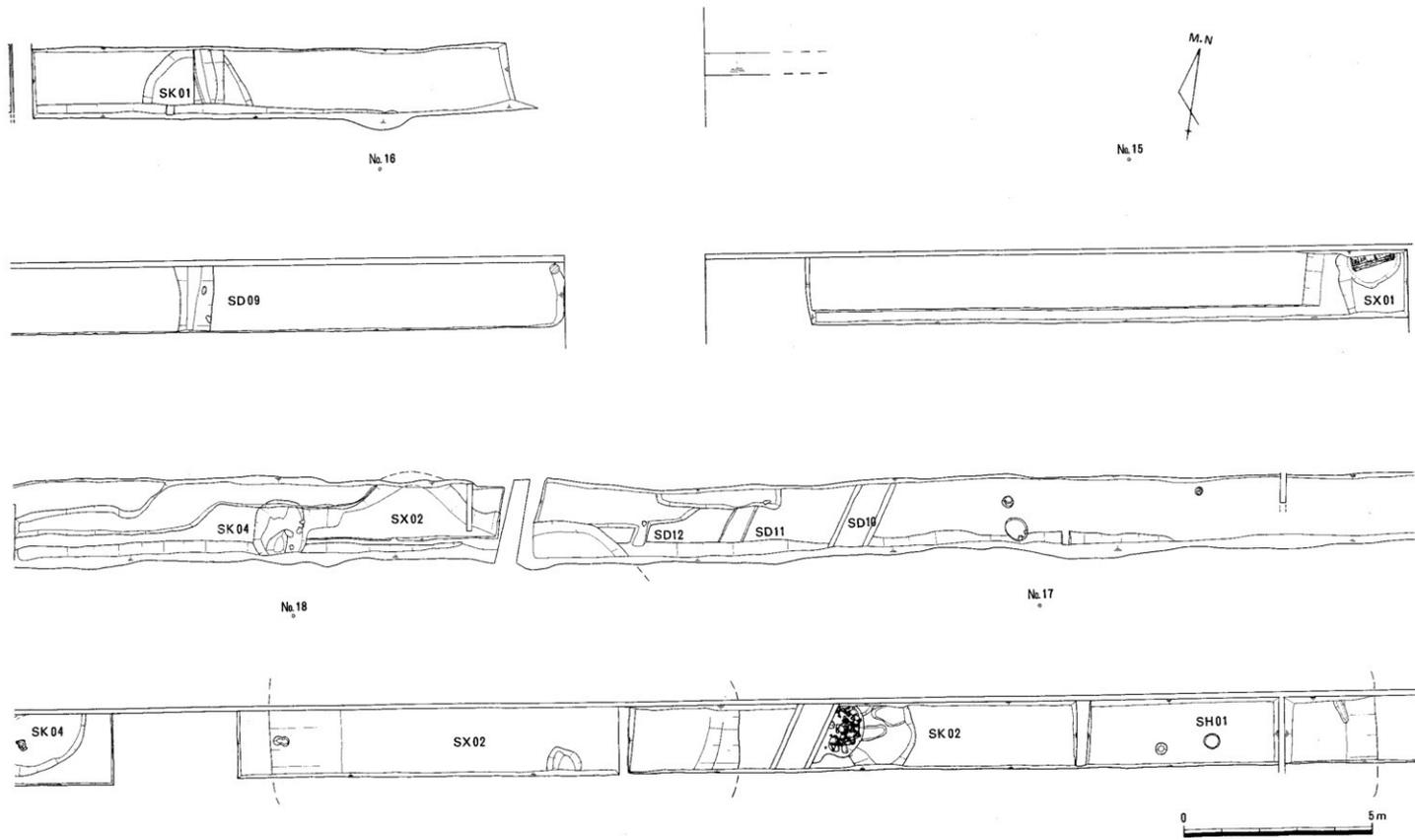
- ・『讃岐弘福寺領の調査』 高松市教育委員会 1992. 3
- ・『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』 高松市教育委員会 1999. 3
- ・『一角遺跡－特別養護老人ホームさくら荘建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
高松市教育委員会 2000. 3
- ・『松林遺跡－香川県立高松桜井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
高松市教育委員会 1996. 3
- ・『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 多肥松林遺跡』
香川県教育委員会他 1999. 3
- ・『空港跡遺跡Ⅰ～Ⅳ』 香川県教育委員会 1996, 1997, 1998, 2000
- ・『一般国道高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1～7冊』
高松市教育委員会 1993～1995
- ・『日暮・松林遺跡－都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
高松市教育委員会 1997. 3
- ・『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1～第6冊』
香川県教育委員会他 1992～1996



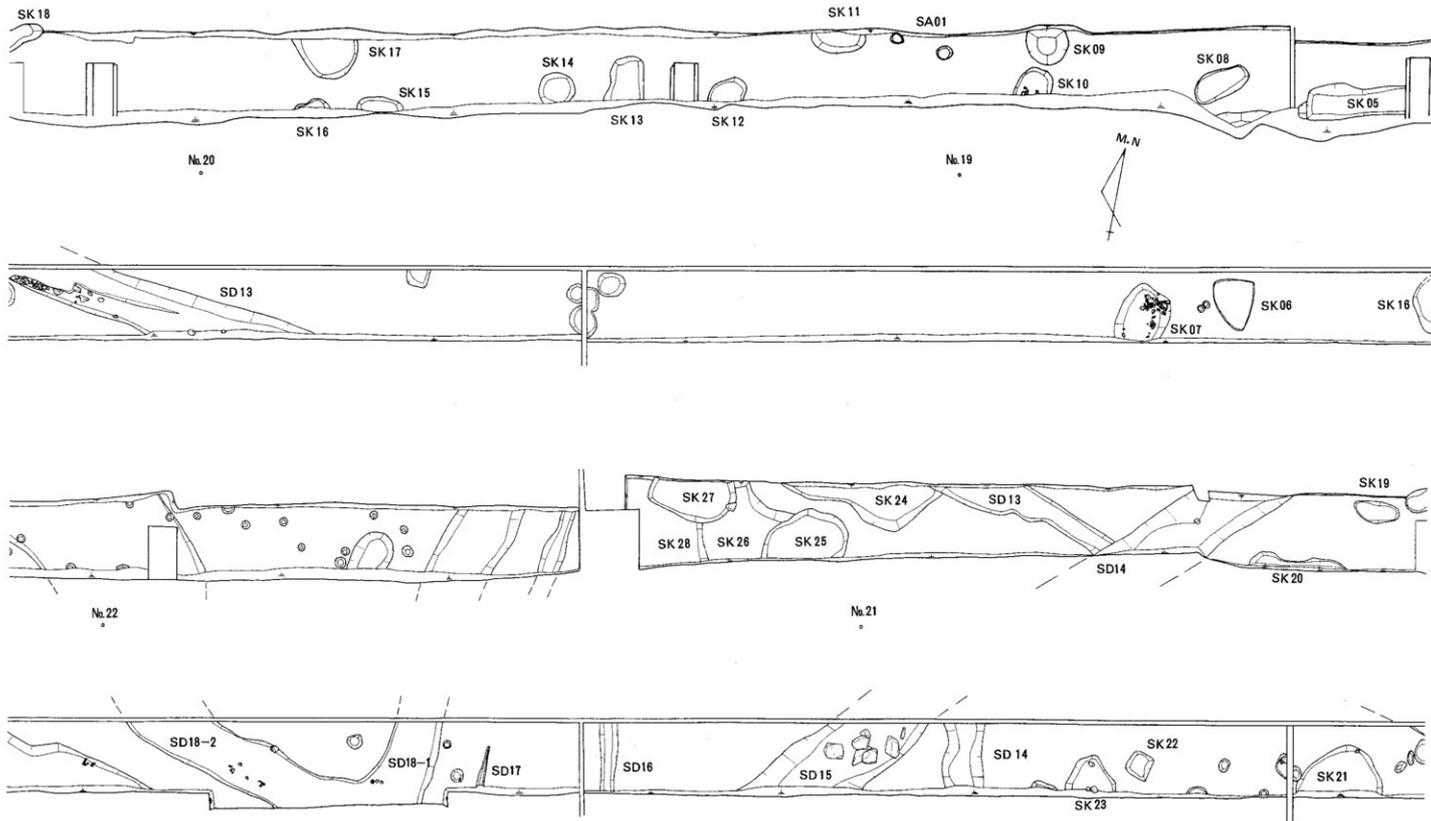
第4図 宮西・一角遺跡遺構配置図(1)No.2~9



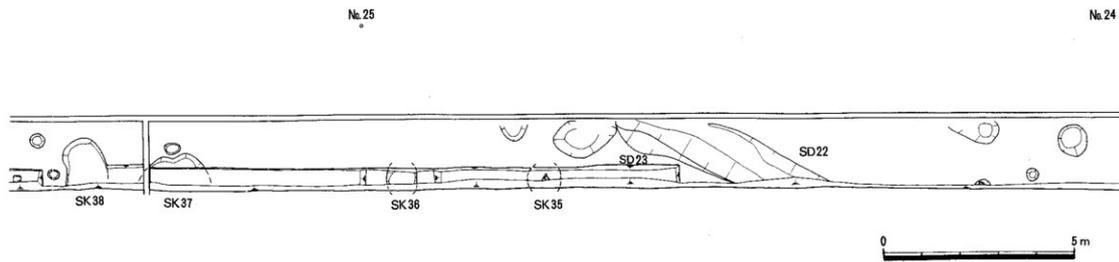
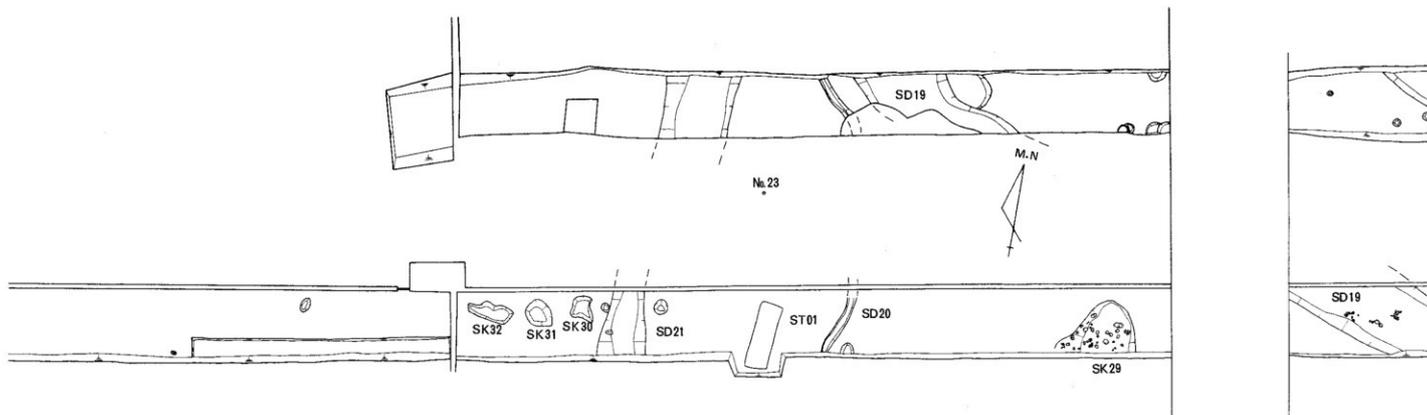
第5図 宮西・一角遺跡遺構配置図(2) №9～14



第6図 宮西・一角遺跡遺構配置図(3)No.15~18



第7図 宮西・一角遺跡遺構配置図(4) №.19~22

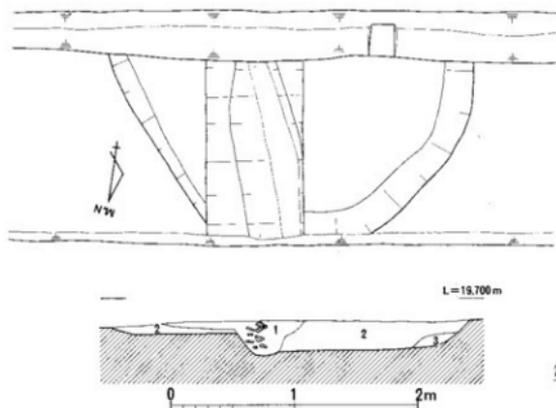


第8図 宮西・一角遺跡遺構配置図(5) №.23~25

第3章 調査の成果

第1節 弥生時代前期の遺構と遺物

SK 01



1. 黒褐色シルト (10 YR 3/2) SD06埋土 3. におい黄褐色粗砂 (10 YR 5/4)
2. 灰黄褐色シルト質極細砂 (10 YR 4/2)

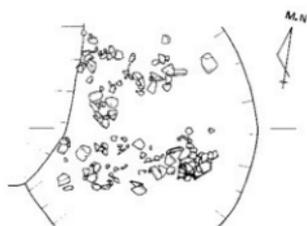
第9図 SK 01平・断面図

№16から西へ4mの北調査区で確認した土坑で、弥生後期の溝であるSD09に切られる。南半部が調査対象となるため、全容は不明であるが北半の状況から円形に近い平面形になるものと考えられる。土坑の規模は長軸2.95m、短軸1.70m以上、深さ0.25mであり、土坑の東に比べて西が深い。土層埋土は単層で灰黄褐色シルト質極細砂である。遺物は前期と思われる砂粒の多い土器片が出土しているが、時期を特定するには至っていない。

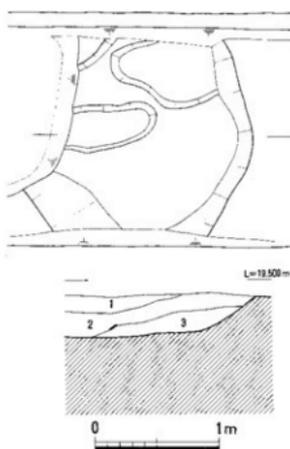
SK 02

№17から西へ3.5mの南調査区で確認した土坑である。遺構の南北がともに調査区外に広がることと西側が石組みの井戸に切られるため、全容は不明であるが平面形は円形を呈するものと考えられる。土坑の規模は東西1.55m以上、南北1.60m以上、深さ0.35mである。土層埋土は3層に分かれ、1層はにおい黄褐色シルト質極細砂、2層は炭を多く含む灰黄褐色シルト質極細砂、3層はにおい黄褐色砂礫である。遺物は上層から下層まで出土しているが、上層に破片が多く、下層で口縁部を欠損する壺一個体分が出土している。

SK 02出土遺物

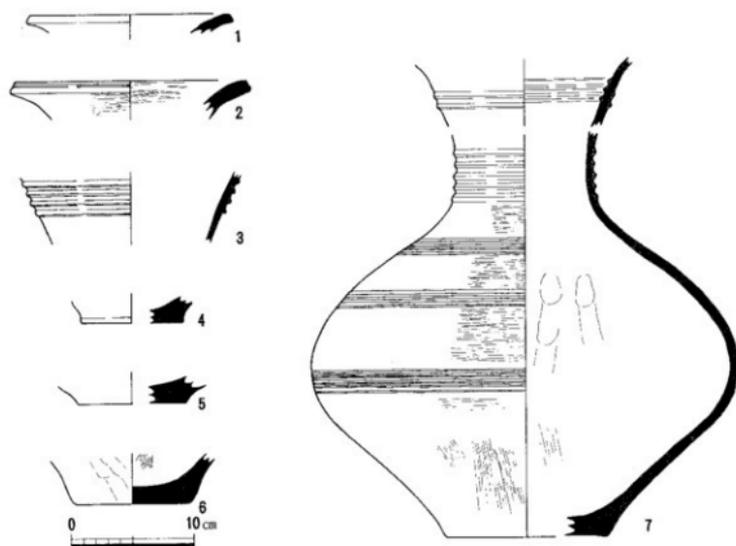


第10図 SK 02遺物出土状況図



1. におい黄褐色シルト質極細砂 10 YR 7/4
2. 灰黄褐色シルト質極細砂 (炭を多く含む) 10 YR 4/2
3. におい黄褐色砂礫 10 YR 7/2

第11図 SK 02平・断面図



第12図 SK02出土物実測図(1)

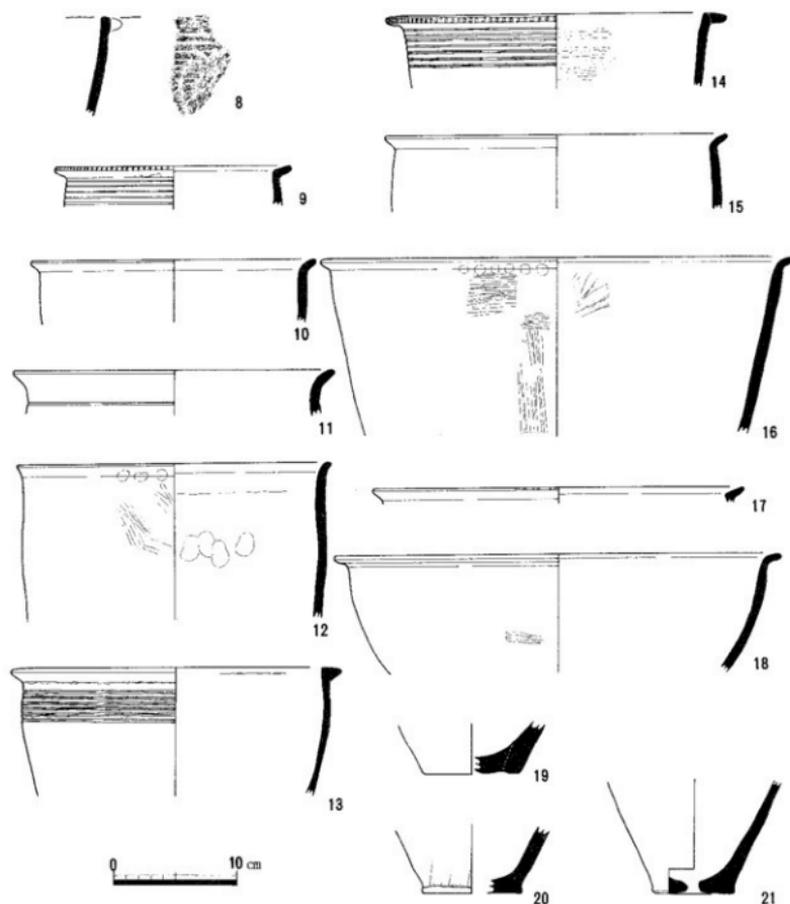
1~3は壺口縁部片である。2は面をもった口縁端部に1条の篋描沈線紋を加えており、内外面をヘラミガキ調整で仕上げている。3は口唇部を欠損しており、口縁部からやや下がった位置に、無刻の細かい貼付突帯を4+ α 条巡らしている。4~6は壺の底部片である。7は安定した厚めの底部を有し、算盤玉形に張った胴部から頸部にかけて大きく内傾して窄まり、垂直ざみに立ち上がった頸部から緩やかに大きく外反した口縁部をもったプロポーシオンである。口縁部下位と頸部及び口縁部内面には貼付突帯を巡らす。頸部下位と胴上部・胴部下位には各々櫛描風の篋描沈線紋を施紋している。頸部を境に上位と下位には採用する紋様パターンに差異がみられる。8は貼付口縁が剥落した9+ α 条の篋描沈線紋を巡らした有紋の逆L字状口縁甕である。9~12, 15, 16は如意状口縁甕である。11は僅かに外反した短く貧弱な口縁部を持った特徴ある甕である。18は鉢である。13, 14, 17は逆L字状口縁甕である。19, 20は壺底部であり、21は焼成後に底部穿孔した甕底部片である。

SK04

No.18から西へ5.5mの南調査区で確認した土坑である。北側の一部が調査区外に広がるため全容は不明であるが、東西に長く不整形な土坑である。土坑の規模は長軸2.40m、短軸1.60m以上、深さ0.30mであり、土坑中央部付近が深くなる。土層埋土は単層で暗褐色細砂である。土坑の東側より壺の口縁部が出土している。

SK04出土遺物

22は口縁部から頸部にかけて残存する広口長頸壺である。窄まった頸部付近を境に口縁部が大きく外反するプロポーシオンをもつ。23は壺胴部片である。胴上部界に櫛描直線紋と櫛描波状紋を組



第13図 SK02出土遺物実測図(2)

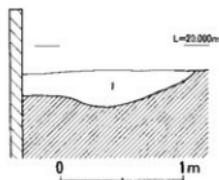
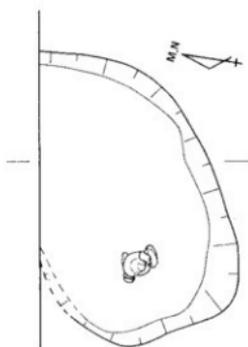
み合わせた紋様帯の最下部に、板状工具の刺突による三角形列点紋を施している。24は大きく外反するような発達をみせず、外反度が弱く、やや短い口縁部をもつ広口壺で、丸く仕上げた口縁端部に刻目を施紋している。(SK38の220と同一個体) 25は壺頸部片であり、4 + α 条の貼付突帯上に縦方向の棒状浮紋を3箇所貼り付けている。26、27、29～32は逆L字状口縁甕、28は如意状口縁甕である。29～32のように、ここでは大型品が比較的に見られる。33～39は壺底部片であり、40～43は甕底部片である。

SK05

№18から西へ7.5mの北調査区で確認した土坑である。東が水路に切られ、南が調査区外に広がるため全容は不明である。東西2.55m以上、南北0.90m以上、深さ0.25mである。土層埋土は単層で、3~5cm大の隙を多量に含むふい黄褐色シルト質極細砂である。遺物は甕片が1点出土している。

SK05出土遺物

44は逆L字状口縁甕であり、2条の櫛描沈線紋からやや下がった位置に篋状工具の刺突による列点紋を施している。櫛描沈線紋が少条であれ、特殊紋様は決まった位置に施紋するという固定された概念が存在していたと類推できる資料である。



1. 暗褐色細砂

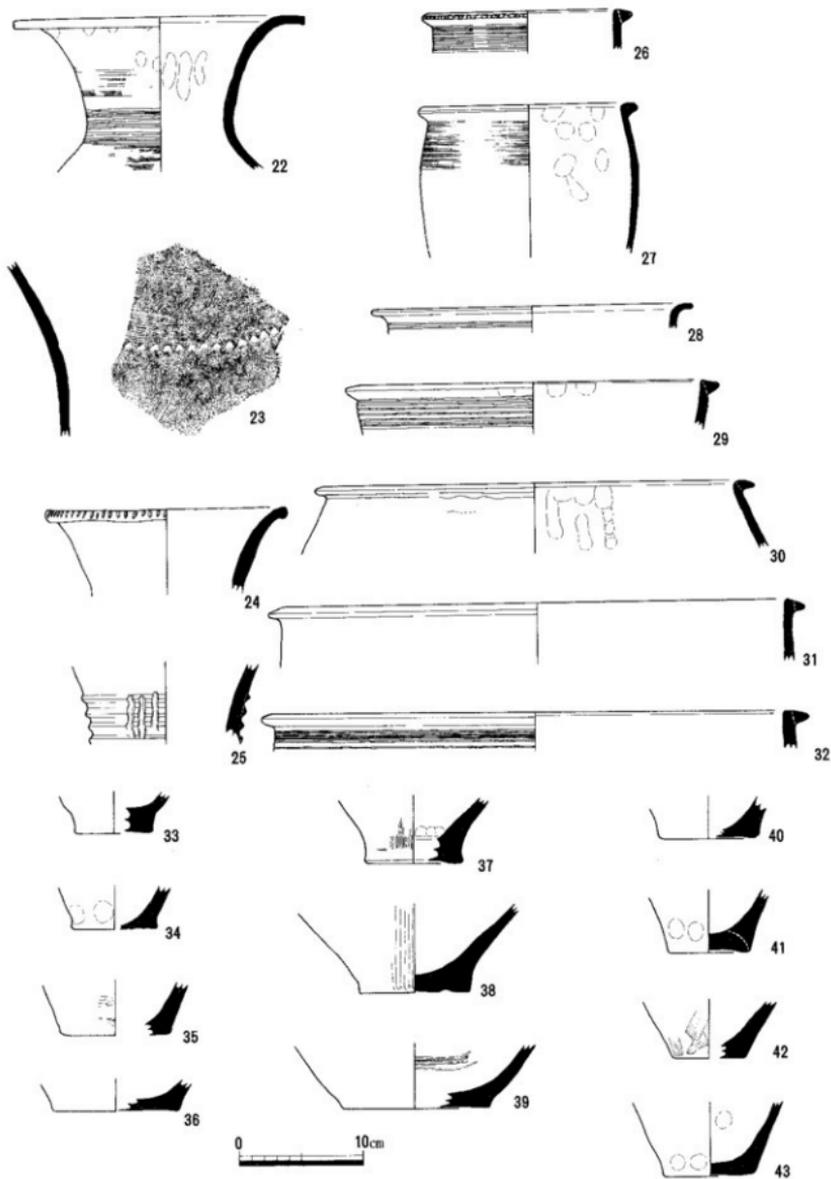
第14図 SK04平・断面図

SK07出土遺物

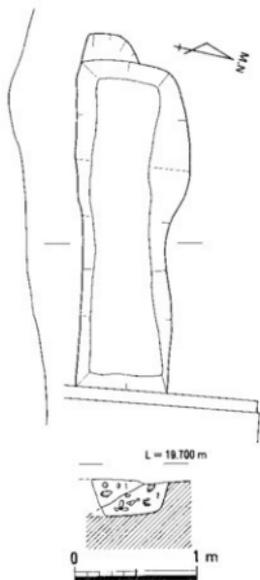
45は広口長頸壺、**46**は広口壺の口縁部~頸部片である。**45**は櫛描直線紋を施した細く窄まった頸部から、大きく外反する口縁部をもち、口縁端部は丸く仕上げている。**46**は短く立ち上がった頸部から、強く折れ曲がる短い口縁部を作出したプロポーションをもち、頸胴部界を櫛描直線紋で飾っている。**47**、**48**は垂直に立ち上がった壺の頸部片である。**47**は頸胴部を櫛描直線紋で施紋し、**48**は6条の櫛描原体で6+ α 段の櫛描直線紋により広範な施紋帯を構成している。**49**、**50**は広口長頸壺の口縁部である。**49**は口縁上端部を粘土貼り足しにより摘み上げ、口縁上端部・下端部を各々篋状工具により刻目を施している。**50**は面をもった口縁端部に篋状工具で刻目を巡らし、その上から櫛描沈線紋を1条加えており、頸部には稚拙な櫛描直線紋を施している。**51**は櫛描直線紋帯間に各々半截竹管による複線山形紋を施紋している。**52**は裾部を欠いた甕用の蓋である。**53**~**55**は逆L字状口縁甕であり、**56**~**58**は如意状口縁甕である。**53**は口縁上端部を上方に向けた逆L字状口縁甕である。**54**と**57**は櫛描直線紋帯の下位に櫛描波状紋を巡らしており、両者は紋様構成の類似点を指摘できるが、口縁部形態を異にするものである。しかし、**57**は口縁部を強く折り曲げ、逆L字状に仕立て上げていることから両系統を越えた影響関係が存在していたと類推できる。**59**~**61**は壺の底部片である。**62**~**64**は甕の底部片で、**62**は焼成後の底部穿孔をした甕底部片である。**S1**はサヌカイトのスクレイパーである。背部は敲打による背潰しを行う。刃部は両側からの調整により刃を作り出す。

SK07

№18から西へ10mの南調査区で確認した土坑である。南側部分が調査区外に広がるため全容は不明であるが、南北に長く不整形な土坑である。土坑の規模は長軸1.65m以上、短軸1.40m、深さ0.40mである。土層埋土は単層で暗褐色細砂である。土器は東半部に集中して出土している。



第15图 SK04出土器物实测图

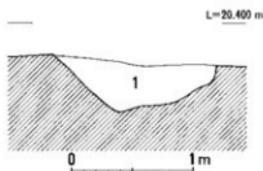
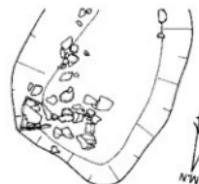


1. 赭灰色シルト (10 YR 5/1)
2. におい黄褐色シルト質砂礫砂 (10 YR 5/1)

第16図 SK05平・断面図



第17図 SK05出土遺物実測図



1. 暗褐色細砂

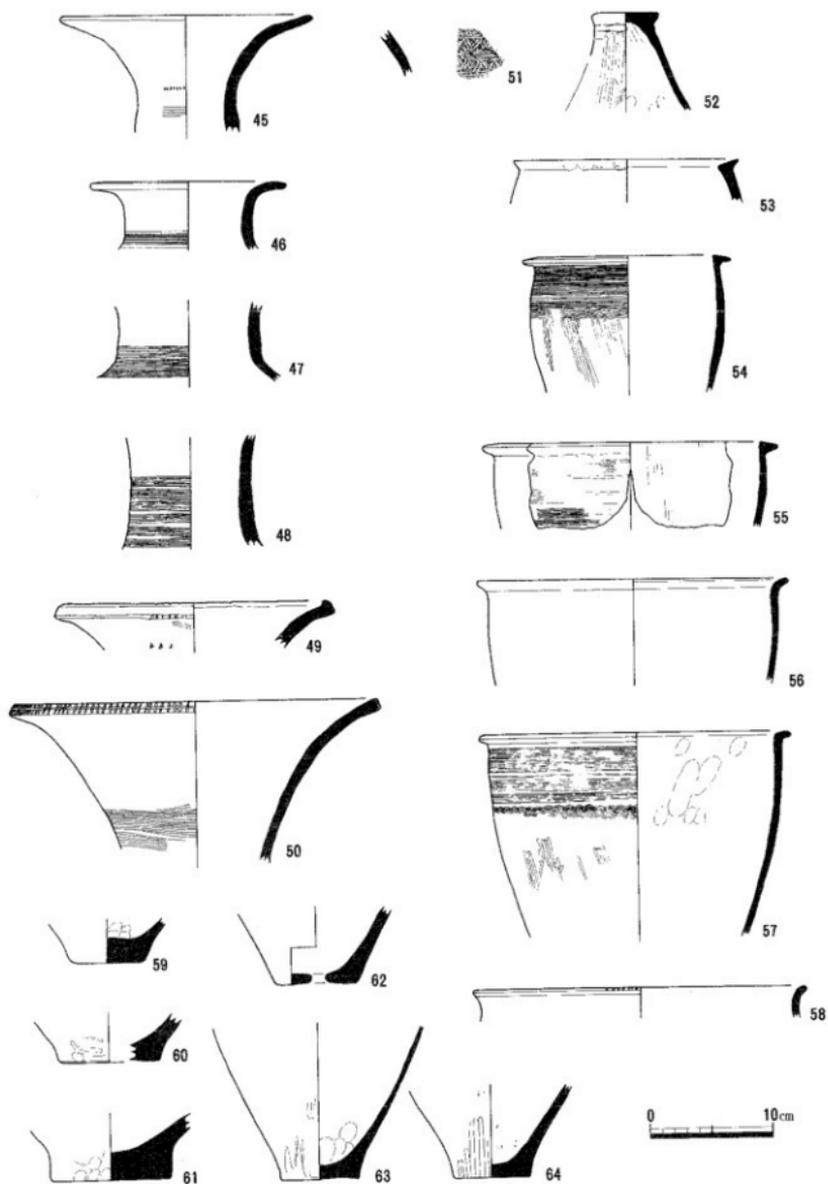
第18図 SK07平・断面図

SK08

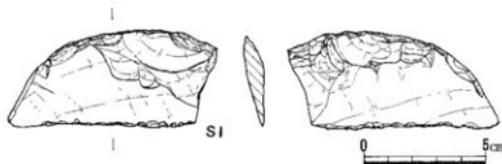
No.18から西へ10.5mの北調査区で確認した土坑である。平面形態は隅丸の長方形を呈する土坑である。土坑の規模は長軸1.45m、短軸0.60m、深さ0.25mであり、土坑底部は平坦である。平面検出の時点で上面から土器と拳大の石が多量に認められたことと、宮西・一角遺跡で確認している他の土坑が円形を呈すのに対して、長方形を呈する平面形態から、墓の可能性を考え調査を行ったが、上層で確認した多量の土器と石は土坑底部まで隙間がないほど認められた。断面観察により木棺痕跡等の確認を行ったが、確認できなかった。

SK08出土遺物

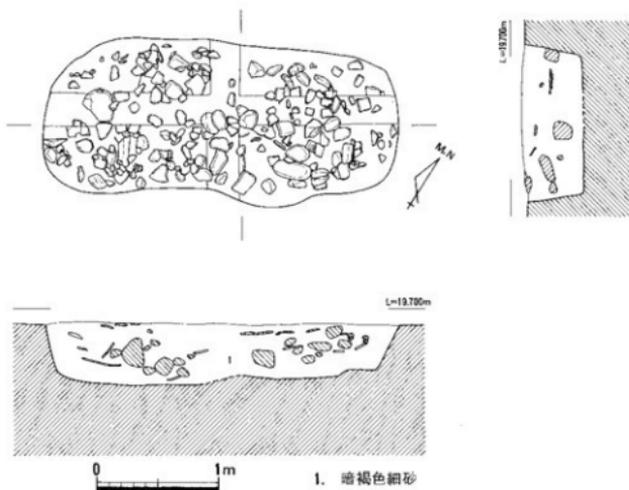
65～67は壺の口縁部片である。65は細く貧弱な内面突帯をもつ。66は通常1条の下地沈線がみられるが、上位から2段目に限っては半截竹管により構成している。のちに刻目貼付突帯を5+α条施している。71は口縁部内面を刻目貼付突帯と円形浮紋で装飾する。65、71は共に精緻なヘラミガキ調整で仕上げている。67は頸胴部片であり、下地沈線をもった刻目貼付突帯を4+α条施している。また、形態と紋様構成から66と同一個体の可能性が示唆される。68は刻目貼付突帯をもった壺の頸部片である。69～75は壺の胴部片である。櫛描直線紋で飾ったもの69、70、貼付突帯を巡らしたもの72、籠描沈線紋を施したもの74、75とがある。また73は櫛描直線紋の中央に半截竹管紋を巡らせ、その上・下に半截竹管による複線山形紋を施紋している。76～80は壺の口縁部



第19图 SK07出土遗物实测图(1)

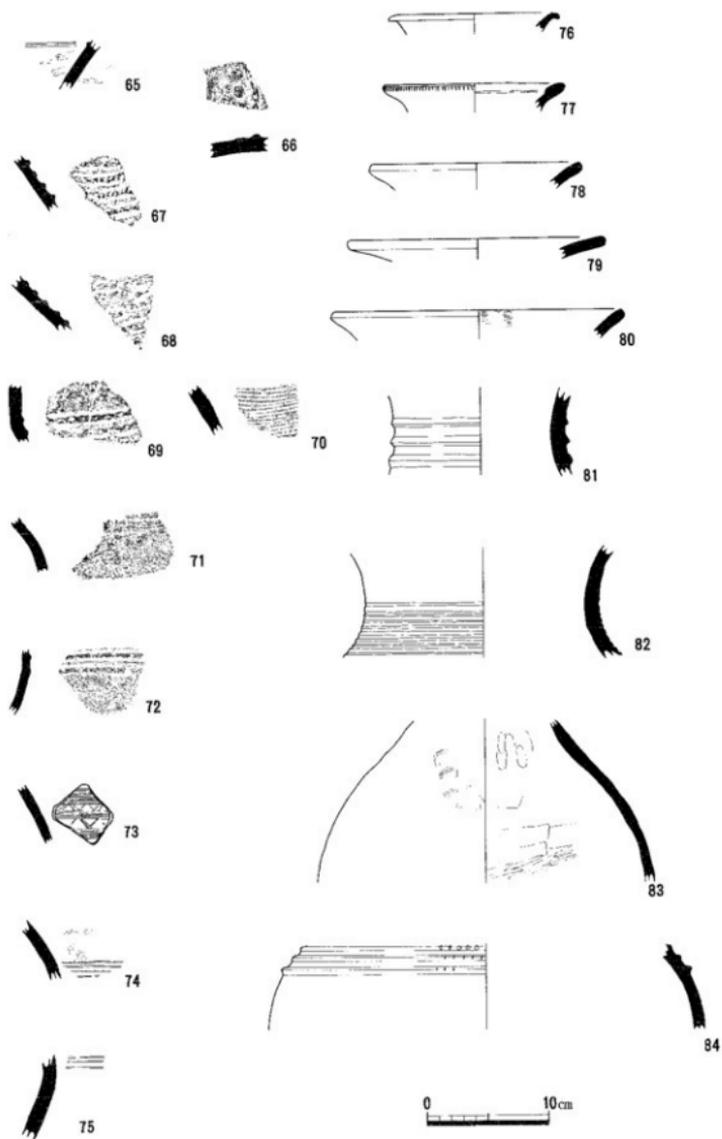


第20図 SK07出土遺物実測図(2)

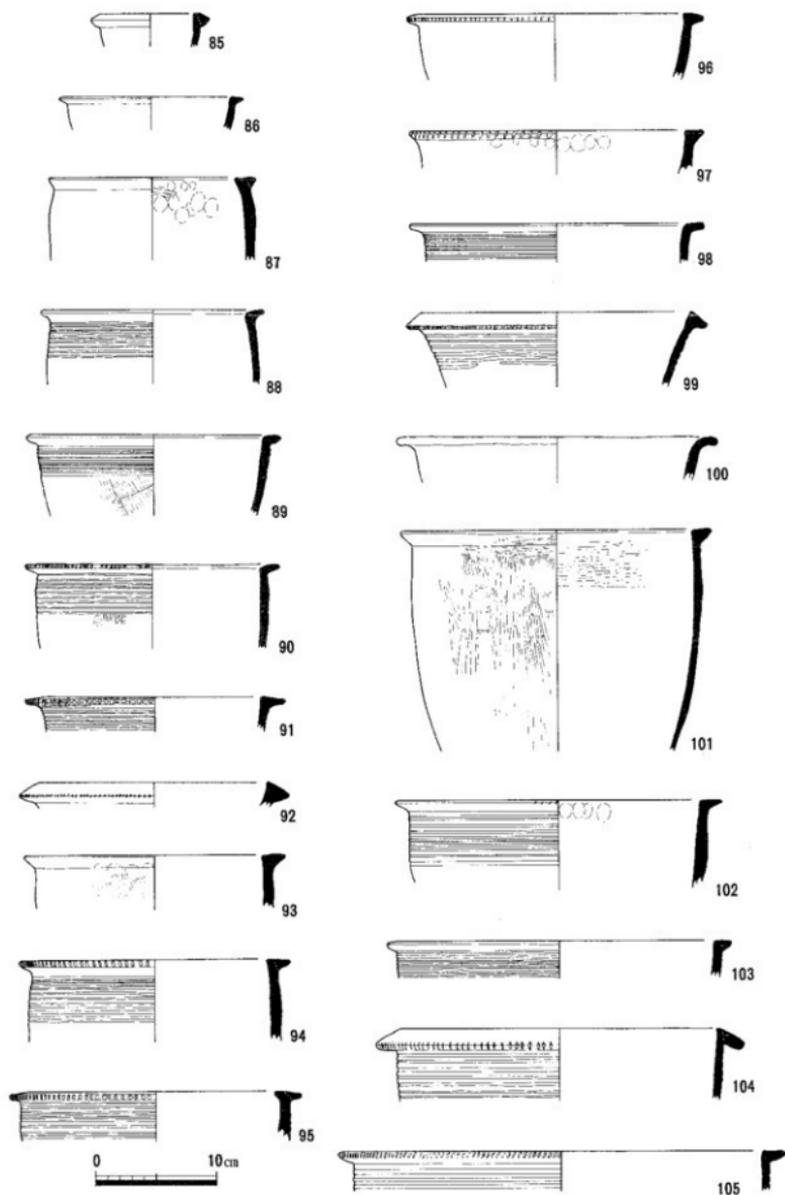


第21図 SK08平・断面図

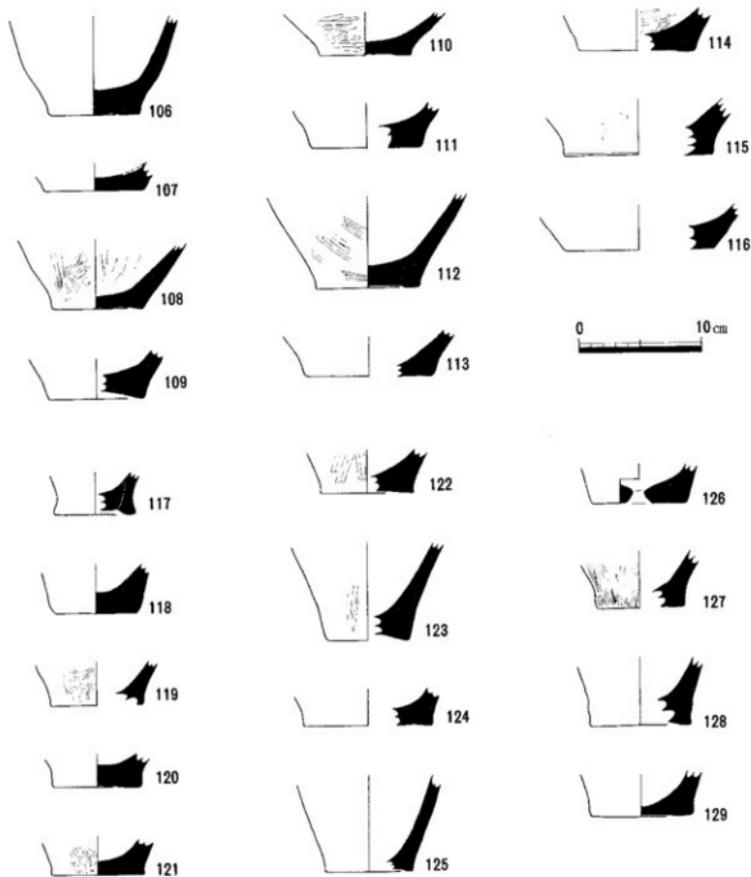
片である。76は口縁部を「く」字に折り曲げ、垂下させたものや、77は口縁部内面に粘土を貼り足し肥厚させた口縁部をもつもので、東北部九州に同様な形態が多く認められる。西部瀬戸内地域の影響を受けたものであり、特徴あるモデルが存在する。81は無刻の貼付突帯を3+ α 条巡らしたもの、82は9+ α 条の籠描沈線紋を加えた壺頸部片である。83は球形の胴部から頸部にかけて緩やかに窄まるプロポーションをもつ。84は壺胴部片であり、下地沈線を採用せずに頸胴部に刻目を有する貼付突帯を3+ α 条施している。85~105は口縁部形態を良好に看取でき、主体を占める逆L字状口縁甕と如意状口縁甕88、156が少量併存する甕の一群である。88~99と100~104は各々口径値をほぼ揃えており、土器サイズの画一化の概念が存在していたことが類推できる資料群である。欠損資料が大半ではあるが有紋の甕には、施紋帯の間や最下部に特殊紋様をもたないことが当一群の特徴といえる。また85は口径7cmの小型品であり、87、89、99は下地沈線をもつ逆L字状口縁甕と考えられる。106~116は壺底部片であり、117~123、125~129は甕底部片である。126は焼成後の底部穿孔である。S2はスクレイパーである。背部は敲打による背潰しを行い、刃部は両面からの調整により刃を作る。背部付近に使用によると思われる摩耗が広範囲に認められる。S3は



第 2 2 图 SK 0 8 出土物实测图 (1)



第 2 3 图 SK 0 8 出土物实测图 (2)



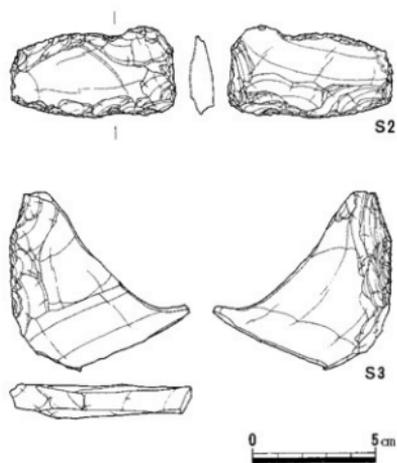
第24図 SK08出土遺物実測図(3)

打製石斧と考えられる。使用による破損が片側の側面部分しか残存していない。側面部分には敲打による刃潰しが認められる。

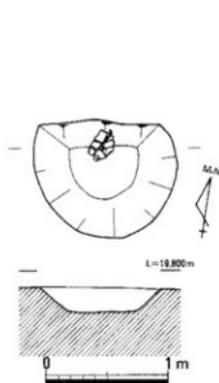
SK09

No.18から西へ1.4mの北調査区で確認した土坑である。北側の一部が調査区外に広がるが、ほぼ円形を呈する土坑であると考えられる。土坑の規模は東西1.15m、南北0.95m以上、深さ0.19mである。土器は北側寄りで甕を転用した甕の底部が出土している。

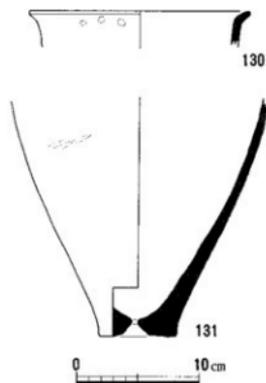
SK09出土遺物



第25图 SK08出土遗物实测图(4)



第26图 SK09平·断面图

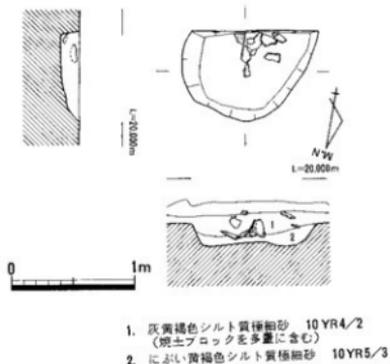


第27图 SK09出土遗物实测图

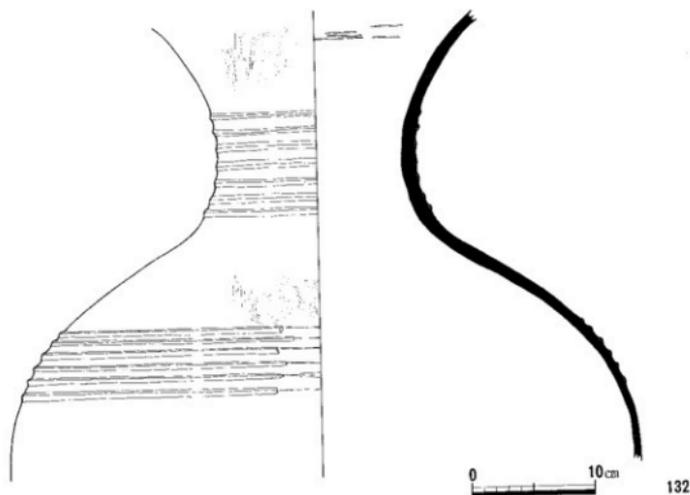
130は無紋の如意状口縁甕の口縁部片であり、131は口縁部～頸部を欠いた焼成後の底部穿孔を有する甕の部品である。

SK10

No.18から西へ14.5mの北調査区で確認した土坑である。南側は調査区外に広がるため全容は不明であるが、円形に近い形状を呈するものと考えられる。土坑の規模は長軸1.10m、短軸0.70m、深さ0.25mである。土層埋土は2層に分かれ、上層は灰黄色シルト質極細砂、下層は黄褐色シルト極細砂である。この内上層からは多量の焼土塊と弥生土器の壺一個体分が出土した。検出当初は土坑上面に広がる焼土から土器焼成土坑と考えたが、土坑壁面には高熱による赤変が認められないことからその可能性は少ないものと考えられる。埋土のうち下層からは焼土塊は認められないこと、弥生土器の焼成が甘いことなどから、土坑がある程度埋没した後、弥生土器は焼土塊とともに廃棄された可能性が高い。



第28図 SK10平・断面図



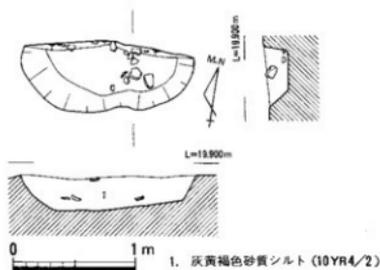
第29図 SK10出土遺物実測図

SK10出土遺物

132は大型の広口長頸甕である。球形の胴部から頸部にかけて窄まり、頸胴部付近を変換点とした

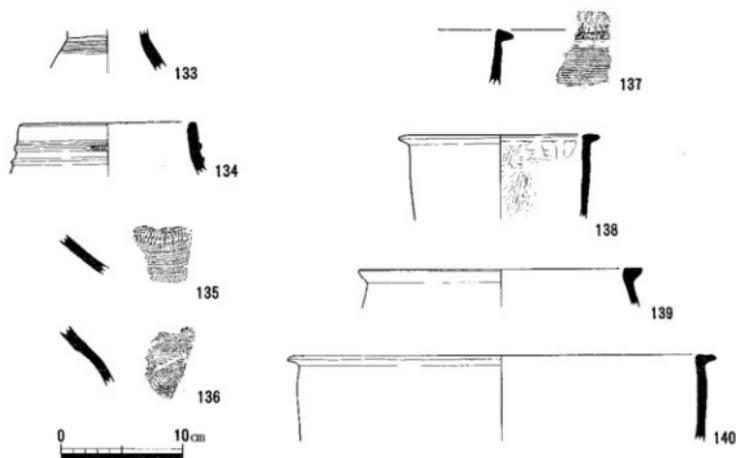
立ち上がりぎみの頸部に加え、口縁部が大きく外反するプロローションをもつ。紋様は下地沈線を用いた無刻の貼付突帯を頸部には7条、胴上部には6条巡らしている。さらに口縁部内面には4条前後の籬描沈線紋により装飾している。

SK 11



第30図 SK 11平・断面図

133は壺の頸胴部片であり、櫛描原体5条の櫛描直線紋1+ α 段を施す。134は貼付突帯2+ α 条を巡らし、上段のみ刻目を施した無頸壺である。135、136は壺の頸胴部片である。135は櫛描直線紋帯間を2段に渡って籬状工具の刺突による細かい列点紋で加飾し、136は櫛描直線紋帯の下位に櫛描波状紋を施紋している。137～140は逆L字状口縁甕である。137は櫛描直線紋で飾り、138は内面をヘラミガキ調整で精緻に仕上げている。139は如意状口縁の頸部屈曲部内面に粘土を貼り足して、口縁部上面を平坦に仕上げている。逆L字状口縁甕を意識した製作を行っている。



第31図 SK 11出土遺物実測図

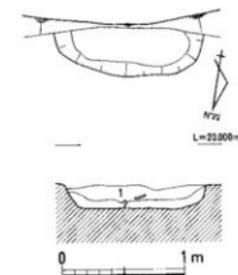
SK 15

No.19から西へ1.2mの北調査区で確認した土坑である。遺構の南半が調査区外に広がるため全容は

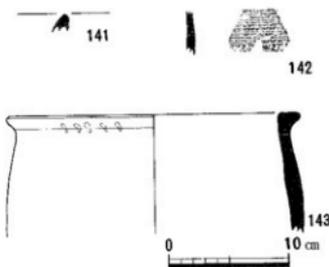
不明である。東西1.20m、南北0.40m以上、深さ0.20mである。土層は2層に分かれ上層はにぶい黄褐色シルト質極細砂、下層は褐灰色シルト質極細砂である。

SK15 出土遺物

141は甕の口縁部片である。142は甕胴部片であり、楕直



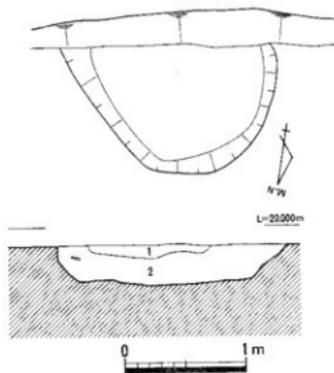
1. にぶい黄褐色シルト質極細砂 (10YR3/2)
2. 褐灰色シルト質極細砂 (7.5YR4/1)



第33図 SK15 出土遺物実測図

第32図 SK15平・断面図
線紋帯の下位には籠状工具の刺突による列点紋を施紋する。143は無紋の逆L字状口縁甕である。

SK17



1. オリーブ褐色砂質シルト 2.5Y4/3
2. 暗褐色砂質シルト 10YR3/3

第34図 SK17平・断面図

である。S6は基部を欠損するが、その他は完形である。S8は打製石包丁の刃部の破片である。S9はスクレイパーである。刃部は両面からの粗い調整が認められる。

SK18

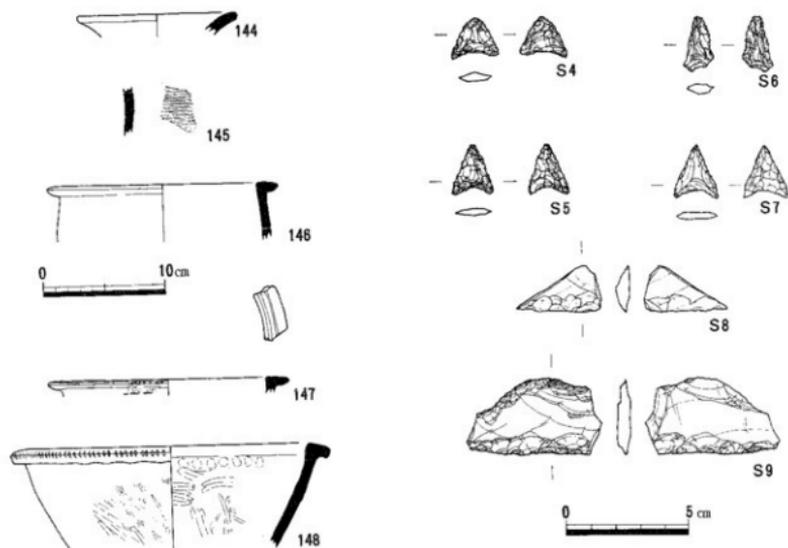
No.20から西へ4mの北調査区で確認した土坑である。遺構の半分近くが調査区外に広がるため全容は不明であるが南側の形状から円形に近い平面形になるものと考えられる。土坑の規模は、長軸0.90m、短軸0.45m以上、深さ0.20mである。土層埋土は2層に分かれ上層は灰黄褐色砂質シルト (10YR 4 /

No.19から西へ13.5mの北調査区で確認した土坑である。遺構の北半が調査区外に広がるため全容は不明であるが、楕円形を呈するものと考えられる。長軸1.50m以上、短軸1.45m、深さ0.18mである。土層は2層に分かれ、上層はにぶい黄褐色シルト質極細砂、下層は褐灰色シルト質極細砂である

SK17 出土遺物

144は壺口縁部片であり、145は多条沈線施した甕胴部片である。146・147は逆L字状口縁甕であり、147は口縁部上面に2条の籠描沈線紋を施紋している。同様の部位に施紋するものは伊予中部地域にみられる。148は逆L字状口縁の鉢であり、面を持った口縁端部に刻目を加え、内・外面をヘラミガキ調整で仕上げている。S4～7は凹基式の石鏃で

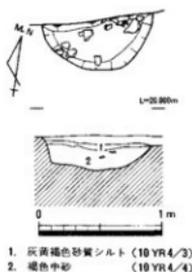
3), 下層は褐色中砂 (10YR 4/4) である。



第35図 SK17出土遺物実測図

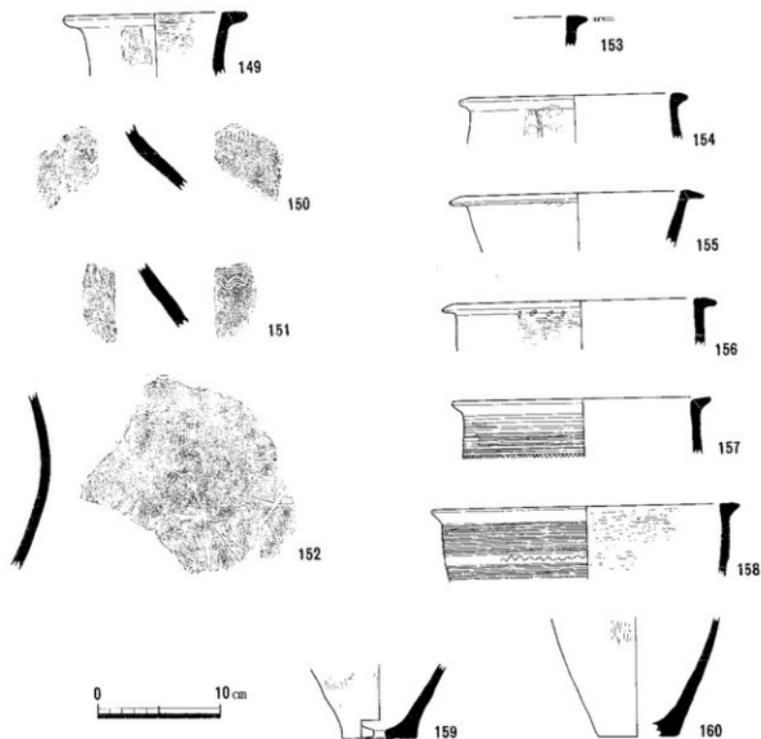
SK18出土遺物

149は壺の口縁部片であり、貼付口縁により口縁部形態を逆L字状に仕立て上げたモデルである。内面を横方向のヘラミガキ調整により仕上げている。なお、断面観察から下地沈線の存在を確認できる。150、151は壺の頸胴部片である。150は櫛描直線紋帯の最下部を篋状工具の刺突による列点紋、151は歪な櫛描波状紋で飾っている。152は壺胴部片である。153～158は逆L字状口縁形態であり、155の鉢以外は甕である。口縁端部は無刻のものが主体であり、156、158のように内・外面を各々ヘラミガキ調整で精緻に仕上げているものも存在する。157は篋描沈線紋帯の下位に板状工具の刺突による三角形列点紋を、158は篋描沈線紋帯間に山形紋が崩れたような稚拙な篋描波状紋を施している。159、160は甕底部片であり、159は焼成後の底部穿孔を穿っている。



第36図 SK18平・断面図

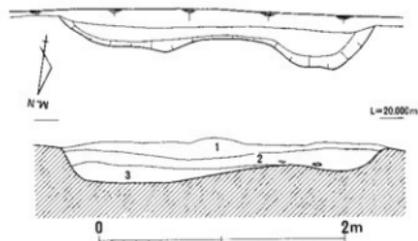
形紋が崩れたような稚拙な篋描波状紋を施している。159、160は甕底部片であり、159は焼成後の底部穿孔を穿っている。



第 3 7 図 SK 1 8 出土遺物実測図

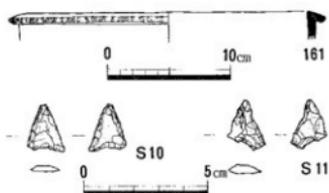
SK 2 0

No. 2 0 から 7 m の北調査区で確認した土坑である。遺構の大半が南側の調査区外に広がるため全容は不明である。土坑の規模は東西 2.55m, 南北 0.40m 以上, 深さ 0.30m である。土層埋土は 3 層に分かれ、



1. にぶい黄褐色砂質シルト (10YR4/2)
2. 灰黄褐色砂質シルト (10YR4/3)
3. 褐色中砂 (10YR4/4)

第 3 8 図 SK 2 0 平・断面図



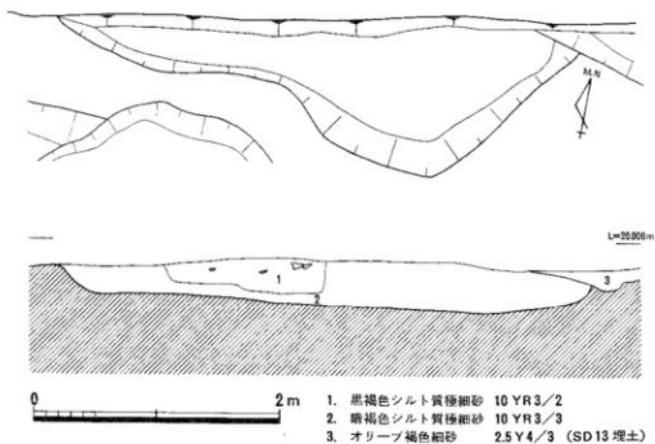
第 3 9 図 SK 2 0 出土遺物実測図

上から1層はぶい黄褐色砂質シルト、2層は灰黄褐色砂質シルト、3層は褐色中砂である。

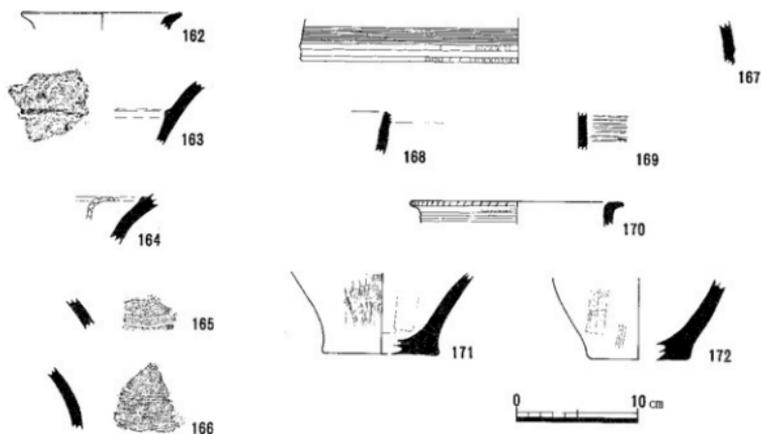
SK20出土遺物

161は刻目をもった口縁端部を下方に向けた逆L字状口縁甕である。S10、11は凹基式の石甕である。S11は基部を欠損している。

SK24



第40図 SK24平・断面図



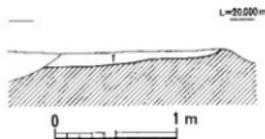
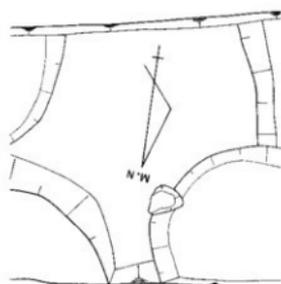
第41図 SK24出土遺物実測図

№21の北調査区で確認した土坑である。遺構の大半は北側の調査区外に広がるため全容は不明であるが確認した部分では不整形な平面形を呈する。土坑の規模は東西4.40m、南北1.20m以上、深さ0.40mである。土層埋土は2層に分かれ、上層は黒褐色シルト質極細砂、下層は暗褐色シルト質極細砂である。

SK24出土遺物

162～164は壺の口縁部片である。163、164には各々突出度の弱い断面三角形の内面突帯を施し、164は刻目を施した突帯を完結させず巻き込み、開口部を作り出したモデルの部品とみられる。内面突帯を成形した後に内面をヘラミガキ調整で仕上げている。165～167は壺の胴部片である。165は4条の籬描直線紋、166は $8+\alpha$ 条の緻密な籬描沈線紋を胴上部に施紋している。167は胴部最大径位置に6条の籬描直線紋とその下位に2条の刻目を有する貧弱な貼付突帯を巡らしており、形態や紋様構成からSR03の541と同一個体としての存在が示唆される。168は貼付口縁が剝落した無紋の逆L字状口縁甕であり、169は籬描沈線紋を $7+\alpha$ 条施紋した甕胴部片である。170は $2+\alpha$ 条の籬描沈線紋をもつ逆L字状口縁甕であり、口縁端部に刻目を施し、内面及び口縁部上面までヘラミガキ調整で器面を磨いている。171、172は甕底部片である。安定した厚めの平底から斜め上方に直線的な171と内彎ぎみに立ち上がる170とがある。171は粗い縦位のハケ調整が確認できる。

SK26



1. 暗褐色細砂 (10YR4/3)

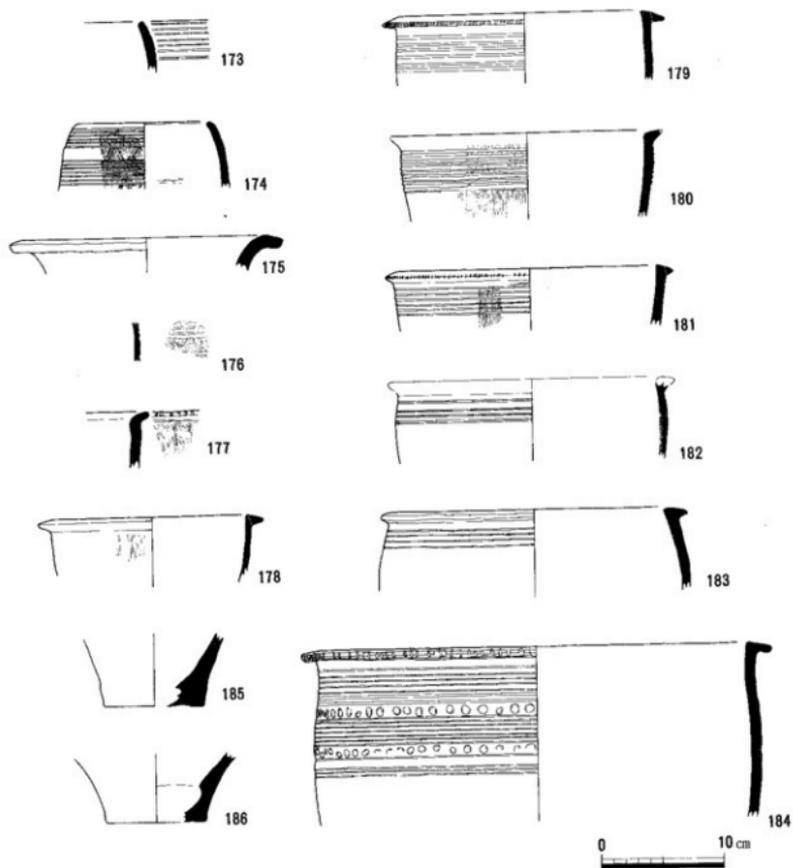
第42図 SK26平・断面図

無紋の逆L字状口縁甕であり、179、180は甕の底部片である。179～183は口径をほぼ揃えており、各々4～8条の籬描沈線紋を施すが、その下位や沈線間には特殊紋様はみられない。179、

№21から西へ2.5mの北調査区で確認した土坑である。近世の土坑であるSK25に南東部分を切られ、北東部分を平安時代のSK27に切られる。遺構自体も南北に広がるため、どのような平面形になるのか不明である。現状で判明する土坑の規模は東西2.60m、南北2.05m以上、深さ0.20mである。土層は単層で暗褐色細砂である。遺物は土坑中央部付近から土器がまとまって出土している。

SK26出土遺物

173・174は無頸壺で各々籬描沈線紋に加飾しており、174は緩やかに内彎する口縁部形態をもち、口唇部は内側に折れ曲がるモデルである。籬描沈線紋帯間に半截竹管による複線山形紋を施紋している。175は壺の口縁部であり、口縁部先端を強く外反している。176は甕の胴部片であり、籬描沈線紋帯間に半截竹管による複線山形紋を施紋する。177は短く外反した口縁端部に籬状工具による刻目を施紋し、頸部から下位にかけて細かい縦位のハケ調整を施す如意状口縁甕である。178は無



第43図 SK26出土遺物実測図

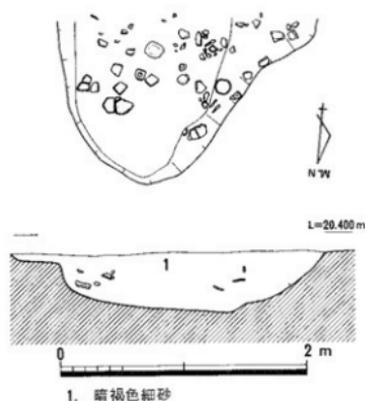
181は下地沈線を有する逆L字状口縁甕であり、両者とも胴部に6条の籠描沈線紋を施している。180は施紋帯最下段にあたる籠描沈線紋の下端を板状工具により削り出している。184は大型の逆L字状口縁甕であり、紋様構成に注目される。7条を基調とした籠描沈線紋帯間に、各々円形浮紋を貼り付ける特徴をもつ。また、182～184には下地沈線を施した可能性は低い。

SK28

No.21から西へ4.5mの北調査区で確認した土坑である。平安時代の土坑SK27に切られるため全

体の平面形は不明であり、確認できる部分は東の肩のみであることから土坑の規模についても判明しない。土層埋土にはふい黄褐色細砂の単一層である。遺物の出土もみられないことから自然の落ち込みの可能性が考えられる。

SK 29



第44図 SK 29平・断面図

1. 黄褐色細砂

192～197は中型，198は大型の逆L字状口縁甕である。192は貧弱な貼付口縁を採用している。195は櫛描原体4条の櫛描直線紋を4段加え，その下位に板状工具の刺突による三角形列点紋を施紋し，外面は横方向，内面は縦方向のヘラミガキ調整で仕上げている。196は櫛描原体6条の櫛描直線紋を4段巡らし，その下位に半截竹管による複線波状紋の一部が認められる。198は口縁端部に布目圧痕が残る刻目を用いた大型品である。199，200は壺の底部片であり，201～207は甕の底部片である。206は底縁部から底にかけて斜め方向の穿孔が2箇所みられ，2孔1対が対称側にも存在していたと推測する。

SK 35

No. 24から西へ12mの南調査区で確認した土坑である。調査区南に設定したトレンチで遺構を破壊してしまい土層断面で遺構の規模を推定するのみである。土坑の規模は東西0.80m，深さ0.30mである。土層埋土は黒褐色砂質シルトの単一層である。遺物は南壁の土層断面から弥生土器が出土している。

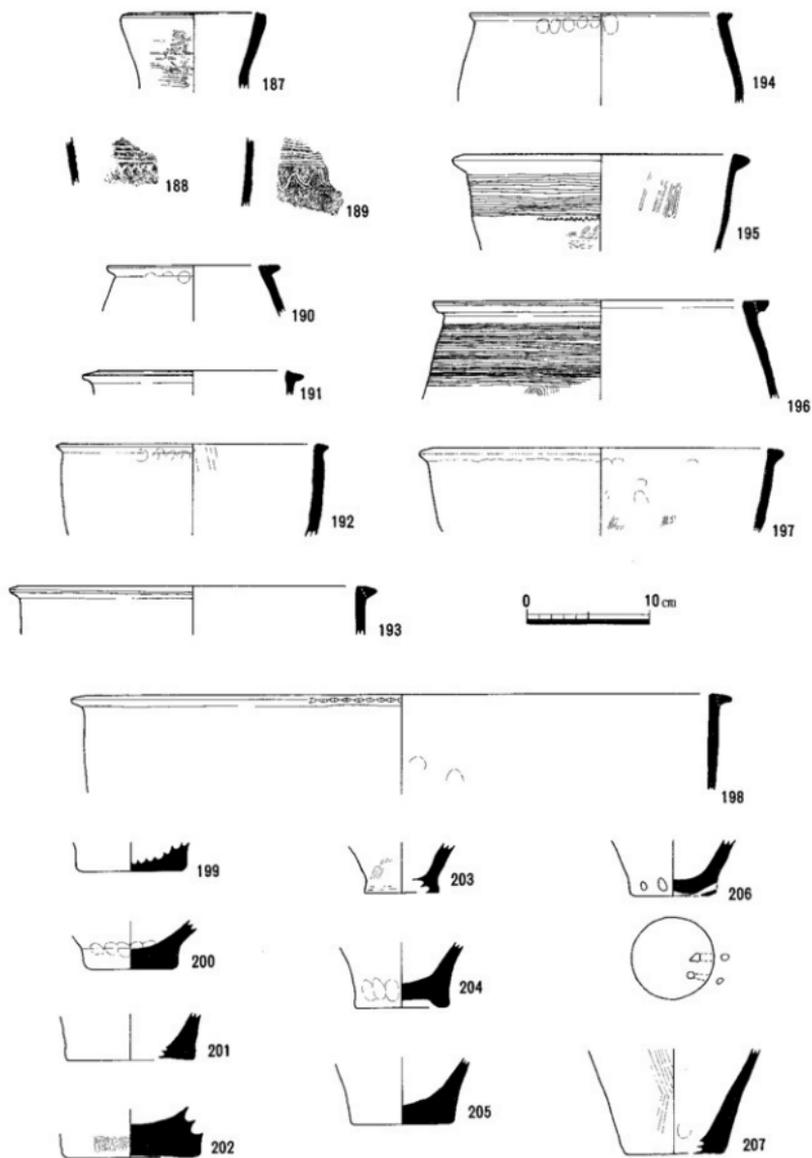
SK 35 出土遺物

208は裾部を欠くつまみ部のみが残存する甕用の蓋である。209～214は甕の口縁部～胴部片で，口縁端部には刻目が無く胴部は張らない器形が主体である。逆L字状口縁甕には209，212に

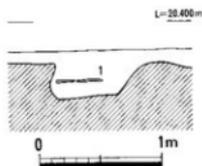
No. 22から西へ9mの南調査区で確認した土坑である。遺構の南半は調査区外に広がるため全容は不明であるが，北半の状況からすれば不整形な形状の土坑であると考えられる。土坑の規模は東西2.10m，南北1.65m以上，深さ0.25mであり，中央部にいくにしたがって深くなる。土層埋土は暗褐色細砂の単一層である。遺物は土坑全体から多量に出土している。

SK 29 出土遺物

187は直口口縁で口縁部は僅かに内傾している壺であり，口縁端部を凹状に成形し，外面は縦方向のち横位のヘラミガキ調整で仕上げている。直口壺は出土土器中1点のみである。188，189は甕の胴部細片である。188は櫛描沈線紋帯の下位に籠状工具による稚拙な「×」印の列点紋を，189は櫛描直線紋帯下部に半截竹管による歪みが激しい複線波状紋を各々施紋している。190，191はやや小型



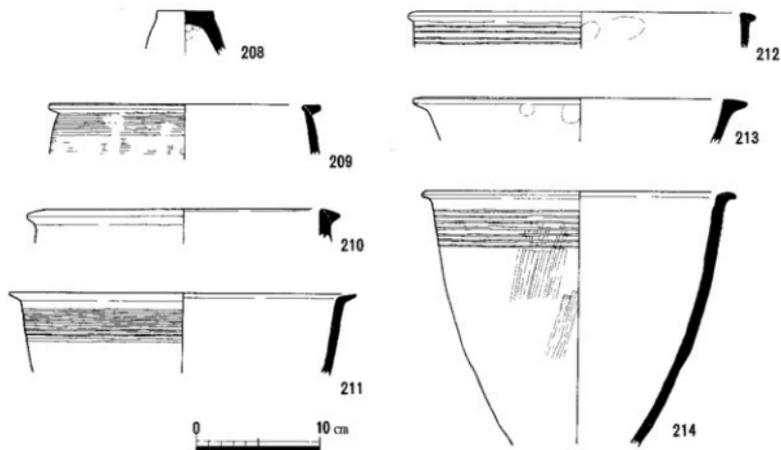
第45图 SK29出土遗物实测图



1. 黒褐色砂質シルト

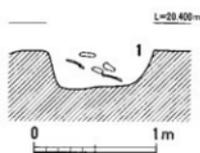
第46図 SK35断面図

みられる籠描沈線紋で飾っているものと、210、213の無紋とがある。強く外反した如意状口縁形態をもつ211・214の甕には籠描沈線紋で加飾している。また214の外面には縦位の粗いハケ調整が看取できる。211は如意状口縁甕であり、籠描沈線紋7条を巡らせる。



第47図 SK35出土遺物実測図

SK 36



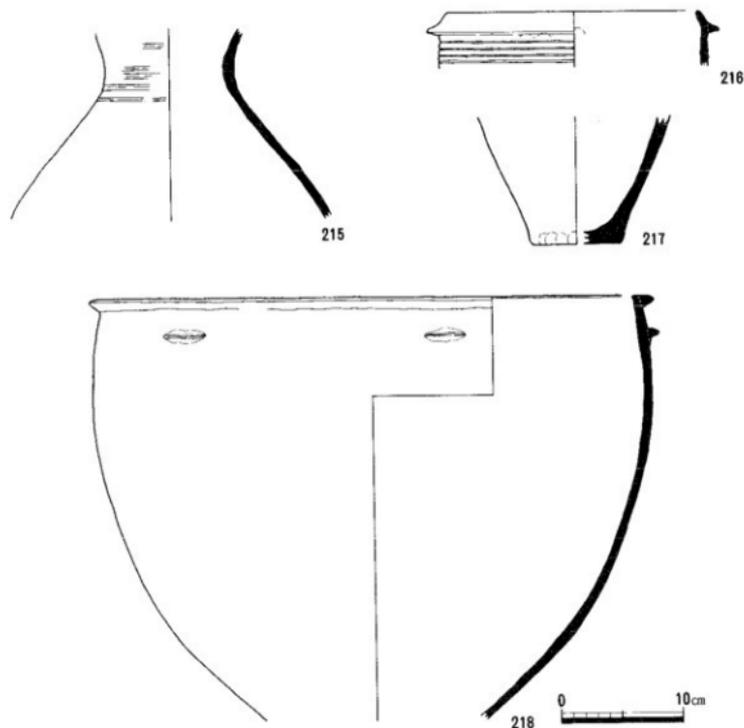
1. 黒褐色砂質シルト

第48図SK36平・断面図

No.24から西へ15mの南調査区で確認した土坑である。調査区南側に設定したトレンチで確認した土坑である。南側は調査区外に広がるため不明であり、北側は掘削を行っていないことから南側と同じく不明である。トレンチ内の状況から判明する土坑の規模は東西0.85m、南北0.45m以上、深さ0.40mである。土層埋土は黒褐色砂質シルトの単一層である。遺物は土坑の中位から弥生土器が出土している。

SK 36 出土遺物

215は口縁部と胴部下位を欠いた壺である。球形と推測される胴部から口縁部が緩やかに屈曲して外反する器形をもつ。土器全体が摩滅により調整痕や正確な施紋数数の確認は

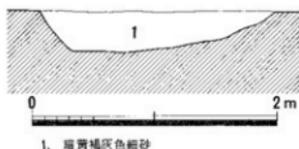
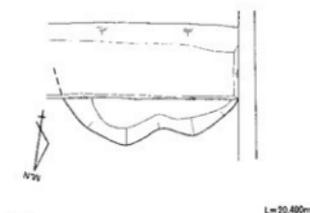


第49図 SK36出土遺物実測図

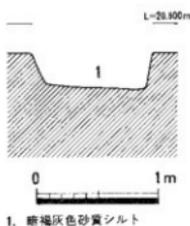
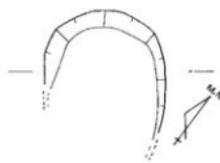
困難ではあるが、頸胴部界に籠描沈線紋を $4 + \alpha$ 条施しているのが窺える。216は口縁端部からやや下がった位置に無刻の突帯を貼り付けるモデルであり、突帯部位から上方は内傾する特徴をもつ。また土器全面をナデ調整で仕上げ、突帯下位には籠描地線紋を $4 + \alpha$ 条施紋している。218は逆L字状口縁形態の大型品の鉢であり、丸みを帯びた胴部を有するプローションである。口縁部下位には横位に扁平な瘤状把手が2箇所確認でき、推定復元すると4箇所あったと推測される。なお調整は不明である。217は甕の胴下部から底部の破片であり、底縁部は横ナデ調整により指頭圧痕が認められる。

SK37

No.25の南調査区で確認した土坑である。遺構の大半は南側に設定したトレンチに切られるのと調査区外に広がるため、全容は不明である。土坑の規模は南側の土層断面による観察などから東西1.90m以上、南北1.00m以上、深さ0.30mである。土層埋土は暗黄褐灰色細砂の単一層である。



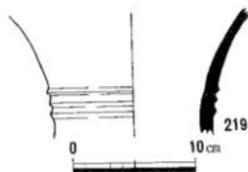
第50図 SK 37 平・断面図



第52図 SK 38 平・断面図

SD 11

No. 17から西へ6.5mの北調査区で確認した溝である。南北とも新しい遺構によって切られるため延



第51図 SK 37 出土遺物実測図

SK 37 出土遺物

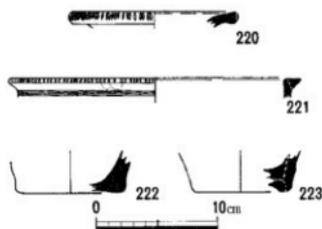
219は口縁部を欠損する広口壺の口縁部である。頸部に断面三角形の貼付突帯を3条巡らす。

SK 38

No. 25から西へ2mの南調査区で確認した土坑である。南側に設定したトレンチによって南半部の状況が不明であるが円形に近い平面形態をするものと考えられる。土坑の規模は東西1.10m、南北0.80m以上、深さ0.27mである。

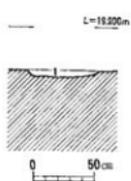
SK 38 出土遺物

220は壺の口縁部である。口縁端部は丸く仕上げ、筒状工具による刻目を施している。221は逆L字状口縁甕で口縁上端部は平坦に仕上げ、端部には筒状工具によるやや細かい刻目を施す。頸部外



第53図 SK 38 出土遺物実測図

面には籬描沈線紋を2+ α 条施紋している。222、223の甕の底部片である。222はやや薄めの平底であり、223は厚めの上げ底となっている。いずれも底径約4cmの底部から斜め上方に直線的に立ち上がるものである。

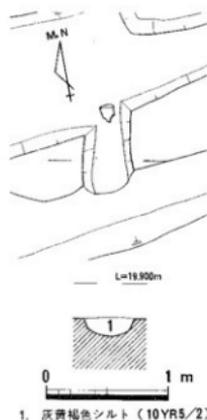


1. 褐灰色シルト質極細砂

第54図 SD11断面図

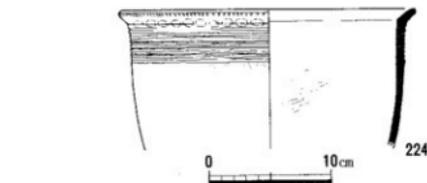
長は不明であり、溝の規模は幅0.60m、深さ0.05mである。土層埋土は褐灰色シルト質極細砂である。遺物は出土していないが後述するSD12から前期の土器が出土していること、溝の方向が同じことなどから前期の遺構とした。

SD12



1. 灰黄褐色シルト (10YR5/2)

第55図 SD12平・断面図



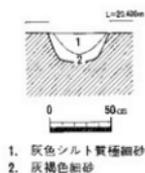
第56図 SD12出土物実測図

Na17から西へ8.5mの北調査区で確認した溝である。SD11同様南北とも新しい遺構によって切られるため延長は不明であり、溝の規模は幅0.40m、深さ0.15mである。土層埋土は灰黄褐色シルトの単一層である。遺物は弥生土器の甕が1点出土している。

SD12出土遺物

224は如意状を呈する甕の口縁部～胴部片である。口縁部内面に稜をもち、口縁端部に籬状工具による刻目を施し、胴部には篋描沈線紋を8条巡らす。胴部外面にはハケ調整、内面にはヘラミガキ調整が一部認められる。

SD20

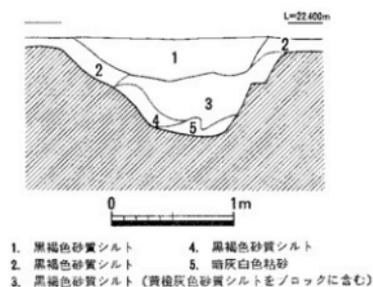


1. 灰色シルト質極細砂
2. 灰褐色細砂

第57図 SD20断面図

Na22から西へ18mで確認した溝である。南側調査区では蛇行し、北側調査区で確認した延長と考えられる溝も蛇行する。幅0.25m、深さ0.25mである。土層埋土は2層に分かれ、上から褐黒灰色細砂、暗黄褐色細砂である。遺物は出土していないが、古代以降の溝が条里方向他、一定の方向を向き直線的であるのに対して当溝は蛇行する点、周辺では弥生時代前期の遺構が多く確認されていることなどから、同時期の遺構と考えられる。

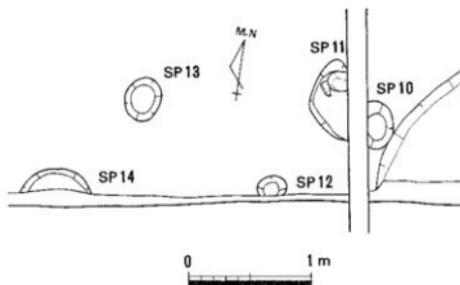
SD 2 3



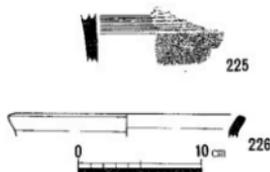
第58図 SD 2 3断面図

No. 2 4から西へ9 mの南調査区で確認した溝である。近世の溝であるSD 2 3と重複関係にあるため平面プランは不明であるが南北溝であると考えられる。南側の土層断面から想定される溝の規模は幅1.90m、深さ0.65mである。土層埋土は黒褐色砂質シルトが堆積の大半を占め、最下層に暗灰色粘砂が堆積する。遺物の出土はないが土層埋土およびSD 1 2と同様の方向を向くことから弥生前期の遺構の可能性が考えられる。

I SP 1 0 ~ 1 4



第59図 I SP 10~14平面図



第60図 I SP 10, 11出土遺物実測図

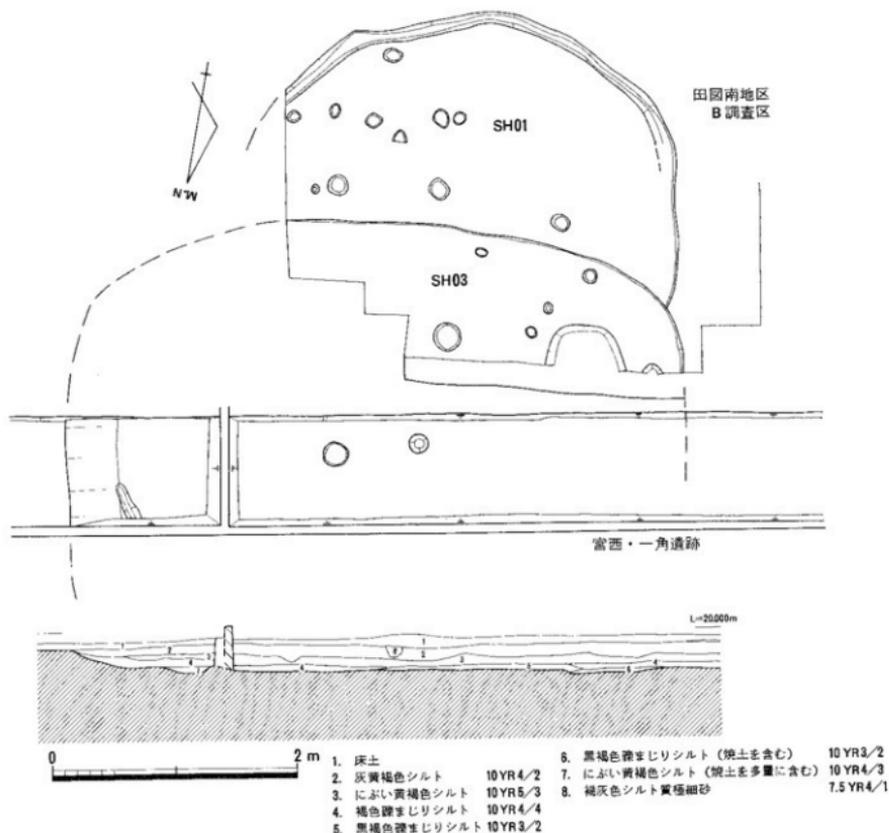
No. 2 0から西へ9 mの南調査区で確認したピット群である。掘立柱建物か堅穴住居の柱穴と考えられるが、調査範囲が狭いこともあり、ピットの広がり、構成等は不明である。確認したピットの規模は直径0.25~0.6mと一定でなく、深さについても後世の削平によるものか0.03~0.10mと非常に浅い。土層埋土はいずれのピットも暗褐色砂質シルトである。SP 1 0, 1 1からは甕の破片が出土している。

SP 1 0, 1 1出土遺物

2 2 5は口縁部が欠損した甕の破片である。胴部外面には襷描洗線紋が8 + α 条施されている。2 2 6は如意状口縁甕である。

第2節 弥生後期の遺構と遺物

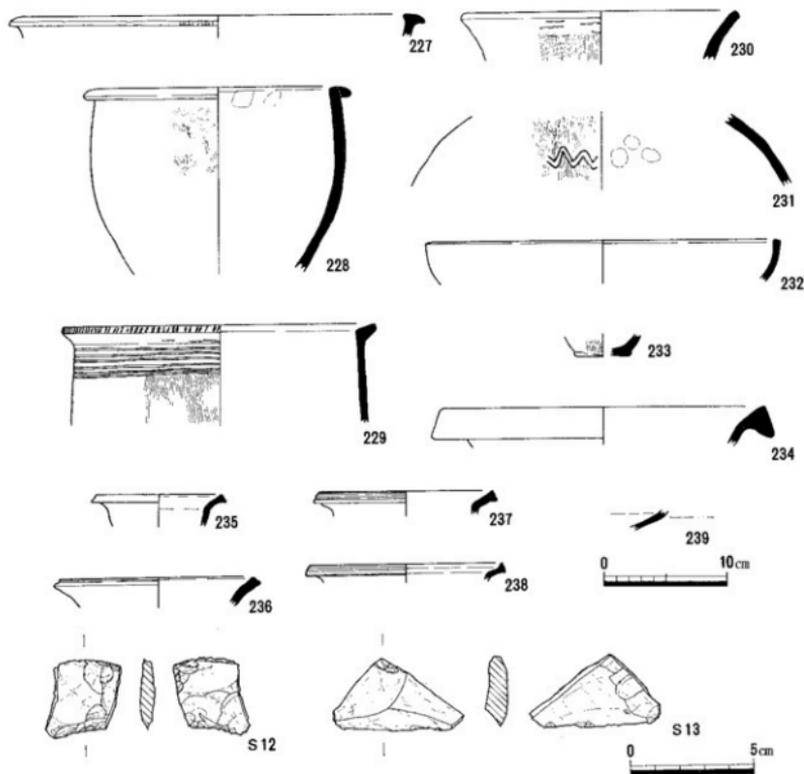
SH01



第61図 SH01平・断面図

No.16から西へ15mの南調査区で確認した竪穴住居である。南端部分は弘福寺領山田郡田園南地区B調査区で確認したSH03と同一遺構である。宮西・一角遺跡と田園南地区B調査区で竪穴住居の約半分を調査したことになる。宮西・一角遺跡では東側の肩は確認できたが西側の肩の上がりは確認できなかった。B調査区の成果を合わせた竪穴住居の規模は東西10.0m、南北5.0m以上、深さ0.40mである。土層堆積は上から1層は灰黄褐色シルト、2層はにぶい黄褐色シルト、3層は褐色礫混じりシルト、4層は黒褐色礫混じりシルトが堆積し、東側の壁溝では焼土を多量に含むにぶい黄褐色シルト、西側の

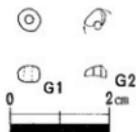
壁溝と考えられる落ちでは焼土を含む黒褐色礫混じりシルトが認められる。柱穴は両調査区併せて7カ所確認できたが、柱穴の配列を復原するには至っていない。壁溝は東側床面で一部確認したが、南側土層断面では東側でも西側でも炭を含む壁溝らしき落ちを確認したことから、これ以外にも存在したものと考えられる。遺物は弥生土器の他、東側壁溝から炭に混じてガラス玉が2点出土している。



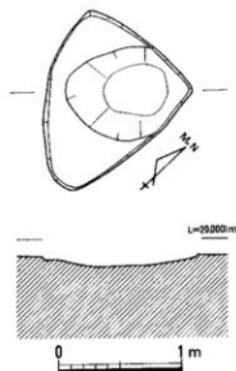
第62図 SH01出土遺物実測図

SH01出土遺物

227～229は逆し字形口縁甕である。227は口縁端部に箆状工具による刻目を施すが、胴部は無紋である。228も同様に無紋である。229は口縁部内部に屈曲の稜をもつ、口縁端部には箆状工具による刻目、胴部外面には篋描沈線紋を6条巡らす。調整は胴部外面に細かな刷毛が認められる。230は広口壺である。



口頸部外面には粗い刷毛が施され、刷毛状工具の圧痕も認められる。231は壺の胴部片である。胴部外面には稚拙な半截竹管による複線波状紋を施す。調整は粗い刷毛の後、粗いミガキを施す。232は鉢または高杯の杯部と考えられる。口縁部端面に凹線1条が認められる。233は小型の甕の底部であろうか。外面に刷毛が認められる。234は器台もしくはは広口壺の口縁と考えられる。大きく外反する口縁端部が下方に拡張する。235、236は広口壺である。235は直線的な頸部から屈曲して外方に開く口縁部をもち、端部が上下に拡張する。236は大きく外反する口縁部をもち、端部は上下に拡張する。口縁端部外面に凹線1条を巡らせる。

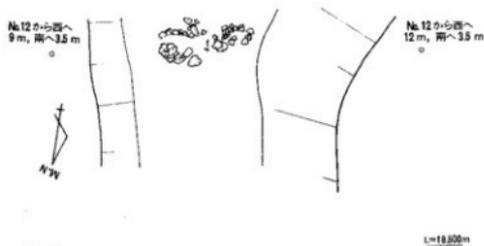


第63図 SK06平・断面図

SK06

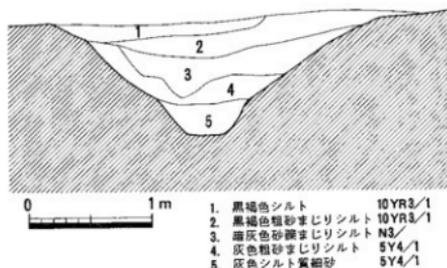
№18から西へ12.5mの南調査区で確認した土坑である。隅丸の三角形形状を呈し、南半部が多少窪む。

土坑の規模は長軸1.35m、短軸1.05m、深さ0.09mである。遺物は図示していないが弥生前期の土器に混じって弥生後期の土器が出土している。



SD06

№12から西へ8mの南調査区で確認した溝である。SR02が埋没し、平坦になった時点で5a層上面から掘削される溝である。溝の規模は南端で幅3.00m、深さ0.90mをはかる。溝の断面はV字状を呈する。土層埋土は5層に分層でき、1層は黒褐色シルト、2層は黒褐色粗砂混じりシルト、3層は暗灰色砂礫混じりシルト、4層は灰色粗砂混じりシルト、

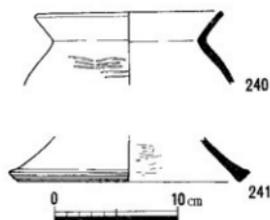


第64図 SD06平・断面図

5層 灰色シルト質細砂である。遺物は溝中央部付近から浮いた状態で弥生土器が出土している。

SD06出土遺物

240はタキ甕である。「く」の字に屈曲し上方に立ち上がる口縁部をもつ。胴部外面にはタキ調整が認められる。241は高杯の脚部である。脚端部外面には凹線2条を施す。調整は外面がナデ、内面はヘラケズリを施す。



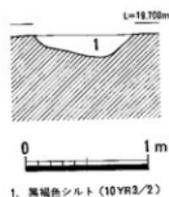
第65図 SD06出土遺物実測図

SD09

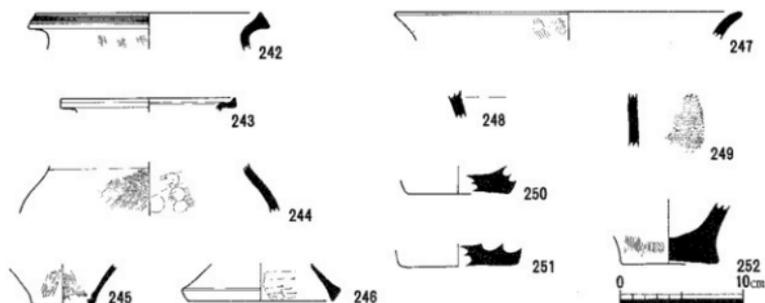
No.16から西へ5mの南北両調査区で確認した南北溝である。北調査区では弥生時代前期と考えられるSK01を切る。溝の規模は幅0.85m、深さ0.15mをはかる。溝の断面はU字形を呈する。土層は単層で黒褐色シルトである。遺物は弥生土器が出土している。

SD09出土遺物

242～244は甕である。242は上下に拡張した口縁部に4条の凹線を施す。243は口縁端部を上方に拡張し、端部外面に凹線紋を1条巡らす。244は甕の胴部片である。外面には細かなハケ、内面にはナデを施す。245は甕の底部である。調整は外面がヘラミガキ後底部

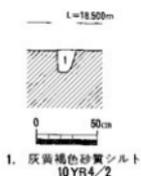


第66図SD09断面図



第67図 SD09出土遺物実測図

下端を横ナデ、内面はヘラケズリを行い薄く仕上げる。246は高杯の脚部である。脚端部外面には退化した凹線がみられる。調整は外面が丁寧な横ナデ、内面はヘラケズリを行い薄く仕上げる。247、



第68図 II SP01

断面図



第69図 II SP01

出土遺物実測図

248は壺である。247は外反した口縁をもつ広口壺である。口縁端部は丸く仕上げられ、口縁部外面には縦ヘラミガキを施す。248は広口壺の頸部から胴部片である。変化点部分の段が認められる。249は甕の胴部片である。胴部外面には櫛描沈線紋を施す。251～253は底部である。250、251は壺、252は甕の底部である。上げ底の底部で外面にはハケ調整が認められる。

II SP01

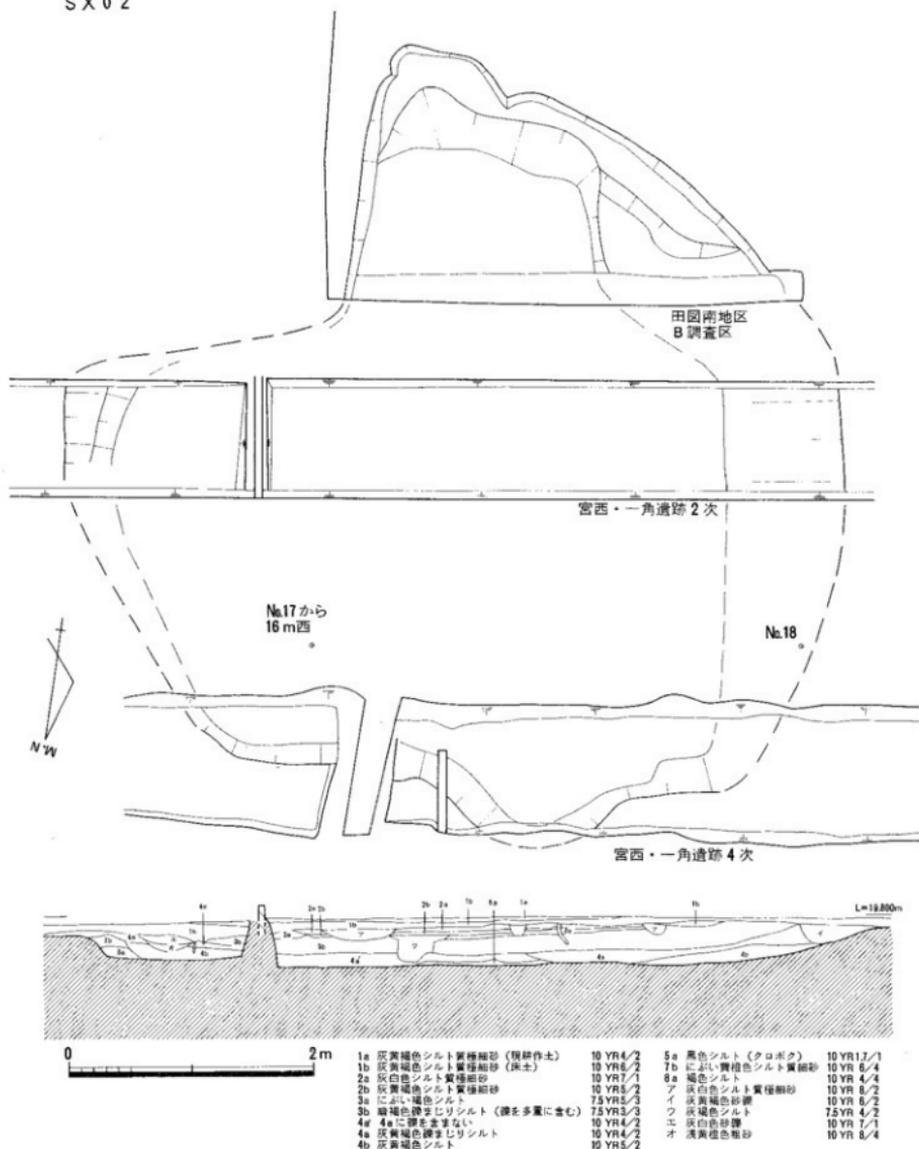
No.6から西へ09.5mの南調査区土層断面で確認したピットである。土層断面で確認したピットの規模は直径0.30m、深さ0.40mをはかる。土層埋土は単層で灰黄褐色砂質シルトである。ピットからは外面にヘラ削りをもった弥生土器の甕の底部が出土している。

II SP01 出土遺物

253は甕の底部と考えられる。丸底に近い底部をもち、調整は外面ヘラケズリ、内面はナデを行う。

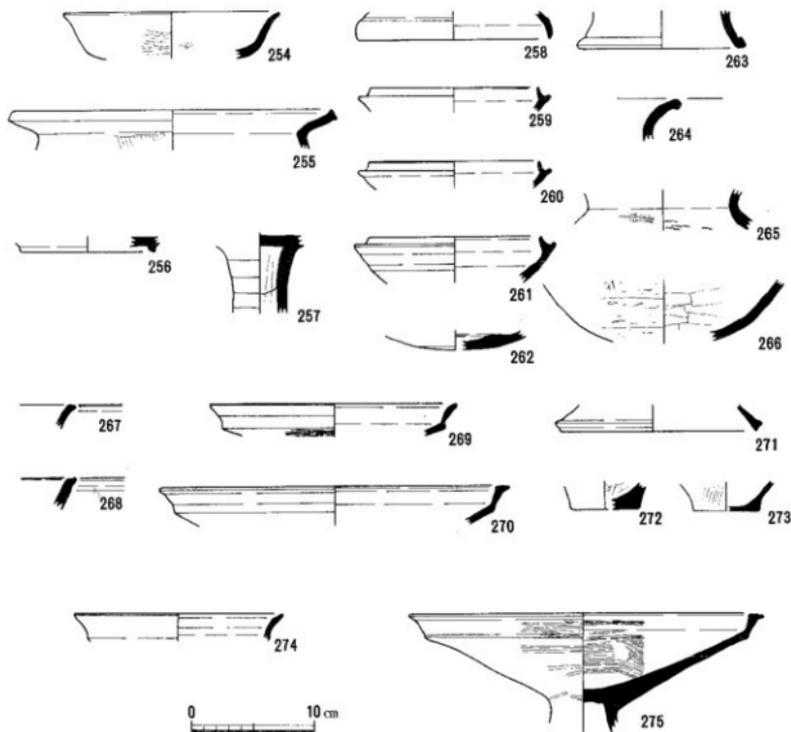
第3節 古墳時代後期の遺構と遺物

SX02



第70図 SX02平・断面図

No.17から西へ1.4mで確認した落ち込みである。2次調査の時点では南北に広がる旧河道状の落ち込みを想定していたが、発掘調査は宮西・一角遺跡2次、4次、山田郡田図南地区B調査区の都合3回行った結果、3調査区内で完結することが判明した。遺構の平面形は不整形形を呈する。断面は底面の広い皿状を呈する。判明した遺構の規模は東西21.70m、南北12.40m、深さ0.50mをはかる。土層埋土は上から3a層はにぶい褐色シルト、3b層は暗褐色礫混じりシルト、4a層は灰黄褐色礫混じりシルト、4b層は灰黄褐色シルト、5a層は黒色クロボク層である。出土遺物は4層から弥生時代後期の土器が、3層から古墳時代後期の土器が出土している。この他古墳時代後期の土器に混じて8世紀代の土器が出土した。遺構掘削中は気づかなかったが、南側土層断面の東側に3層から切り込み土坑状の落ち込みが認められた。この遺構は南側の田図南地区B調査区、宮西・一角遺跡4次調査区では認められないことから、可能性として、この落ち込みは2次調査区内で完結しそうであることから、8世紀代の出土



第71図 SX02出土遺物実測図

遺物はこの遺構に帰属するものかもしれない。

5層のクロボク層の認定では、皇學館大学助教授 外山秀一氏の現地での御教示による。クロボク層の成因は乾燥したところに生育するスキの群生によるもので、この落ちは水が溜まるようなものではなく、常に乾燥した状態で存在していたようである。同様の遺構は田岡南地区B調査区のSX04があり、遺構からはSX02と同様に弥生土器が出土している。

SX02がどのような目的で掘削されたものか現段階では不明である。

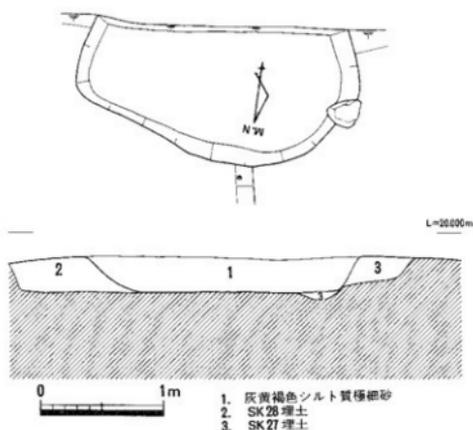
SX02出土遺物

254～257は8世紀代の遺物である。254は精良な胎土をもつ土師器の皿である。外反して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部はつまみ上げる。調整は外面ヘラミガキ、内面横ナデを施す。255は土師器の甕である。口縁端部は上下に拡張し、胴部がふくらむ形態をもつものと考えられる。256は須恵器の杯身の底部である。257は高環の脚柱状部である。内面にはしぼり目が認められる。258は須恵器の杯蓋である。259～262は須恵器の杯身である。263、264は壺の口縁部である。口縁部は玉縁状に肥厚する。265、266は甕の頸部及び底部片である。265の外面には格子状のタキ目がみられる。266には外面にヘラケズリがみられる。267～275は弥生土器である。267、269～271、274、275は高環である。267は口縁端部が外側に若干拡張する。269、274は口縁端部が外反し、内面にはナデによる凹凸がみられる。269の杯身外面にはヘラミガキが認められる。270、275は屈曲した杯部から外反する口縁部をもち、口縁端部が外側に拡張する。拡張した口縁部端面に凹線紋を3条施す。口縁部内外面に丁寧なヘラミガキが認められる。

272、273は甕の底部である。272は厚底、273は薄底である。272の内面にはヘラケズリ、273の外面にはヘラミガキが認められる。

第4節 平安時代の遺構と遺物

SK 27



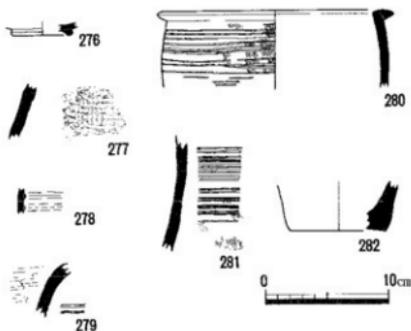
第72図 SK 27平・断面図

頸部外面に貼付突帯が2条認められる。279は壺の頸部片である。頸部外面には2条の篋描沈線紋2条+ α を描く。頸部内面にはヘラミガキが認められる。280は逆L字形口縁甕である。胴部外面には篋描沈線紋を13条の巡らせる。281は甕胴部片である。胴部外面に櫛描沈線紋19条を巡らせる。282は厚底の甕底部である。

No. 21から4.5m西で確認した土坑である。SK 26、28を切る。平面形は不整形である。土坑の規模は東西2.30m、南北1.10m、深さ0.30mである。土層埋土は単層で灰黄褐色シルト質極細砂である。出土遺物は黒色土器、須恵器、弥生土器等が出土している。

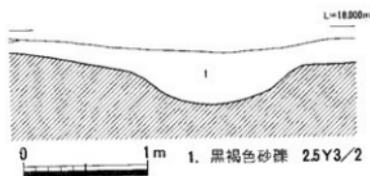
SK 27出土遺物

276は黒色土器碗の底部である。277は須恵器甕の胴部である。胴部外面には格子タタキが認められる。278～282は弥生土器である。278は壺の頸部片である。

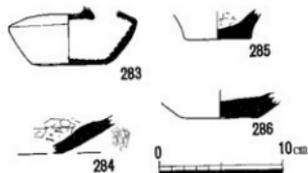


第73図 SK 27出土遺物実測図

SD 01



第74図 SD01断面図



第75図 SD01及び7層出土遺物実測図

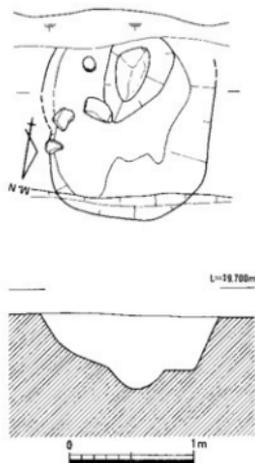
No.5から西へ9mで確認した溝である。溝の規模は幅1.00m、深さ0.30mである。溝の方位はN38°Eである。土層埋土は単層で黒褐色砂礫である。この埋土は溝上部に堆積する第7層と同じであり、砂礫を多く含むことから一度に埋没した可能性が考えられる。出土遺物は須恵器平瓶、弥生土器が出土している。

SD01及び7層出土遺物

283は須恵器平瓶である。口縁部を欠損するが、それ以外は残存状況はよい。最大体部径が10cm強と小振りである。**256**は弥生土器の甕底部である。内面にはヘラケズリがみられる。**255**、**257**は弥生土器の壺底部である。**255**の内面底にはヘラケズリが認められる。

第5節 中世の遺構と遺物

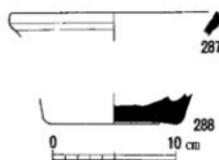
SK 0 3



第76図 SK 0 3平・断面図

№18の北側調査区で確認した土坑である。平面形態は土坑南側が調査区外に広がるため、全容は不明であるが、隅丸の方形になるものと考えられる。土坑の規模は東西1.30m、南北1.40m、深さ0.30mである。土層埋土は灰色の粗砂である。遺物は弥生土器の壺底部と白磁の碗が出土している。

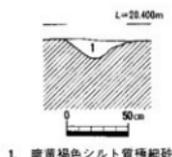
SK 0 3出土遺物



第77図SK 0 3
出土遺物実測図

287は白磁の碗である。口縁部の玉縁が大きく肉厚の器壁をもつもので、森田編年の型式分類によるIV-1類にあたる。288は弥生土器壺の底部である。厚底であることから弥生時代前期のものであろう。

SD 1 7



1. 暗黄褐色シルト質極細砂

第78図SD 1 7断面図

№21から西へ8.5mの両調査区で確認した溝である。南調査区の北側で一部途切れるが、延長部分を北側調査区で確認している。溝の方位はN9°Wである。溝の規模は北側調査区で幅0.60m、深さ0.15mである。土層埋土は単層で暗黄褐色シルト質極細砂である。遺物は出土していないが、後述するSD 1 8、1 9と溝の方位に共通する部分があることから同時期と考えた。

SD 1 8

№21から西へ11mの両調査区で確認した溝である。南調査区で北と西に分岐する。北を向くものをSD 1 8-1、西を向くものをSD 1 8-2と呼称する。

SD 1 8-1

溝の方位はN10°Wである。溝の規模は幅1.30~1.60m、深さ0.15mである。

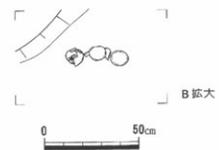
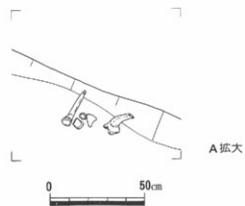
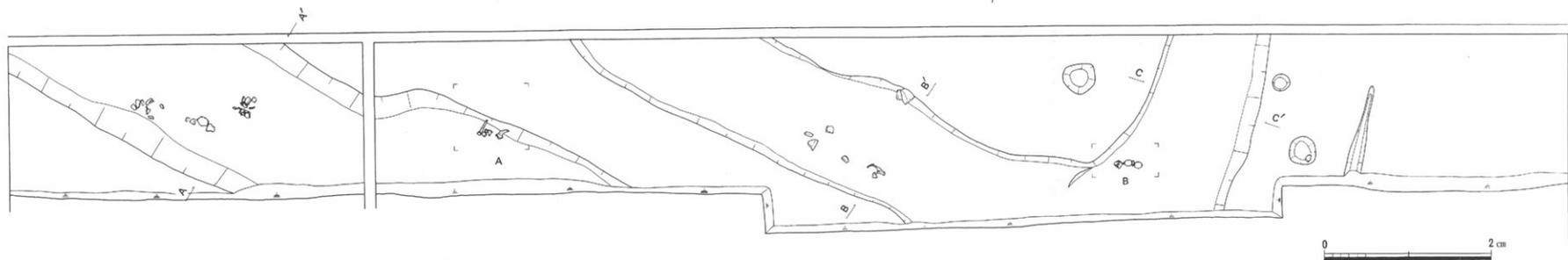
SD 1 8-2

溝の方位はN68°30'Eである。溝の規模は南調査区で幅1.30m、北調査区では3.65mと広がる。深さは0.15mである。

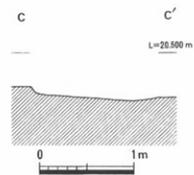
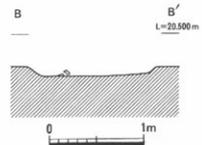
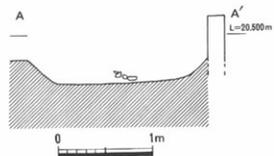
土層埋土は両流路とも同じく褐色細砂の単層である。遺物は土師器土釜、土師器小皿、瓦質播鉢等が

No. 22

NO21 + 10 m



第79図 SD 18、19 遺物出土状況図

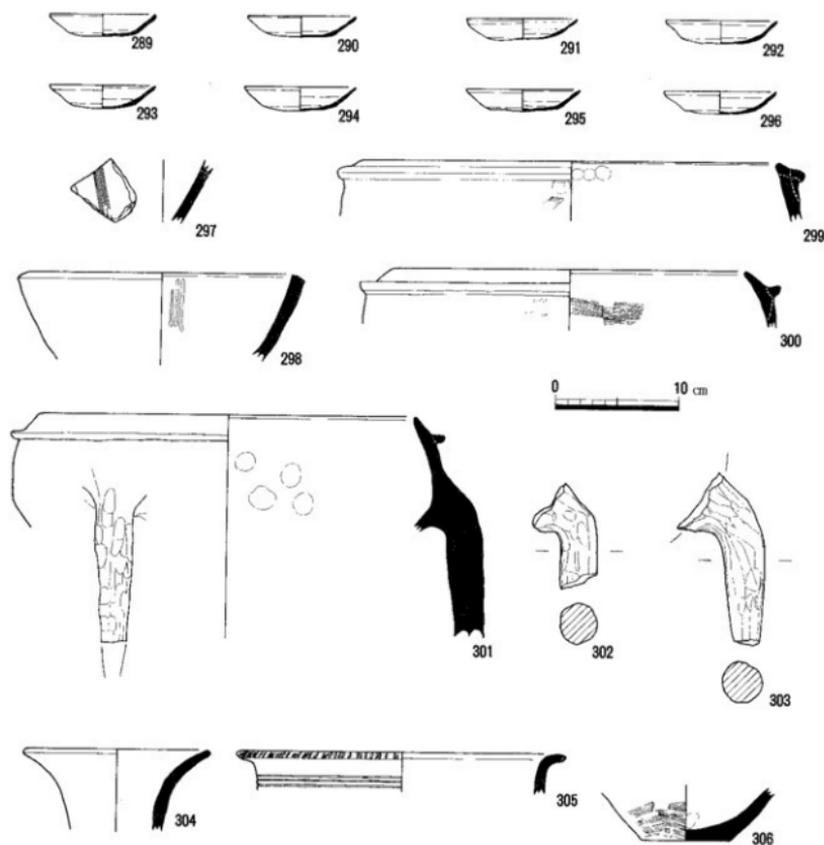


第80図 SD 18、19 断面図

出土したが、この内、分岐点の北側の縁では、土師器の小皿6枚が西から3重、2重、単体の1列に並んでいる状況が確認できた。調査当初は用水路、水路など農耕に伴う祭祀の跡と考えていたが、詳細は5次調査の報告書で報告される予定であるが、宮西・一角遺跡5次調査で1次調査の北側を発掘した結果、溝の延長と共にSD18で囲まれた内側で、多数の柱穴と考えられるピットを確認した。これらのピットは溝の外側では確認されていないことから、この溝は屋敷地を区画する溝であることが判明した。また、土師器が出土した場所が屋敷地の南西に当たることから屋敷地を造成する時点での地鎮跡ではないかと考えられる。

SD18出土遺物

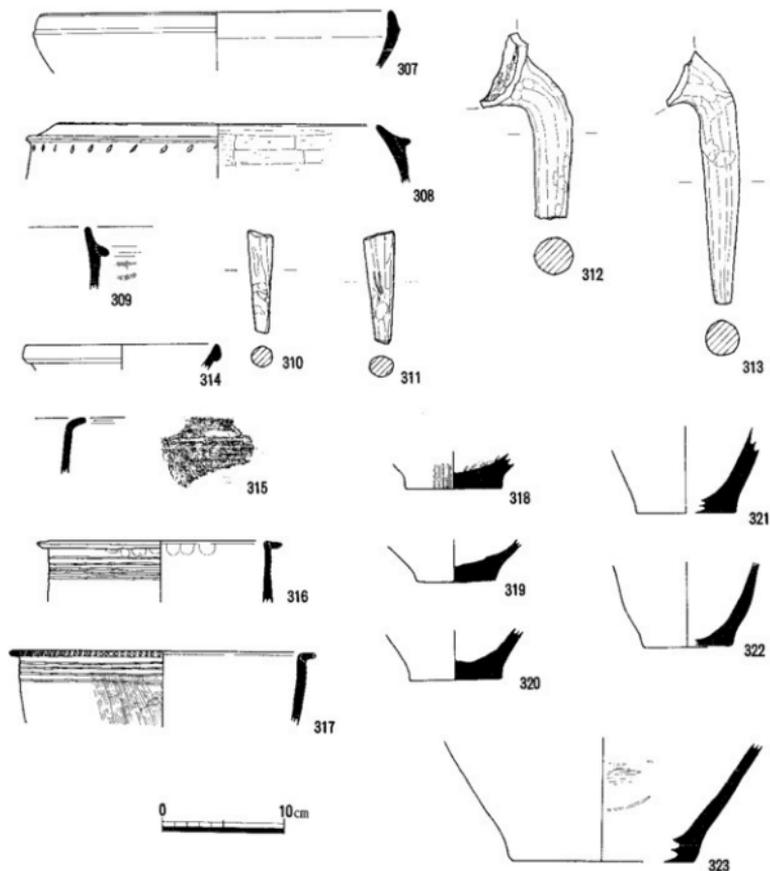
289～296は土師器の小皿である。法量は口径10cm前後、器高2cm前後と浅く、器壁も薄いつ



第81図 SD18出土遺物実測図

くりのものである**297**、**298**は瓦質の播鉢である。卸目は3条程度と少ない。**299**～**301**は土師質土釜である。片桐分類による土師質土釜Bである。体部外面に退化した鐙がつき、体部から内傾しながら口縁部にいたる形態をもつもので、**301**の状況から**299**、**300**も脚がつくものと考えられる。**302**、**303**も土師質土釜の脚部と考えられる。**304**は弥生土器の広口壺である。**305**は如意状口縁の甕である。口縁端部に篋状工具による刻目紋、胴部外面に3条+αの篋描沈線紋を巡らす。**306**は壺の底部である。外面に横方向のヘラミガキを施す。

当溝出土の土師質小皿、土師質土釜の形態から16世紀頃の年代が考えられる。



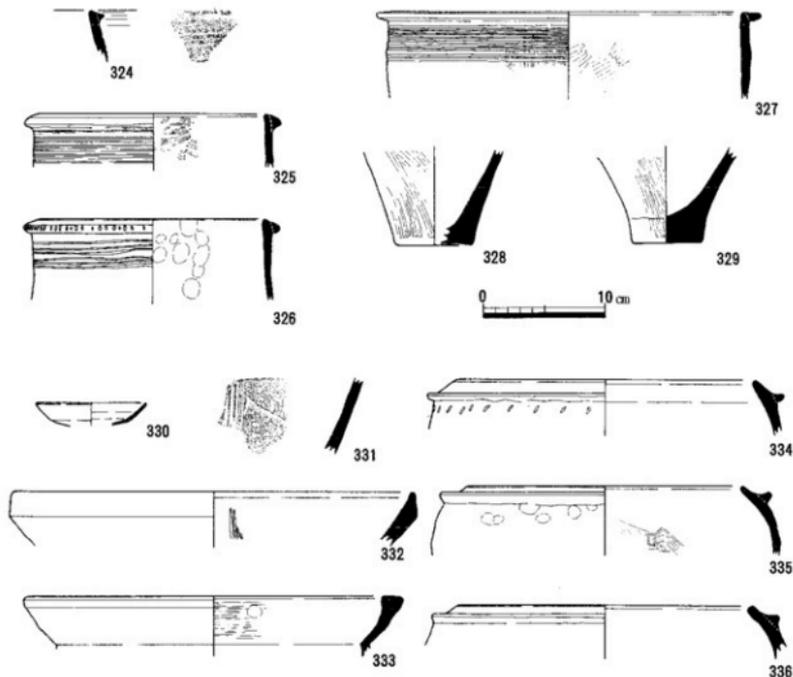
第82図 SD19出土遺物実測図

SD19

No.22から西へ10mで確認した溝である。南側調査区では前述のSD18-2の西側3mでほぼ並行して確認し、溝の方位はN75°30'Eであるが、北側の調査区で確認したこの溝の延長と考えられる溝は、溝の東肩が北に屈曲する形状を示している。前述のとおり北側の調査区では延長部分の溝の北側(区画内)で柱穴と考えられるピットを多く確認していることを合わせると、SD18, 19は屋敷地を区画する溝であると考えられる。南側調査区での溝の規模は幅1.90m、深さ0.20mである。土層埋土はSD18と同様で褐色細砂の単層で、遺物は土師器土釜、弥生土器等が出土している。

SD19出土土器

307は片桐分類による土師質土鍋Dである。罎が形骸化し、体部が肥厚するのみである。また、他のものより体部が浅い。308~313は土師質土釜である。片桐分類による土師質土釜Bである。体部外面に退化した罎がつき、体部から内傾しながら口縁部にいたる形態をもつもので、体部以下を欠損するため不明であるが、脚部がつくものと考えられる。310~313は土師質土釜の脚部である。3



第83図 SD18, 19周辺出土遺物実測図

14は口縁部が玉縁に肥厚し、器壁の厚い森田分類のIV-1類の白磁碗である。315~323は弥生土器である。315は如意状口縁甕である。胴部外面に篋描沈線紋を4条巡らせる。316, 317は逆L字形口縁の甕である。316は口縁端部がやや下がり、317は水平に口縁端部がつく。316は胴部外面に5条の篋描沈線紋を巡らす。317は口縁端部に篋状工具による刻目紋、胴部外面に篋描沈線紋4条を巡らす。胴部外面にはハケ調整が認められる。318~320, 323は壺の底部である。323の内面には横方向のヘラミガキが認められる。321, 322は甕の底部である。

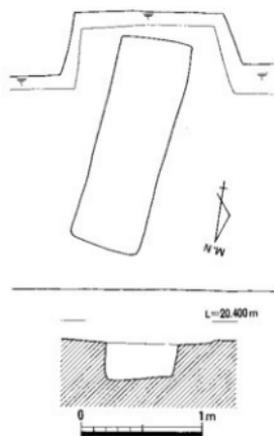
当溝出土の土師器小皿、土師質土釜の形態から16世紀頃の年代が考えられる。

SD18, 19 周辺出土遺物

これらの遺物はSD18, 19 遺構検出時に出土したもので、本来はSD18, 19 に伴う遺物と考えられるものである。各溝出土遺物と同様の遺物傾向を示すことから、ここで一括して報告する。

324~329は弥生土器の甕である。324~327は逆L形口縁甕で324はL字の突出は弱い。胴部外面に篋描沈線紋4条+ α を巡らせる。325は胴部外面に櫛描沈線紋を10条1単位で20条+ α を巡らせる。胴部内面に横方向のヘラミガキが認められる。326は口縁端部に篋状工具による刻目紋、胴部外面に篋描沈線紋6条を巡らせる。327は胴部外面に10条の篋描沈線紋を巡らせる。胴部内面にはヘラミガキが認められる。328, 329は厚底の底部である。外面にヘラミガキが認められる。330は器壁の薄い土師質小皿である。331は瓦質土器の播鉢である。内面に卸目が4条認められる。332は土師質土器の播鉢である。上方へつまみ上げる口縁形態をもち、内面に卸目が認められる。333は片桐分類の土師質土鍋Cである。頸部が「く」の字に外反し、端部が肥厚する形態をもつ。口縁部内面にハケメが認められる。334~336は片桐分類による土師質土釜Bである。体部外面に退化した鈎がつき、体部から内傾しながら口縁部にいたる形態をもつもので、体部以下を欠損するため不明であるが、脚がつくものと考えられる。334の体部外面には篋状の圧痕が認められる。

以上の土器は、前述のSD18, 19 出土遺物と同様の様相を示すことから16世紀頃のものと考えられる。



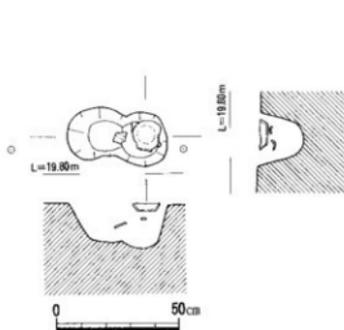
ST 01

№23の南調査区で確認した長方形を呈する土坑である。長軸1.75m、短軸0.55m、深さ0.30mである。遺構の全容確認のため、南側に拡張したことから、遺構の掘削面が不明である。人骨が出土したことにより墓であることは判明したが、遺構を確認したのが、墓の底面近くであったため、それ以上のことは不明である。墓の平面形態が長方形を呈することから木棺墓の可能性が考えられる。遺物の出土はない。この墓以外周辺に墓は存在しないこと、前述のSD18に隣接してつくられていることから、屋敷墓である可能性が考えられる。

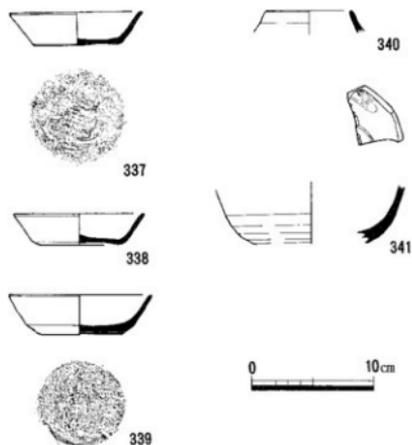
第84図 ST01平・断面図

II SP 02

No.18の南調査区で確認したピットである。2つのピットを重ねた状態で確認した為、遺構上面で遺構の新旧関係を確認したが、判明しなかった。2つのピットの規模は東側が東西0.23m以上、南北0.20m、深さ0.15mである。西側は東西0.17m以上、南北0.20m、深さ0.20mである。土層埋土は単層で褐灰色シルト質極細砂である。遺物は東側のピットから土師器の杯が3枚重なって出土した他、瓦質土



第85図 II SP 02平・断面図



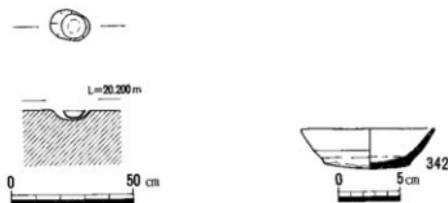
第86図 II SP 02出土遺物実測図

器の土釜片、青磁の碗片が出土した。土器以外に出土遺物はないが土師器杯の出土状態からすれば祭祀に関する遺構と考えられる。

II SP 02出土土器

337～339は土師器の杯である。法量は口径11～12cm、器高2.5～3cmであり、底部切り離し技法はヘラ切りを行う337、338と糸切り技法を行う339がある。340は瓦質土器の土釜である。341は森田分類の龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。

I SP 23



第87図 I SP 23平・断面図 第88図 I SP 23出土遺物実測図

№.23から西へ1.6mの南調査区で確認したピットである。ピットの規模は東西0.15m、南北0.12m、深さ0.05mの浅いピットから完形土師器の杯1点が出土した。

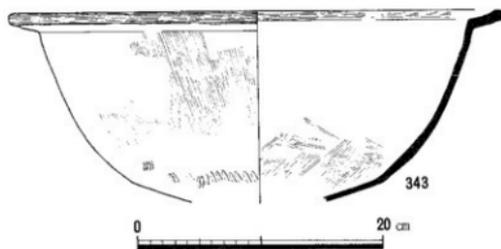
ISP23出土遺物

342は土師質土器の杯である。法量は口径1.2cm、器高3cmで、器壁が厚い。底部切り離しはヘラ切りである。

SK07出土土器

SK07は出土土器から弥生中期初頭の時期であることが判明している。出土土器の量からこの時期判定が動くことはない。SK07からは弥生時代中期初頭の土器以外に土師器の鍋が出土している。出土状況は判明しないが、出土した土器が完形に近いので、ここに紹介するものである。中世に属する土器はこの一点であるため、あくまでも推定であるが土坑上面の浅い窪みに置かれていたのかもしれない。

343は土師器の鍋である。片桐分類による土師質土鍋Bと呼ばれるもので、体部が短く洗面器状を呈する。頸部は「く」の字に外反し、口縁部内面はナデにより窪む。口縁部内外面にハケを施し、体部外面上半は縦ハケ、下半はタタキ後、粗いハケを施す。体部内面は上半部ナデ、下半は粗いナデを施す。形態等から13世紀頃の時期が考えられる。



第89図 SK07出土遺物実測図

中世土器の分類については下記の文献による

片桐孝浩『川津元結木遺跡』香川県教育委員会 1992

輸入磁器の分類については下記の文献による

森田 勉、横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4
九州歴史資料館 1977

第6節 近世の遺構と遺物

SK12

No.19から西へ6mの北調査区で確認した土坑である。平面形は不整形を呈する。土坑の規模は東西0.90m、南北0.65m、深さ0.28mである。土層埋土は灰褐色シルト質極細砂の単層である。遺物は出土していない。

SK13

No.19から西へ9mの北調査区で確認した土坑である。土坑南側が調査区外にのびるため、全容は不明であるが平面形は長方形を呈するものと考えられる。土坑の規模は南北1.15m、東西1.10m、深さ0.20mである。土層埋土は灰褐色シルト質極細砂の単層である。遺物は出土していない。

SK14

No.19から西へ10.5mの北調査区で確認した土坑である。土坑南端が一部調査区外に広がるが、平面形は円形を呈するものと考えられる。土坑の規模は東西0.95m、南北0.80m以上、深さ0.30mである。土層埋土は黒褐色シルト泥じり褐灰色シルト質極細砂である。遺物は出土していない。

SK16

No.19から西へ17mの北調査区で確認した土坑である。土坑の大半が調査区外に広がるため、全容は不明である。土坑の規模は東西0.95m、南北0.25m以上、深さ0.25mである。土層埋土はオリーブ褐色細砂の単層である。遺物は出土していない。

SK19

No.20から西へ6.5mの北調査区で確認した土坑である。土坑の平面形は楕円形を呈する。土坑の規模は長軸1.20m、短軸0.60m、深さ0.06mである。土層埋土は暗褐色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。

SK21

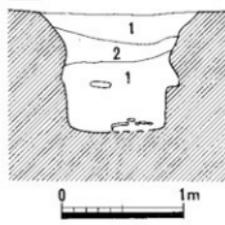
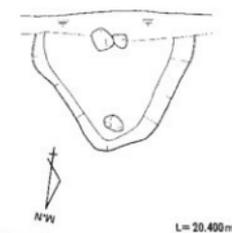
No.20から7.5mの南調査区で確認した土坑である。土坑の南半は調査区外にのびるため、全容は不明であるが、円形に近い形状を呈するものと考えられる。土坑の規模は東西2.30m、南北1.35m以上、深さ0.55mである。土層埋土は暗褐色細砂が上層に堆積する以外に、黄褐色シルト質極細砂に暗灰黄色砂質をブロック状に含むことから、一度に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。

SK22

No.20から12.5m西の南調査区で確認した土坑である。土坑の平面形は方形を呈する土坑の規模は一边が0.65m、深さ0.05mである。遺物は出土していない。

SK23

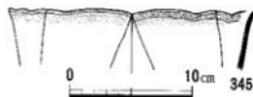
No.20から西へ14mの南調査区で確認した土坑である。平面形は南側が調査区外に広がるため、全



1. 黄褐色シルト質極細砂（暗灰黄色砂質ブロックを含む）
2. 灰色シルト質極細砂
3. 1と同じ

第90図 SK 23平・断面図

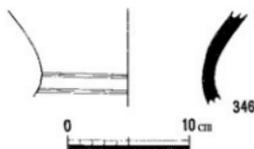
容は不明であるが、いびつな楕円形を呈するものと考えられる。土坑の規模は東西1.30m、南北1.00m、深さ0.95mである。土層埋土は上から黄褐色シルト質極細砂（暗灰黄色砂質ブロックを含む）、灰色シルト質極細砂、黄褐色シルト質極細砂（暗灰黄色砂質ブロックを含む）である。土層堆積状況から一度に埋め戻されたものと考えられる。遺物は染付の杯、鉢が出土している。



第91図 SK 23出土遺物実測図

SK 25

No. 21から西へ1.5mの北調査区で確認した土坑である。土坑南側は調査区外に広がるため全容は不明であるが、楕円形状を呈するものと考えられる。土坑の規模は長軸2.40m、短軸1.40m以上、深さ0.25mである。土層埋土は黄灰色中砂の単層である。遺物は弥生土器の壺頸部が出土している。



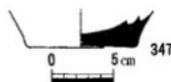
第92図 SK 25出土遺物実測図

SK 30, SK 31, SK 32

No. 23から西へ6mの南調査区で確認した土坑である。いずれの土坑も平面形は不整形で、3つの土坑が等間隔に並ぶ。土層埋土は灰黒褐色砂質シルトである。遺物は出土していない。

SK 34

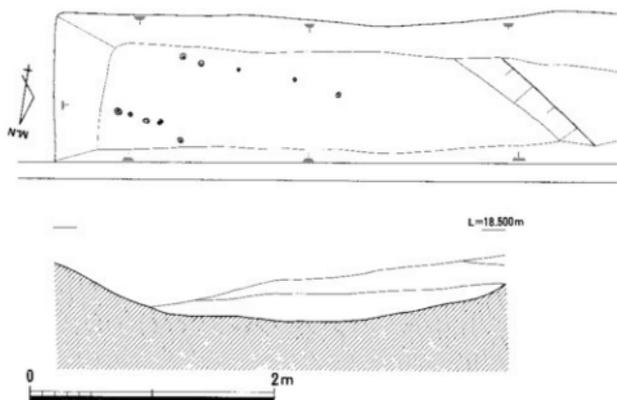
No. 24から西へ3.5mの南調査区で確認した土坑である。土坑北側は調査区外に広がるため全容は不明であるが、平面形は楕円形状を呈するものと考えられる。土坑の規模は長軸1.40m以上、



第93図 SK 34出土遺物実測図

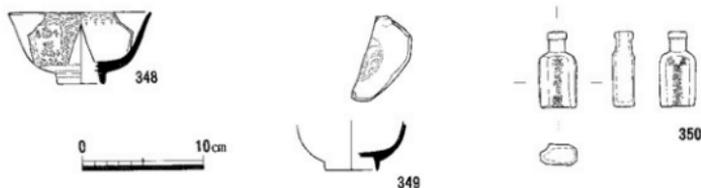
短軸0.70m以上、深さ0.15mである。土層埋土は暗褐色シルト質極細砂の単層である。遺物は弥生土器壺の底部が出土している。

SD 0 2



第 9 4 図 SD 0 2 平・断面図

No. 6 から西へ 6 m の南調査区で確認した溝である。溝の西肩を確認したのみであるため全容は不明である。幅 1.00m 以上、深さ 0.50m である。溝底に幅 0.60m の間隔で 2 列の杭列を確認したことから護岸の杭である可能性が考えられる。溝は造成土と考えられるにふい黄橙色シルトまじりの砂礫により充填されていることから、空港接収時の造成であると考えられる。遺物は型紙摺りの碗の他、『大黒目薬』『屋島製薬株式会社』名のガラス瓶が出土している。

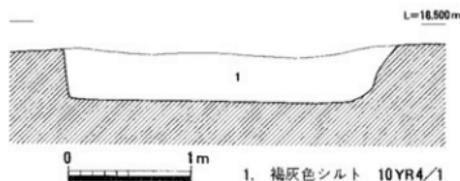


第 9 5 図 SD 0 2 出土遺物実測図

SD 0 3

No. 8 から西へ 9 m の南調査区で確認した溝である。調査区が狭かったこともあり、平面では確認でき

ず、土層断面による観察と、遺物の採集により判明した。特別養護老人ホームさくら荘建設にともなう発掘調査（一角遺跡）で同じ溝（SD-102）を確認している。発掘調査の成果によると溝の方位はN14°30'Eで、規模は幅約1.30m、深さ約0.35mである。宮西・一角遺跡で確認した溝の深さが0.40mとはほぼ同じ深さであることから一角遺跡SD-102と宮西・一角遺跡SD03は同じ溝であると考えられる。溝の断面形状は東肩がほぼ垂直に立ち上がるが、西肩はやや傾斜が緩い。土層埋土は褐色シルトの単層である。遺物は多量の瓦の他、染付などの陶磁器が出土している。



第96図 SD03面図

SD05

No.11から西へ6mの南調査区で確認した溝である。溝東肩の造成土と溝埋土が非常に似ていたため、同時に下げてしまい平面では遺構面から0.30m下で確認した。溝の方向、規模については、深さが0.60mと判明した以外は当調査区内では不明である。北側で行った弘福寺田岡南地区A調査区第3トレンチの発掘調査の成果では、検出幅1.50m、深さ0.60mであり、溝埋土は2層 黒褐色砂礫層（客土層）によって東側が埋め立てられ、47層 黒褐色シルト質極細砂が堆積し、ほぼ平坦化する。遺物の出土はない。

SD06

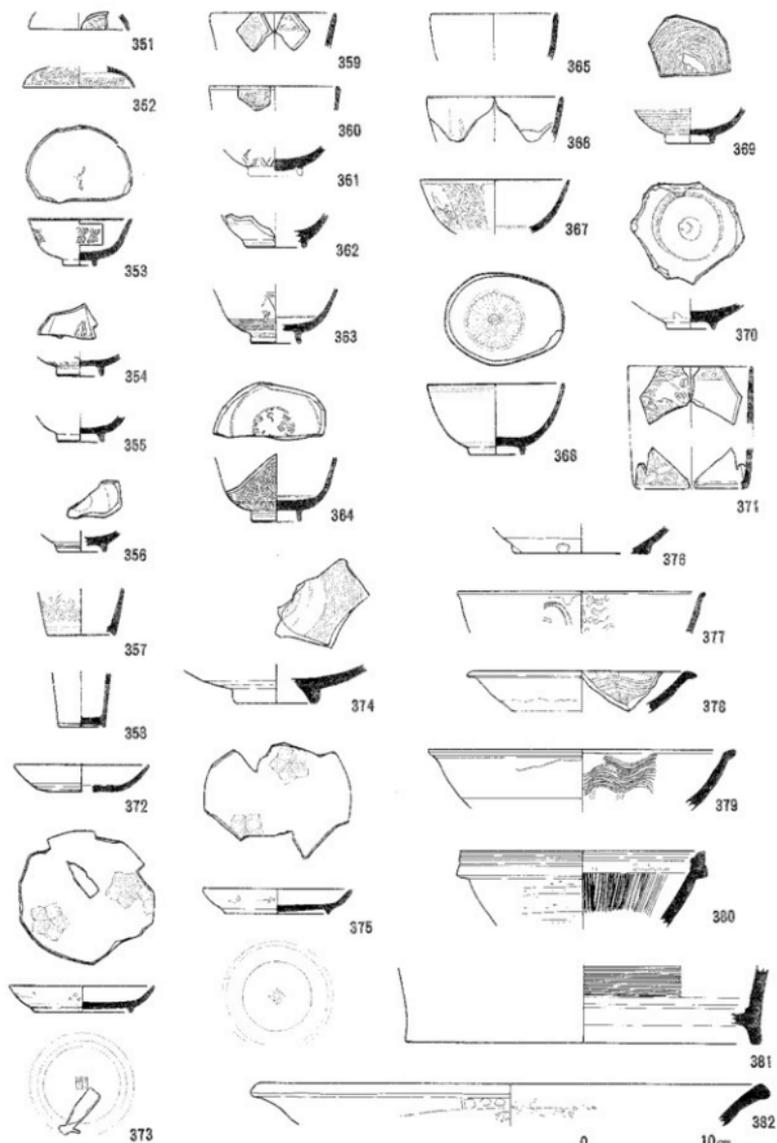
No.12から西へ7mの南調査区で確認した溝である。溝の方向はN75°Wである。溝の規模は1.50m、深さ0.20mである。溝底は幅広の平坦である。溝の北肩と南寄り溝底で杭列を確認した。杭は0.40m間隔で穿たれており、深いものは1m近く穿たれているものもみられる。土層埋土は上から灰黄褐色シルト、灰黄褐色礫まじりシルトである。遺物は弥生後期後半の土器とともに、染付の碗、陶器播鉢等が出土している。

SD07

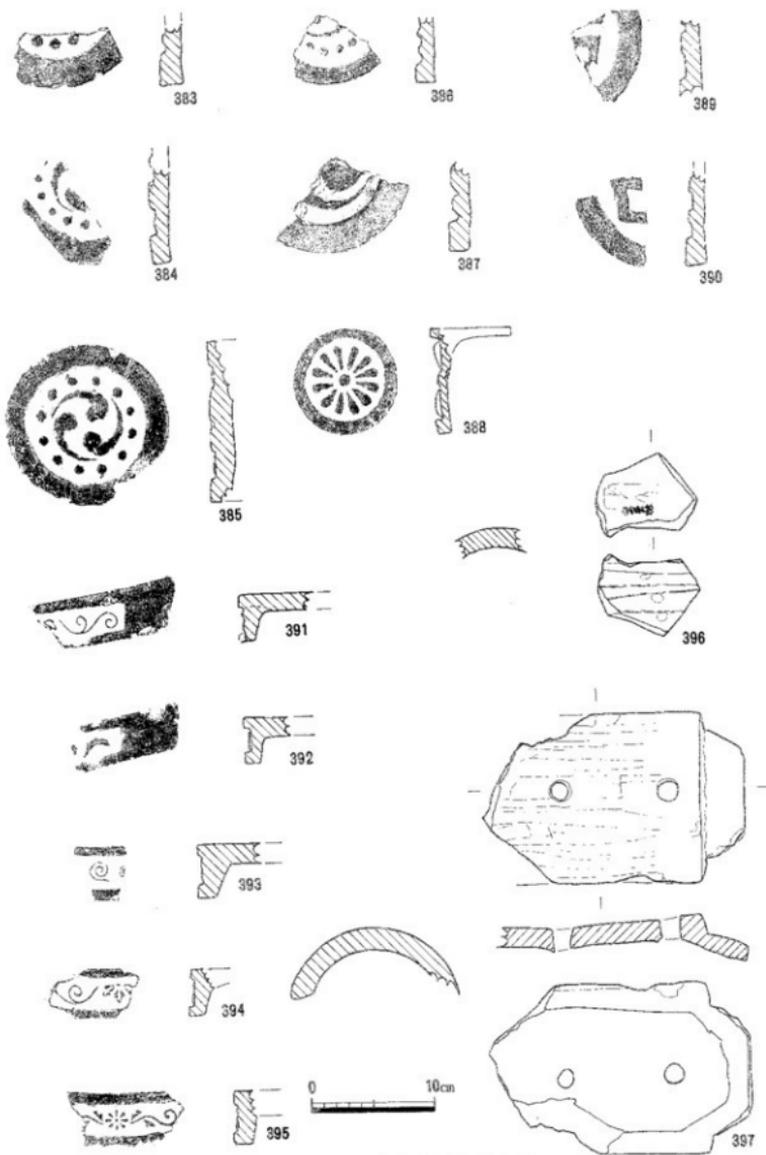
No.12から西へ19mの南調査区で確認した溝である。土層観察から2時期の溝が重複していることが判明した。上層の溝は、接収前の耕作土に伴うもので上から灰黄褐色シルト、褐色砂礫である。下層の溝は耕作土直下から切り込むもので上から褐色シルト、褐色砂礫である。土層観察からはほとんど時期差は認められない。確認した溝の方位はN10°Wである。溝の規模は幅1.50m、深さは上層溝0.40m、下層溝0.45mで規模的にも差は認められない。遺物は瓦質土器の鉢、軒丸瓦が出土している。

SD08

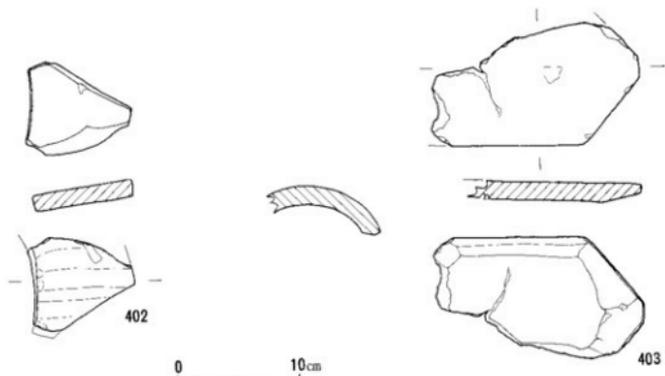
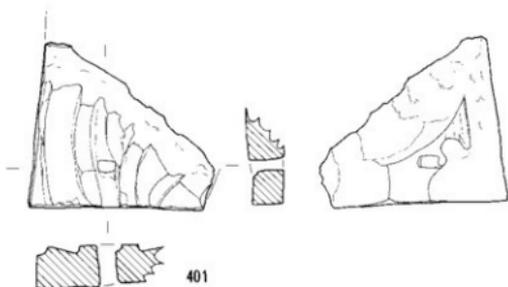
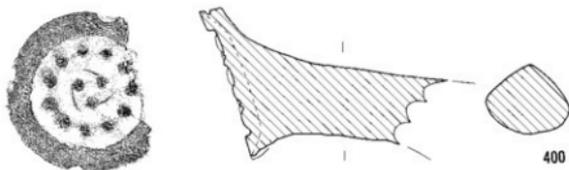
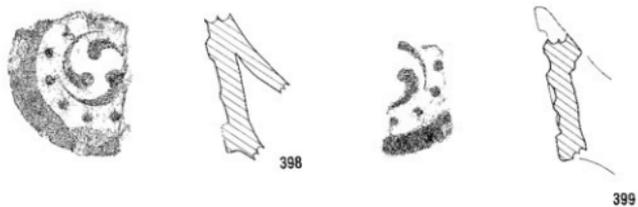
No.13から西へ15mの南調査区で確認した溝である。溝の西肩は確認したが東肩が確認できなかったため、全体の規模は不明である。確認した規模は幅3.00m、深さ0.60mである。土層埋土は単層で瓦



第97图 SD03出土遗物实测图 (1)

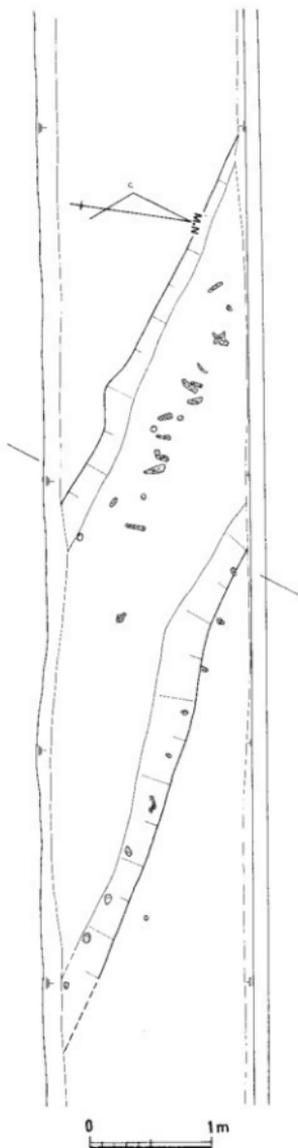


第98图 SD03出土遗物实测图(2)

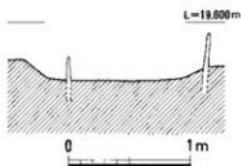


0 10cm

第99图 SD03出土遗物实测图(3)



第100図 SD06平・断面図



片，円礫を多量に含む灰黄褐色シルト質極細砂である。土層のから一度に埋め戻されたものと考えられる。

SD12

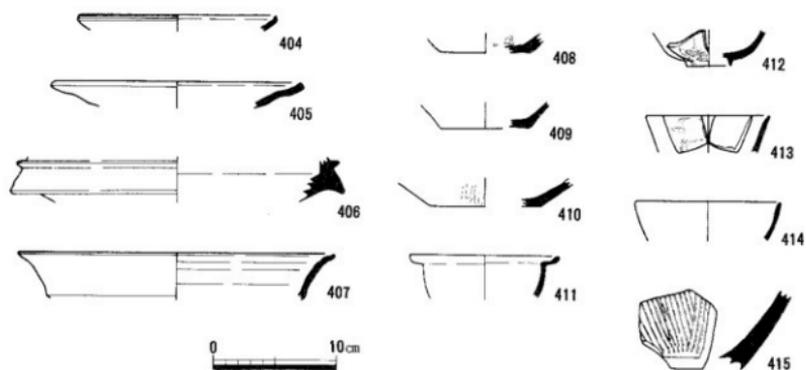
No.17から西へ5.5mで確認した溝である。溝の規模は内法で0.70m，深さ0.65mである。溝の方位はN15°Eである。溝の構造は両側面ともコンクリート打ちで，底は砂礫である。この溝は田岡南地区でも延長部分を確認している。溝内にはふい黄褐色礫まじりシルトが充填されており，空港接収時に埋め戻されたものと考えられる。

SD13

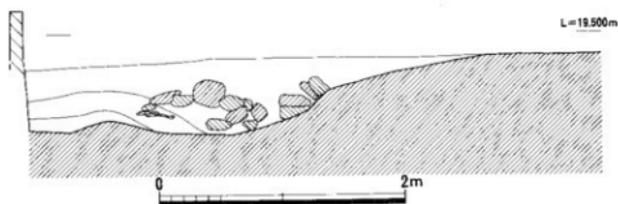
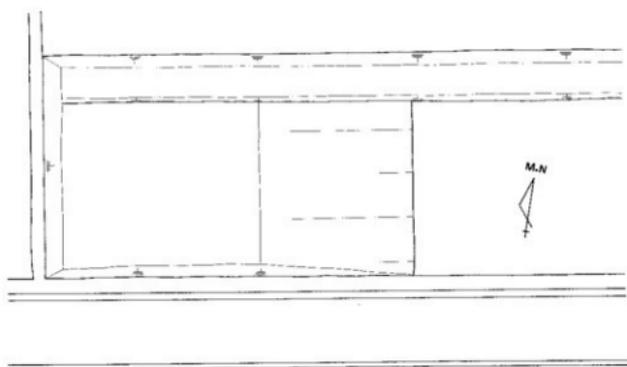
No.20の南調査区で確認した溝である。溝の規模は幅1.30m，深さ0.40mである。溝の方位はN77°Eである。土層埋土は黒褐色砂質シルト，褐灰色砂質シルト，灰色大礫がまじって出土している。遺物は染付の碗等が出土している。

SD14

No.20から西へ17.5mの南調査区で確認した溝である。溝の方位はN9°Eである。溝の規模は幅1.70m，深さ0.90mである。土層埋土は上から黄褐灰色シルト質極細砂，暗灰黄褐色シルト質極細砂，暗灰黄色砂質シルトをブロックに含む黄褐灰色シルト質極細砂，西溝底に暗灰黄色砂質シルトが堆積する。南調査区では遺構を確認したが，延長部分である北調査区では確認できなかったこと，SD15と土層埋土に共通点があることから，南調査区北側でSD15に合流するものと考えられる。遺物は染付の盃が1点出土している。

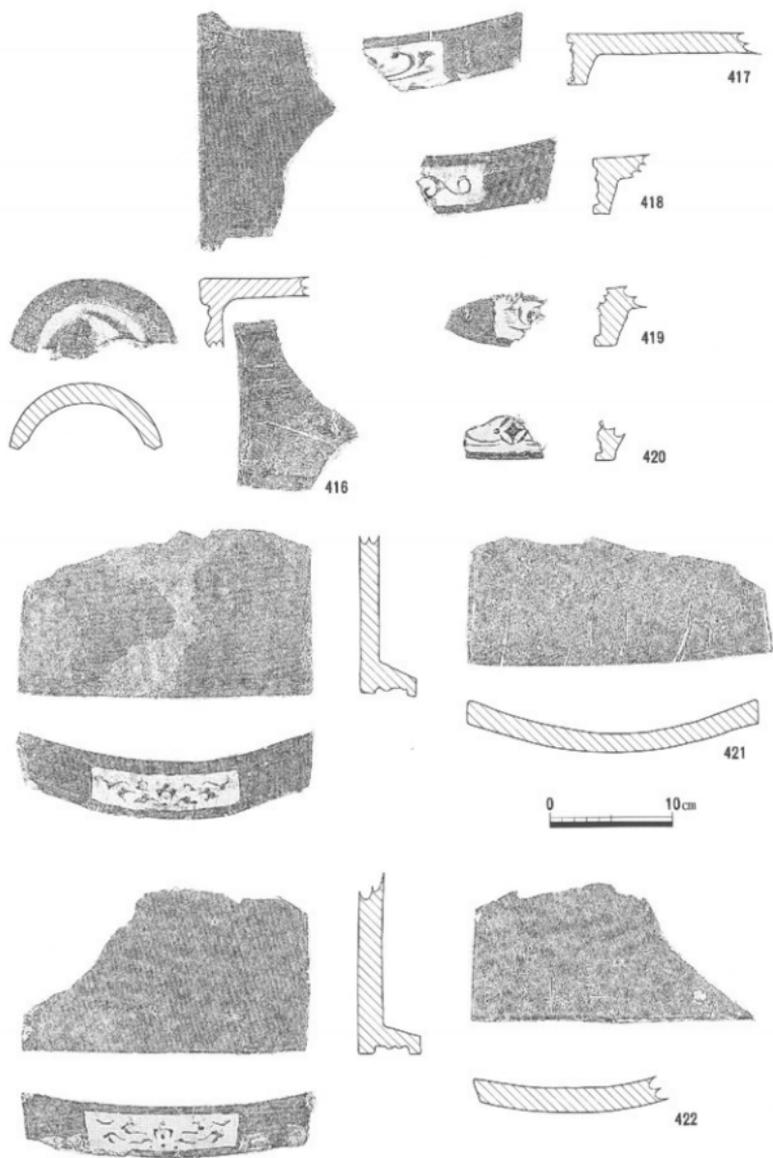


第101図 SD06出土遺物実測図

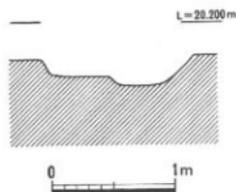


1. 灰黄褐色シルト質極細砂 (瓦片, 円筒状多量に含む) 10 YR8/2
2. 褐色シルト質極細砂 7.5 YR5/1
3. 灰黄褐色シルト質極細砂 10 YR6/2

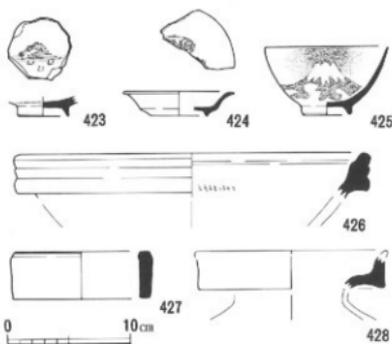
第102図 SD08平・断面図



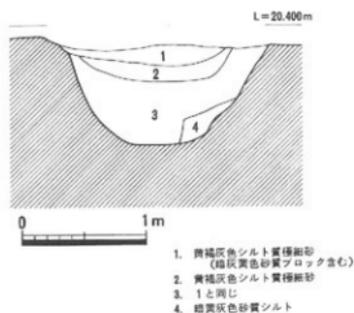
第103图 SD08出土遗物实测图



第104図 SD13断面図

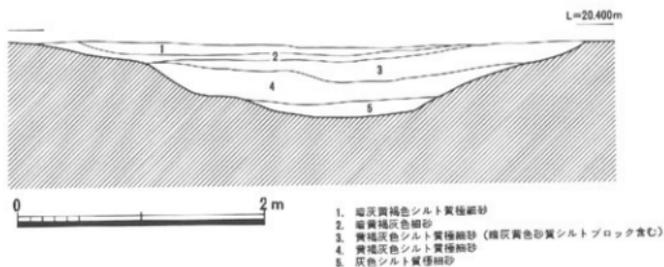


第105図 SD13出土遺物実測図



第106図 SD14断面図

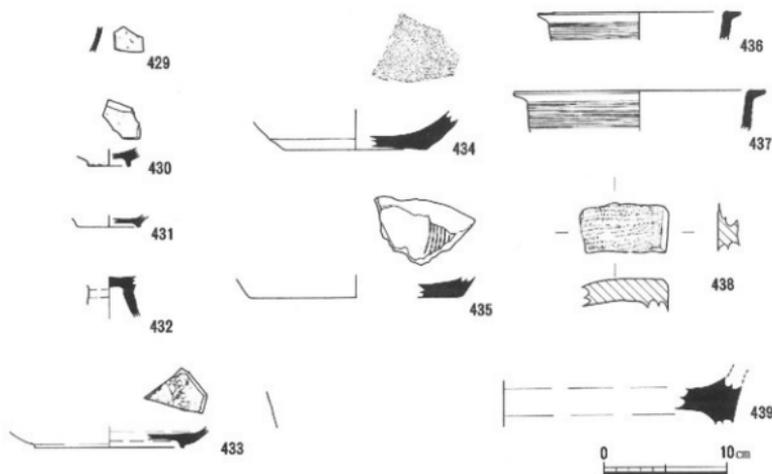
SD15



第107図 SD15断面図

No.21で確認した溝である。溝の方位はN46°Eである。溝の規模は幅1.90m、深さ0.60mである。

土層埋土は上から黄褐灰色シルト質極細砂，暗灰黄褐色シルト質極細砂，暗灰黄色砂質シルトをブロックに含む黄褐灰色シルト質極細砂，灰色シルト質極細砂，東肩に灰褐色細砂，最下層に暗黄橙色細砂と白灰色粘砂のラミナ状堆積が認められる。遺物は染付，陶器擂鉢，弥生土器などが出土している。



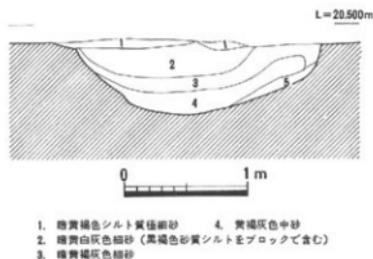
第108図 SD15出土遺物実測図

SD16

No.21から西へ6.5mの南側調査区で確認した溝である。北側調査区では確認していない。溝の方位はN9°Eである。溝の規模は幅0.45m，深さ0.25mである。溝の埋土は2層に分かれ，上から灰色シルト質極細砂，灰褐色細砂である。遺物は出土していない。

SD21

No.23から西へ3mで確認した溝である。溝の方位はN3°30'Wである。溝の規模は北調査区と南調査区で幅が異なり，南1.20m，北1.80m，深さ0.60mである。土層埋土は上から暗灰黄褐色シルト質極細砂，暗黄白灰色細砂，黄褐灰色中砂，灰黄色細砂である。遺物は陶器の甕が出土している。

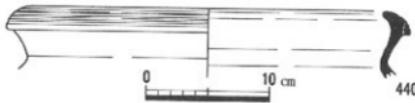


1. 暗黄褐色シルト質極細砂
2. 暗黄白灰色細砂 (黄褐色砂質シルトをブロックて含む)
3. 黄褐灰色中砂
4. 黄褐灰色中砂
5. 灰黄色細砂

第109図 SD21断面図

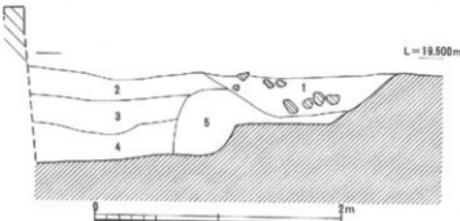
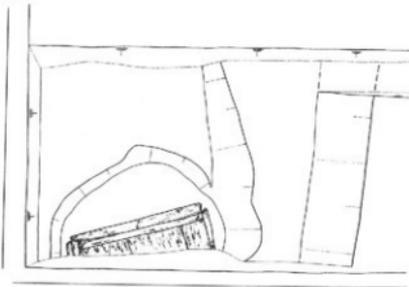
SD 2 2

No. 2 4 から西へ 1 1 m の南調査区で確認した溝である。溝の方位は N 72° W である。溝の規模は幅 1. 30 m、深さ 0. 40 m である。上から黒褐灰色シルト質極細砂、暗黄灰色シルト質極細砂、暗黄褐色砂質ブロックを含む



第 1 1 0 図 SD 2 1 出土遺物実測図
 む黄褐灰色シルト質極細砂である。遺物は出土していない。

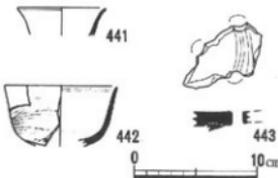
SX 0 1



- | | |
|--------------------------------|---------------------|
| 1. 黄灰色シルト質極細砂 (10cm 大の礫を多量に含む) | 4. 灰黄褐色砂礫 10 YR 8/2 |
| 2. ぶい黄褐色礫まじりシルト 10 YR 7/2 | 5. 4 と同じ |
| 3. 灰黄褐色まじりシルト 10 YR 6/2 | |

第 1 1 1 図 SX 0 1 平・断面図

No. 1 4 から西へ 1 4 m の南調査区で確認した遺構である。遺構は大きく 2 段に掘削され、下段の北寄りが円形に窪み、その中から木箱が出土した。遺構の規模は東西 2. 75 m 以上、南北 1. 60 m 以上、深さ 0. 70 m である。土層埋土は上から黄灰色シルト質極細砂 (1 0 cm 大の礫を多量に含む)、ぶい黄褐色礫まじりシルト、灰黄褐色礫まじりシルト、灰黄褐色砂礫である。遺物は木箱内から染付が出土している。



第 1 1 2 図 SX 0 1 出土
 遺物実測図

第7節 旧河道と遺物

SR01

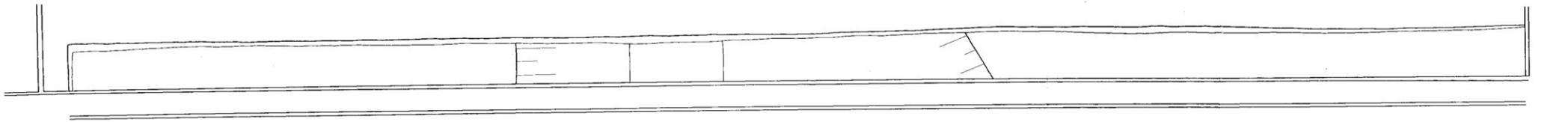
№1+1.8mから№3+9mにかけて確認した自然河川である。断面観察による川の流域幅は3.1mと広いものの、流路として認められるのは中央部の幅1.4m部分である。深さは最も深い部分で1.30mである。土層堆積は上から2.5層 オリーブ褐色シルト質極細砂、1.7層 灰黄褐色シルト質極細砂、1.8層 黒褐色砂質シルト、2.0層 暗褐色シルト質極細砂、2.1層 暗褐色砂まじりシルト、2.2層 風化砂岩礫を含む黒褐色砂質シルト、2.3層 黒色シルト、2.4層 暗灰黄色細砂である。2.2層、2.3層の境界付近から多量の弥生後期末から古墳時代前期にかけての土器が多量に出土した。平面では確認していないが土層による観察では、2.0層の上面で畦畔状の高まりを2カ所で確認した。1.8、2.0層からは弥生土器の他、10世紀代を中心とする須恵器が多く出土している。1点ではあるが平安時代末頃の土師器碗も出土していることから、平安時代の範疇で収まる水田である可能性が高い。

SR01出土遺物

444～449は広口壺である。444、448、449は口縁端部が上下に肥厚する。450～454は甕である。454は弥生時代中期の甕である。453は口縁端部に凹線を2条巡らす中期後半の甕である。450～452は弥生時代後期末の甕である。451、452は口縁端部を肥厚させる。450、451は内面に指頭圧痕が顕著である。455～458、461、462は高杯である。455は皿状の杯部から屈曲して外反する口縁部をもつ。口縁部内面には横ナデによる凹凸がみられる456、457は高杯の杯部である。456は円盤充填の接合部分で破損している。455～457は杯部内外面にヘラミガキが施される。458、461、462は高杯の脚部である。458、462の脚部には円形の透孔が認められる。463～468は底部である。463～465が甕、466～468が壺の底部である。455は他の底部に比べ丸底に近くなっていることから他の底部より後出するものであろう。

469～482は古墳時代前期の壺である。469、470は複合口縁壺である。471は直立する口縁をもち、470は口縁部が内傾する。472～479は広口壺である。473、479は口縁部外面が大きく開くが、それ以外は外反が弱い。481、482は口縁部が直立気味に立ち上がる広口壺である。肩は張り、頸部から胴部上半にかけてハケメ、胴部下半はヘラミガキを施す。480は壺の図版に入れたが、形態からすれば甕であるのかもしれない。なで肩の肩部から屈曲して外反する口縁部をもつ、端部はほとんど肥厚しない。調整は胴部上半外面にはタキメが認められる。胴部外面上半に焼成後の穿孔が穿たれている。

483～496は甕である。483～486は「く」の字に屈曲する口縁部をもち、口縁端部は丸く終わる。胴部外面はハケメ、内面は頸部近くまでハケメを施す。487は形態、調整技法等他の土器と趣を異にするもので、頸部に押圧突帯紋を施し胴部外面にタキメ、内面に上半部ハケメ、下半部ヘラミガキを施すという特徴を持つ。488は頸部から体部片である。489～495は口縁部は強く折り返されて、外反ないしやや内湾気味に開く、口縁端部は上方につまみ上げない489～491と口縁端部を上方につまみ上げる492～495に分かれる。調整は胴部外面はハケメ、内面は指おさえを一般とするが、494のように内面にハケメを施すものも認められる。496は直立気味に外反する口縁をもつ甕である口縁部の器壁は厚く口縁端部は面をもつ。調整は外面ハケメ、内面は頸部近くまでヘラケズリを施す。497～499は甕の底部である。498は底部に焼成前の穿孔が認められ、外面にヘラ



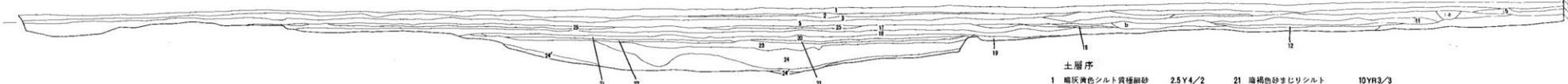
No. 2

No. 3

E

W

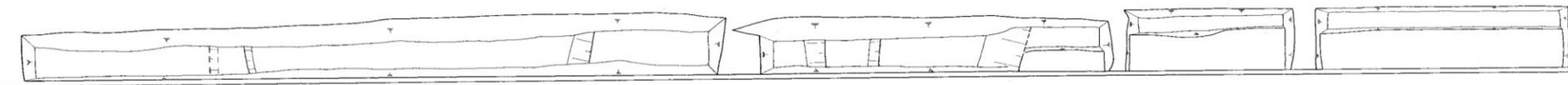
L=18200m



土層序

1	暗灰黄色シルト質砂	2.5Y4/2	21	黒褐色砂まじりシルト	10YR3/3
2	オリブ褐色砂まじりシルト	5Y	22	黒褐色砂質シルト	7.5YR2/2
3	オリブ褐色砂まじりシルト	2.5Y4/3	23	黒色シルト	10YR2/1
4	灰青褐色シルト質砂	10YR5/2	24	暗灰黄色砂	2.5Y4/2
5	黄灰色シルト質砂	2.5Y4/1	25	オリブ褐色シルト質砂	2.5Y4/3
11	灰黄褐色シルト	10YR4/2	a	黄褐色砂質シルト	2.5Y5/3
12	灰色黄褐色砂質シルト	10YR5/3	b	オリブ褐色砂質シルト	2.5Y4/3
16	12と同じ				
17	灰黄褐色シルト質砂	10YR5/2			
18	黒褐色砂質シルト	10YR3/2			
19	黒褐色砂まじり粘質シルト	10YR2/3			
20	暗褐色シルト質砂	10YR3/3			

第113図 SR01平・断面図



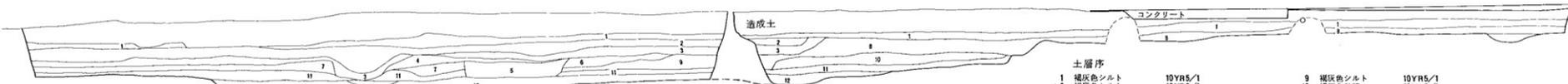
No. 8

No. 9

E

W

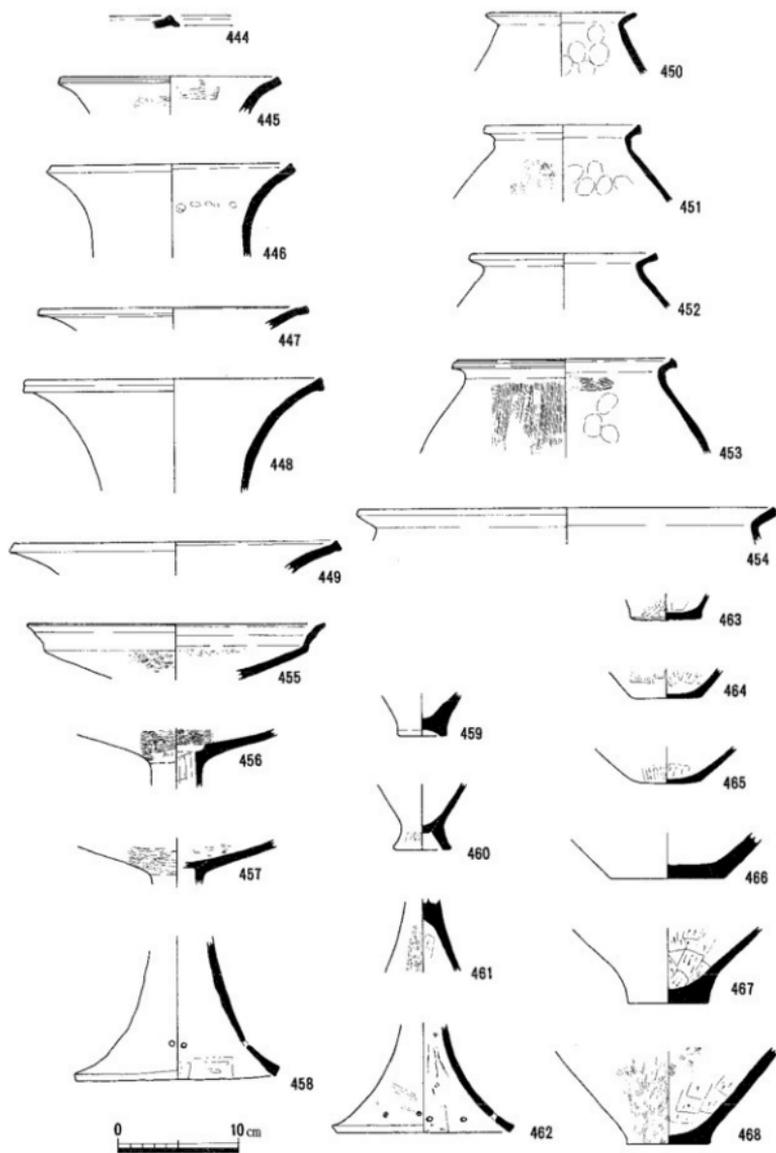
L=19000m



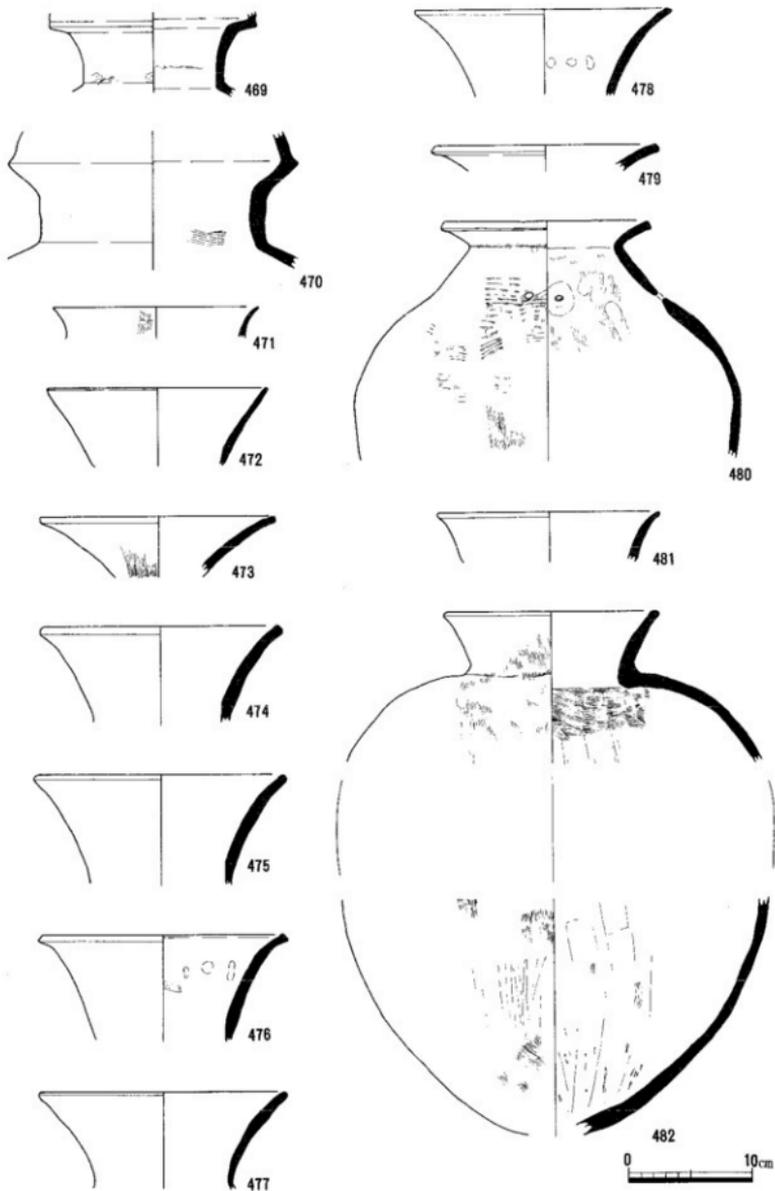
土層序

1	褐灰色シルト	10YR5/1	9	褐灰色シルト	10YR5/1
2	褐灰色シルト	10YR6/1	10	褐灰色砂	10YR5/1
3	褐灰色シルト	10YR4/1	11	褐灰色砂まじりシルト	7.5YR4/1
4	灰黄褐色シルト	10YR6/2	12	黒褐色砂まじりシルト	10YR2/1
5	褐灰色シルト	10Y4/1			
6	灰黄褐色シルト (黄褐色シルトモブロックで含む)	10YR5/2			
7	褐灰色シルト	10YR6/1			
8	灰黄褐色砂まじりシルト	10YR5/2			

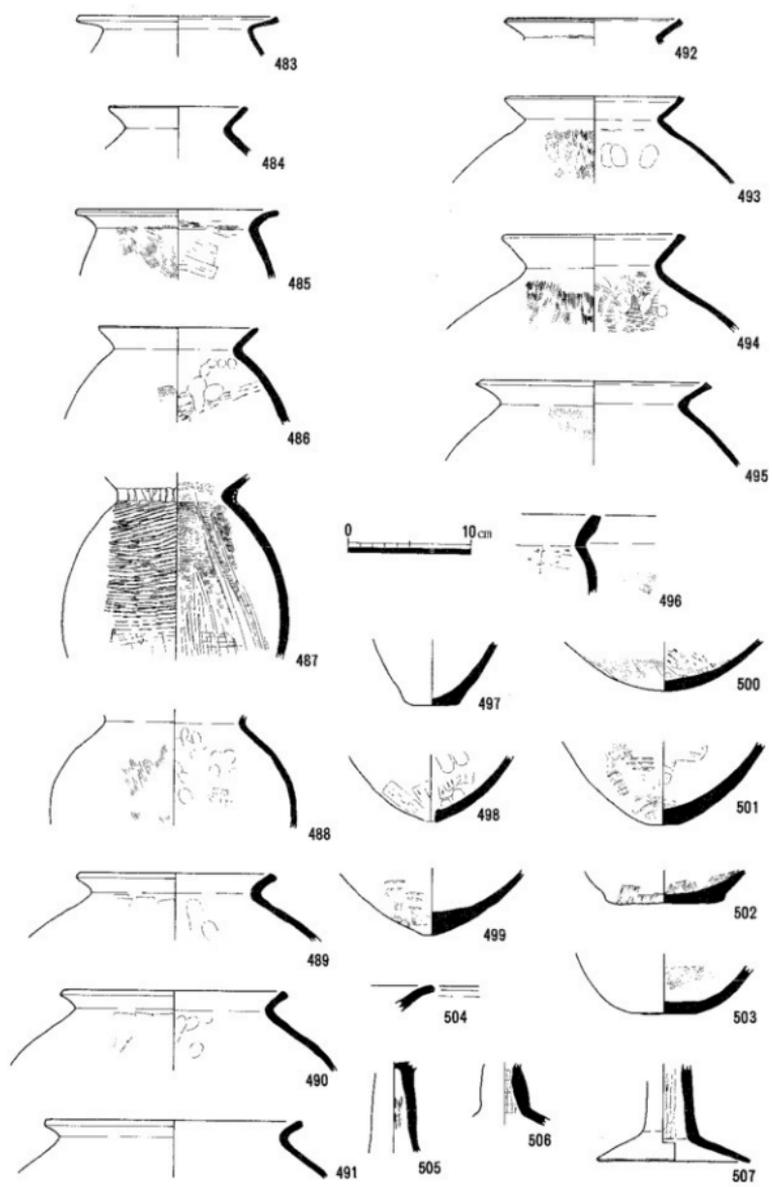
第114図 SR02平・断面図



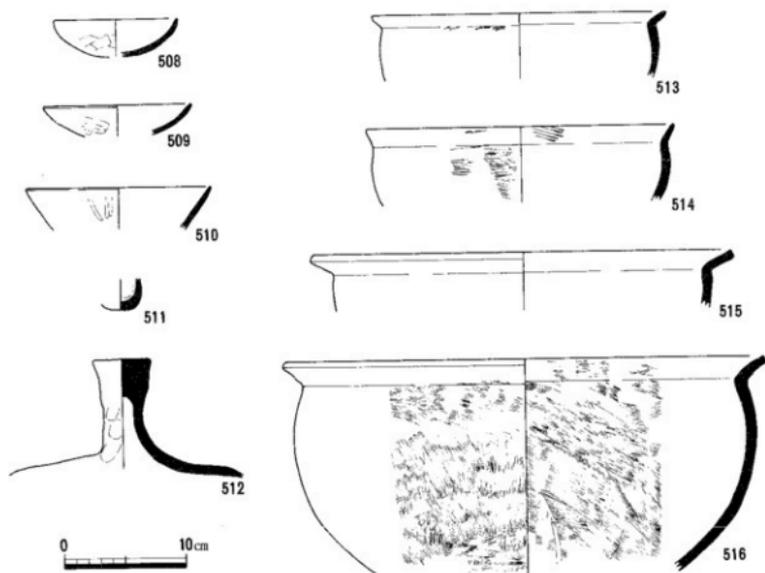
第115图 SR01 22·23层出土遗物实测图 (1)



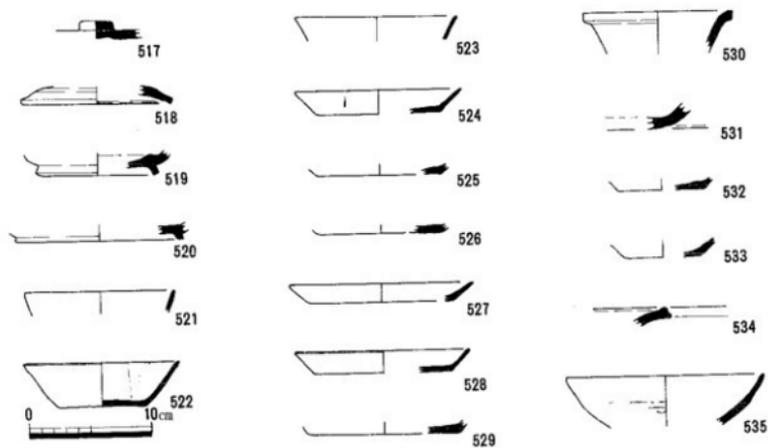
第116图 SR01 22·23层出土物实测图 (2)



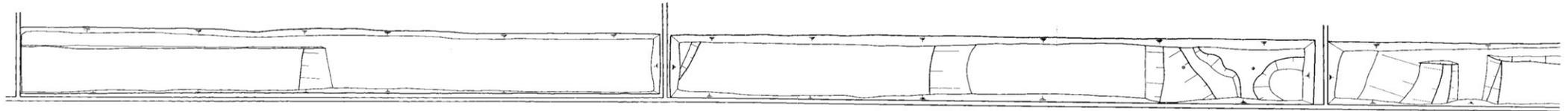
第117图 SR01 22・23層出土遺物実測图 (3)



第118图 SR01 22·23层出土遗物实测图 (4)



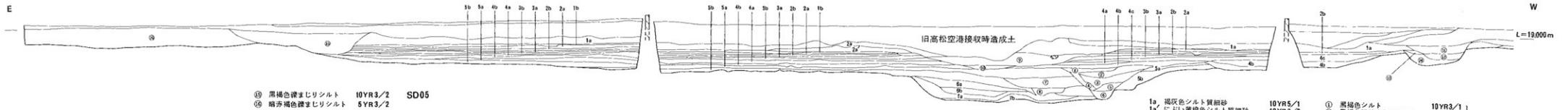
第119图 SR01 18·20层出土遗物实测图



No. 11

No. 12

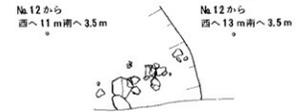
No. 13



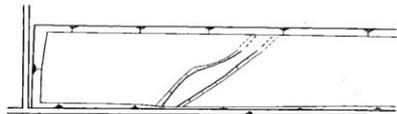
① 黒褐色礫まじりシルト 10YR3/2 SD05
 ② 暗赤褐色礫まじりシルト 5YR3/2

1a	褐色シルト質細砂	10YR5/1	①	黒褐色シルト	10YR3/1
1a'	にがい黄褐色シルト質細砂	10YR6/3	②	黒褐色粗砂まじりシルト	10YR3/1
1b	にがい黄褐色粗砂まじりシルト	10YR7/2	③	暗灰色粗砂まじりシルト	10YR3/1
2a	にがい黄褐色シルト	10YR7/2	④	灰色粗砂まじりシルト	5Y4/1
2b	灰黄褐色シルト	10YR5/2	⑤	灰色シルト質細砂	5Y4/1
3a	灰黄褐色シルト	10YR4/2	⑥	灰色シルト質細砂	5Y4/1
3b	褐色粗砂まじりシルト	10YR5/1	⑦	灰色粗砂まじりシルト	N4/1
4a	褐色粗砂まじりシルト	5YR4/1	⑧	灰色粗砂まじりシルト	N4/1
4b	褐色粗砂まじりシルト	7.5YR5/1	⑨	灰黄褐色シルト	10YR5/2
5a	褐色粗砂まじりシルト	7.5YR4/2	⑩	灰黄褐色礫まじりシルト	10YR4/2
5b	褐色粗砂まじりシルト	10YR4/1	⑪	灰黄褐色シルト	10YR5/2
6a	褐色シルト質細砂	10YR4/1	⑫	褐色シルト	10YR6/1
6b	褐色シルト質細砂	10YR5/1	⑬	褐色シルト	10YR6/1
7a	褐色シルト	10YR7/1	⑭	褐色シルト	10YR6/1
7b	灰白色粗砂	10YR7/1	⑮	褐色シルト	7.5YR4/1

第120図 SR03平・断面図

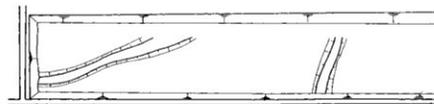


第121図 SR03西群5層遺物出土状況図



No. 12

第122図 SR03 4a層上面水田平面図



No. 12

第123図 SR03 5a層上面水田平面図

ケズリが認められる。500～501は壺の底部である。502、503は平底の鉢の底部である。502の内外面にはハケメがみとめられる。504～507は高杯である。505、506の柱状部から脚部への屈曲はきつく外側に広がる。

508～510は小型の鉢である。513～516は大型の鉢である。「く」の字に屈曲する口縁部をもつもので、調整は内外面をハケメで仕上げる。511はミニチュアの土器である。512は甕の蓋である。手づくねでいびつな形態をする。

SR01 18・20層出土遺物

517、518は須恵器杯蓋である。517にはつまみがつく。519、520は須恵器の高台をもつ杯身である。521～523は須恵器杯である。522には火澤が認められる。524～529は須恵器の皿である。口径は14cm前後、器高は2cm前後である。530は須恵器の壺口縁部である。531は須恵器底部である。532、533は杯の底部である。534は土師器の甕口縁部である。口縁端部が上下に肥厚し、端面はくぼむ。535は土師質土器の椀である。口縁部外面が横ナデによりくぼむ。外面に接合痕が残る粗いつくりのものである。

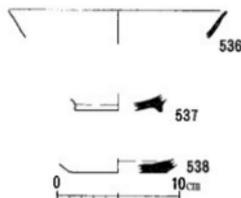
SR02

№7+12.5mから№8+14mにかけて確認した自然河川である。当遺跡の南側で行った一角遺跡の発掘で確認したSR301の延長部分に当たる。自然河川の規模は幅20m、深さ0.50mである。旧河道の西肩は川底から1.50mと高く肩が明瞭であるのに対して、東肩は西肩に対して、その立ち上がりは弱く0.30mである。旧河道の土層埋土は上から褐灰色シルト、西肩付近に堆積する褐灰色砂礫、褐灰色礫まじりシルト、黒褐色礫まじりシルトである。この内、褐灰色シルトから古代末頃の土器が出土している。一角遺跡の調査成果から最下層の黒褐色礫まじりシルト（一角遺跡では黒色シルト）から弥生後

期末から古墳時代前期にかけての土器が多量に出土している。

SR02 褐灰色礫まじりシルト出土遺物

536は瓦器の椀である。口縁端部外面に横ナデを行うため、口縁端部はくぼむ。537は黒色土器の椀である。外側に踏ん張る高台部をもつ。538は須恵器の杯底部である。

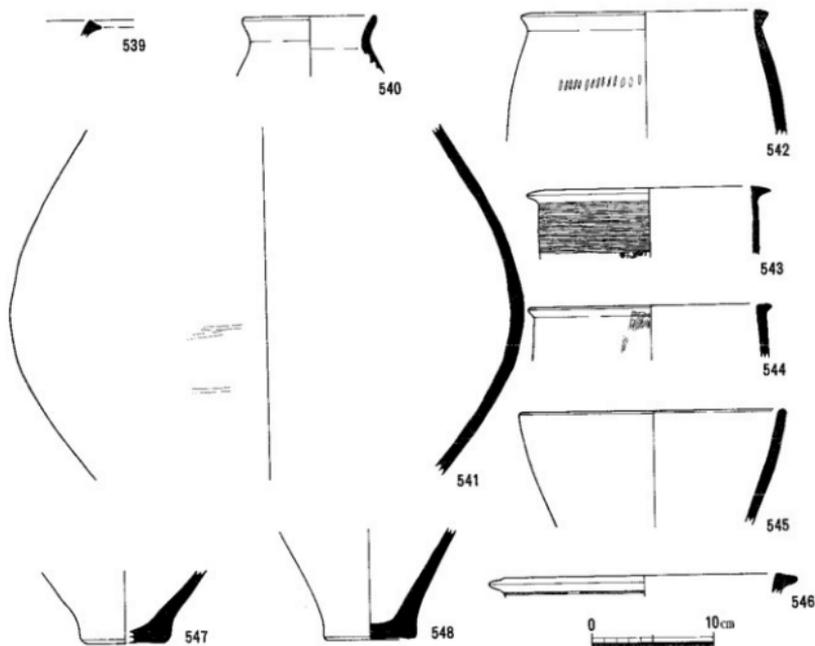


第124図 SR02出土遺物実測図

SR03

№11+5mから№12+18mにかけて確認した自然河川である。自然河川の規模は川の流域幅は33.00mと広いものの、実際の流路は中央部の幅8.00m、深さ1.50mである。旧河道付近の土層堆積は1層 旧耕作土、床土、2a層 ぬい黄橙色シルト、2b層 灰黄褐色シルト、3a層 灰黄褐色シルト、3b層 褐灰色粗砂まじりシルト、4a層 褐灰色粗砂まじりシルト、4b層 褐灰色粗砂まじりシルト、5a層 褐灰色粗砂まじりシルト、5b層 灰褐色粗砂まじりシルト、6a層 褐灰色粗砂まじりシルト、6b層 褐灰色シルト細砂、7a層 褐灰色シルト、7b層 灰白色粗砂である。この内4a層、5a層の上面で、水田畦畔を確認した。確認した水田畦畔は4a層上面では北東方向を向く畦

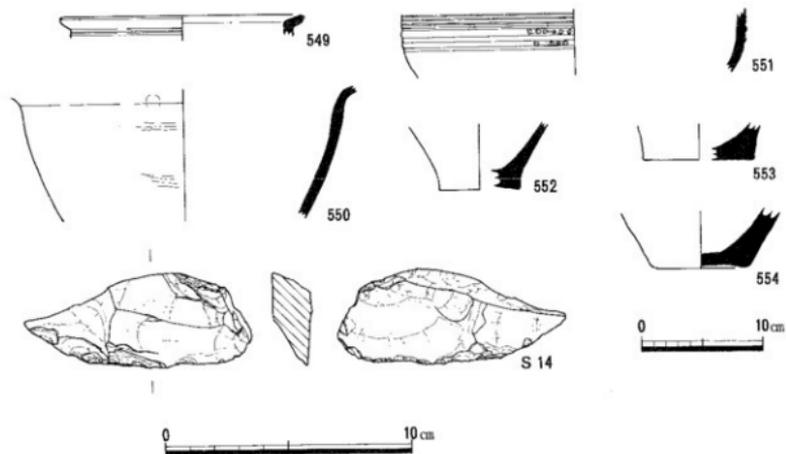
畔を1本確認したにすぎない。その下の5 a層上面では東西方向の畦畔と南北方向の畦畔の2本である。確認した畦畔の隆起は4cmであり、あまり高くない。畦畔の確認は自然河川の東側に限られる。この原因は自然河川中央部に同時期の溝が走るためであり、当初から存在しないのか、溝によって切られて存在しないのか、不明である。出土遺物は4層以下の各層から出土している。



第125図 SR03 6層以下出土遺物実測図

SR03 6層以下出土遺物

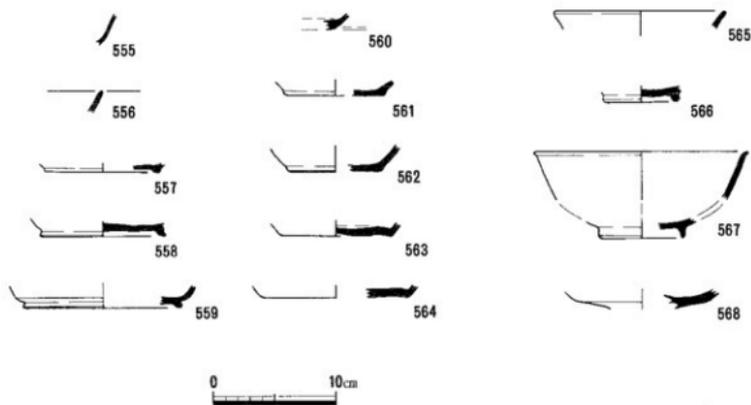
539～548は弥生土器である。539は壺の口縁部である。540は短頸の広口壺である。541は大型壺の体部である。外面にヘラミガキが一部残る。542～544、546は逆L字状口縁甕である。542は口縁部が三角形に近い形状をもち、胴部が膨らむ。胴部外面に篋状工具による列点紋を施す。543は胴部外面に櫛描沈線紋を施すもので、櫛描沈線紋の下端に櫛状工具による櫛歯紋を施す。544は無紋の甕である。短い口縁部をもつもので、口端部が面をもつ。546は胴部外面に篋描沈線紋を巡らすものであるが、欠損のため、1条のみしか確認できない。545は無紋の鉢である。Ⅱ様式以降に出現する胴部外面に櫛描紋を多用する鉢のプロトタイプと考えられる。547、548は甕の底部である。



第126図 SR03西層出土遺物実測図

SR03 西層出土遺物

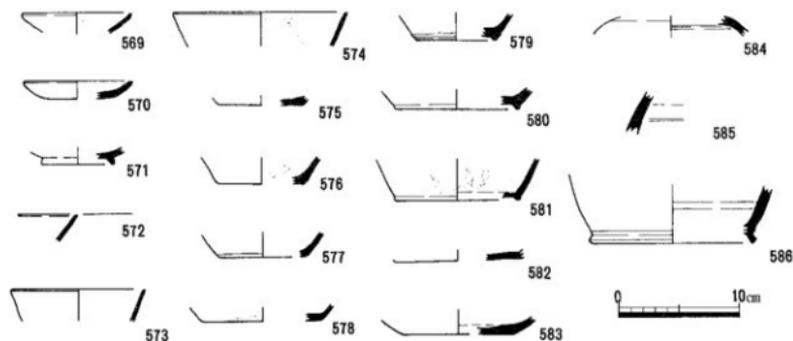
549は口縁端部を上方にあげる如意状口縁甕である。胴部外面に簡描沈線紋を2条+ α 施す。550は如意状口縁の鉢である。551は胴部最大径位置に4条+ α の簡描直線紋とその下位に刻目を有する貧弱な貼付突帯を2条巡らしている。SK24出土167と同一個体の可能性が考えられる。552、553は甕の底部、554は壺の底部であろう。S14は厚い素材を利用するスクレイパーであると考えられる。



第127図 SR03 4層出土遺物実測図

SR03 4層出土遺物

555は土師器の椀、556は須恵器の杯口縁部である。557は黒色土器の椀底部である。558、559は須恵器の杯身底部である。560～563は須恵器の杯底部である。564は須恵器の皿底部である。565は須恵器の皿口縁部である。566は黒色土器底部である。567は灰釉陶器椀である。568は須恵器高杯の杯部である。



第128図 SR03 3層出土遺物実測図

SR03 3層出土遺物

569、570は土師器の小皿である。571は黒色土器の椀底部である。572は土師器の椀である。573、574は須恵器の杯口縁部である。575～583は須恵器杯の底部である。579～581は高台をもつ杯身である。579、580は厚手、581は薄手である。582、583は須恵器の皿である。584は須恵器の杯蓋である。585は須恵器の壺頸部である。586は須恵器の壺底部である。

第4章 調査のまとめ

第1節 遺構の変遷について

(1) 弥生時代前期末～中期初頭

No.17から以西で多数の土坑、溝等を確認した。これらの遺構は調査区内で最も高い位置に立地する。竪穴住居は後世の削平の為か確認できていない。確認した多数の土坑の性格は不明である。この時期の土器は東側低地帯SR03の堆積土中からも出土している。

(2) 弥生時代後期

後期前半の竪穴住居3棟（弘福寺田岡南地区SH02を含む）、溝をNo.16を中心に確認したが、この時期、遺構密度は高くない。古墳時代の遺構SX01の下層からこの時期の土器が、弘福寺田岡南地区SX04中からも、この時期の土器が出土している。後期末では、東側低地帯のSR01～03でこの時期の土器が多量に出土しているほか、一角遺跡では、竪穴住居が2棟確認されているなど、集落の移動が考えられる。

(3) 古墳時代後期

この時期に属する遺構は、No.17より西で確認されたSX01のみである。

(4) 平安時代

土坑SK27、SD01などが認められる他は微高地での遺構は希薄である。一方、東側低地帯SR03内では畦畔が認められる水田面が2面確認できる他、SR01でも7層で畦畔状の高まりを2箇所確認していることから、東側低地帯は水田として利用されていたものと考えられる。

(5) 中世

鎌倉時代と考えられるものはISP23、ISP23、田岡南地区SE01などが認められるため、近くに遺構が広がるのかもしれない。

室町時代の遺構はNo.22～23にかけて、SD17、18、19及びPitを確認したことから後述するように、屋敷跡であると考えられる。

(6) 江戸時代以降

この時期の遺構は、条里方向の溝を多く確認している。旧高松空港接収時にその機能を終えている。空港接収前までは、調査区周辺が現在と変わらない状況にあり、水田等の生産域として利用されていたものと考えられる。

第2節 弥生時代前期末から中期初頭の遺構と遺物について

宮西・一角遺跡からは弥生時代前期末から中期初頭と考えられる土坑を多数確認した。これらの土坑からは比較的良好的な形で多くの土器が出土した。土坑から出土した土器の特徴は、土器の外面に施される施紋が竇描紋から櫛描紋に変化する時期のものである。従来、当地域ではこの時期の土器は旧河道や溝から時期幅のある土器とともに混在して出土する 경우가多く、出土した土器を基に周辺地域との比較から、形式的な変化や遺跡の継続時期については考えられるものの、出土した土器は一括遺物を基本とする編年の対象とはなりにくかった。今回、宮西・一角遺跡の各土坑からは、この変化を検討するだけの資料が出土している。

以下、当遺跡で確認した土坑出土の土器を整理し、当遺跡出土の土器の特徴について述べたい。宮西

・一角遺跡から出土した土坑資料の増加によって、高松平野における弥生前期後半から中期前半にかけての土器の変化を追うことが可能となった。紙数の関係から、この点については機会を改めて検討することとする。

これまで確認されている各形式の特徴は

弥生時代前期末

口縁部内面貼付突帯突帯による加飾壺の出現、逆L字状口縁甕の出現及び盛行、前形式から続く籠描沈線紋の多条化。

弥生中期初頭

逆L字状口縁甕の継続、籠描紋から櫛描紋への施紋帯の変化。

以上の特徴を主な基準に当地域出土土器の編年が組み立てられていた。今回も、この変化を踏襲して変化をみてみたい。この変化を基準に各土坑を振り分けると

(1) 弥生時代前期末

SK02, SK10, SK26, SK08, SK35, SK36,

(2) 弥生中期初頭

SK29, SK04, SK07, SK11, SK18, に分かれる。

宮西・一角遺跡から出土した**弥生前期末**に比定できる土坑から出土した土器の特徴は

壺では広口壺、無頸壺の2形態が認められる。広口壺の口縁部内面には貼付突帯が認められ、頸部から体部上半にかけて貼付突帯もしくは籠描沈線紋によって加飾される。SK10出土の132の広口壺では貼付突帯紋施紋箇所の下地には、半截竹管による下地沈線が認められる。このような半截竹管による施紋はSK26出土174の無頸壺に複線山形紋、SK08出土73の壺体部に複線山形紋が認められる。

甕では如意状口縁のものと逆L字状口縁のものが認められるが、SK02以外は圧倒的に逆L字状口縁の甕が多い。逆L字状口縁甕を比較的資料数の多いSK26で詳しくみると、体部外面上半部に施紋される籠描沈線紋を施紋するものと、無紋のものはほぼ同数である。籠描沈線紋の下端には列点紋等の紋様は認められない。数条の籠描沈線紋と籠描沈線紋の間には円形浮紋を巡らせるSK26出土184も認められる。

続く**弥生中期初頭**に比定できる土坑から出土した土器の特徴は

壺では前形式から続く広口壺、無頸壺が認められる他、外面に刻目貼付突帯を巡らせるSK11出土134の無頸壺、SK04出土の短頸広口壺がみられる。頸部から体部上半にみられた籠描紋は櫛描紋へと変化している。前期末にみられた複線山形紋はSK07出土の51の体部片に1点認められるのみである。それ以外は多条の櫛描直線紋帯とその下段に櫛描波状紋が認められる。この時期の下段に巡る櫛描波状紋は、後の櫛描波状紋に比べ少条である。

甕については、如意状口縁甕が少なく、前様式と同じく逆L字状が多く、口縁部に貼り付ける突帯は断面三角形のものが多く、体部上半部の紋様については、櫛描直線紋の最下段に櫛描波状紋、板状工具による三角形の列点紋が認められる。前形式にみられた籠描沈線紋帯間（当形式では櫛描紋に変化）の施紋はSK18出土158に板状工具による三角形の列点紋がみられるのみである。

当遺跡出土の土器でも籠描紋から櫛描紋への変化が認められ、加えて、籠描紋と櫛描紋が各遺構で混在した状況は認めらず、当遺跡土坑出土土器からは籠描文から櫛描文への順当な変化が認められる。ま

た、施描紋から櫛描紋に変化した土坑のうちSK29からはその変化の過渡的様相をもつものがみられる。壺は短頸広口壺1点のみの出土であるため、細かな様相は不明であるが、甕では189の櫛描直線紋の最下段に施された少条山形紋に近い櫛描波状紋や189の紋様帯最下段に施された半截竹管による波状紋は他の土坑出土の櫛描波状紋に比べ、紋様がこなれていない（稚拙）ことがあげられる。188の紋様帯最下段に施された×字紋についても同様のことがいえる。一つの土坑資料からのみ検討するには問題もあるが、施紋方法の変化当初は、こなれていない紋様をもつ遺構資料がみられるのも当然の変化とも考えられ、これが外的な要因なのか内的な要因なのか資料の増加をまって確認する必要がある。

第3節 中世後半の区画溝と柱穴（屋敷跡）について

No.22付近ではSD18と呼称した溝が東西方向から約80°の角度（溝を確認した範囲での値）で北側に折れる特異な状況を示し、折れの部分の内側では土師器の小皿が意図的に置かれている状況が確認できた。SD18を中心に、心芯間の距離で2m東に幅0.6mのSD17が存在し、心芯間の距離で3m南でSD19が存在する。SD19は5次調査で折れ近くの部分を確認したが、明確に折れるのか不明である。東側は調査区外に逃げるため不明である。SD18、19は規模等、ほぼ同じでSD17が貧弱である。SD18の東西溝SD18-2は西側に行くにしたがい北に角度を振る、SD18の内側を中心に柱穴と考えられるPitが点在する。PitはSD18の中にも存在することからSD18開削以前からか、もしくは埋没後も存在した可能性が考えられるが、Pitの位置は大きく動かない。また、SD19の南西には同時期と考えられるST01がある。これらの遺構を検討した場合、溝に囲まれた屋敷の存在が考えられる。南北方向の調査範囲が狭いため、東西方向の調査範囲が検討の対象となる。SD19のすぐ西側に存在するSD21付近が推定坪境にあたり、西側は坪境に接して作られていることがわかる。南限は東西方向の溝SD19が現在の地割りから推定した1町のうちの北西隅から約33m南に存在することが判明した。次に東限であるが、西側の坪境からSD17までは心芯間で32mである。SD17が他の溝よりも規模が小さく、削平されていることも考慮すればほぼ同規模の33m四方の規模をもつ屋敷地が復元できる。この屋敷地にどの程度の規模に復元できる屋敷が存在したのか、調査範囲も狭いため不明である。本文中でも述べたがSD19の南西に位置するST01は周辺に同時期の墓が認められないこと屋敷地に接近して作られていることなどから屋敷墓と考えてもよいのではないかと考えられる。

第4節 弘福寺領山田郡田岡南地区との関係について

高松市教育委員会では昭和61年度から弘福寺領讃岐国山田郡田岡に関する確認調査を実施してきたところであるが、これまでの弘福寺領山田郡田岡調査委員会の石上、金田両氏による絵図等の調査結果、田岡に記載された山田香川二郡境の位置関係から当遺跡の西側半分は弘福寺領讃岐国山田郡田岡南地区比定地の中央部分が概ね該当する。この確認調査を契機として、これまで遺跡の空白地帯であった高松平野の遺跡の詳細が判明してきたとともに、調査委員会のメンバーによる発掘調査等の指導によって、水田発掘等の調査技術が進歩したことは、大きな成果であったものと考えられる。

さて、宮西・一角遺跡の調査地が田岡比定地のどの位置にあたるのか確認しておきたい。南地区田岡比定地付近の土地条件図から判断した金田氏の分析によると、西から8-10-6（8条10里6坊の略、以下同じ）、8-10-5、8-10-8、8-10-9の区画が該当する。8-10-6、8-

10-5, 8-10-8の区画は田図の記載から全面が田として把握されている。これまでの宮西・一角遺跡の調査結果から田図に関係する遺構は条里方向に合う溝のみであり、溝については出土遺物から近世までは遡れるが、それより以前については可能性は考えられるものの確定できるものはない。素堀の水路は土砂の堆積を受け埋まりやすいことから絶えず再掘削が行われており、掘削時期が古くても水路の長期使用によって古い時期の遺物が残りにくい可能性は充分考えられる。遺構から出土する最も新しい時期の遺物で時期判定をする考古学の限界がある。

田図に比較的時期が近いものとしてSX01出土の8世紀代の遺物があるが、他の時期の遺物とまじって出土しているため出土状況等詳細は不明であり、南側で行った田図南地区の調査でも、この時期の遺構は確認できていないことから、遺構であれば宮西・一角遺跡調査区内で完結するものであろう。

その他、田図に記載された特徴のある記載は、8-10-4の壟、8-10-9の茶褐色に記載された台形の区画がある。石上氏は田図の彩色には非水田を表示する基本機能がかったことを基に前者を微高地、後者を浅い谷状地形と分析している。宮西・一角遺跡の調査成果では、SR03と呼称している旧河道とその東側に存在する微高地（自然堤防）が該当する。

以上、弘福寺領田図南地区比定地と宮西・一角遺跡の調査で確認できた遺構、遺物をもとに該当する部分のみをみてきたが、郡境の位置、調査地東に存在する非水田・非耕地の位置関係から南地区比定地の西半分を調査したことになるが、調査範囲が南北に狭いこともあり、今回の考古学的な調査では裏付けだけの資料を提示するまでには至らなかった。今後も、周辺部のさらなる調査成果の積み上げが必要であると考えられる。

参考文献

- ・『讃岐国弘福寺領の調査』 高松市教育委員会 1992
- ・『空港跡地遺跡Ⅰ～Ⅲ』 香川県教育委員会他 1996～1998
- ・『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』 高松市教育委員会 1999
- ・『一角遺跡』 高松市教育委員会 2000

写 真 图 版

図版 1



1 第1次調査西半完掘状況
(東から)



2 同 (西から)



3 第1次調査東半完掘状況
(東から)

1 第1次調査東半完掘状況
(西から)



2 SD23付近完掘状況



3 SK23付近完掘状況



図版 3



1 SD 2 1 付近完掘状況



2 SD 2 2 付近完掘状況



3 第 2 次調査西半完掘状況
(東から)

1 SR02完掘状況
(西から)



2 第3次調査完掘状況
(西から)



3 第3次調査完掘状況
(東から)



図版 5



1 No. 1 6 北付近完掘状況



2 No. 1 7 北付近完掘状況



3 No. 1 8 北付近完掘状況

1 No.18~19北付近
完掘状況



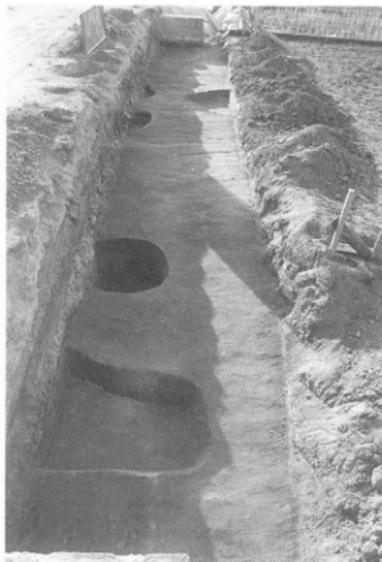
2 No.18~19北付近
完掘状況



3 No.19北付近完掘状況



図版 7



↑ 1 No.19~20
北付近完掘状況

↙ 2
No.21北付近完掘状況
(西から)

← 3
No.21北付近完掘状況
(東から)

1 SK29
遺物出土状況



2 SK04
遺物出土状況



3 SK36
遺物出土状況





1 SK 35
遺物出土状況



2 SK 07
遺物出土状況



3 SK 26
遺物出土状況

1 SK24
遺物出土状況



2 SK11
遺物出土状況



3 SA01完掘状況





1 SK10 検出状況



2 遺物出土状況

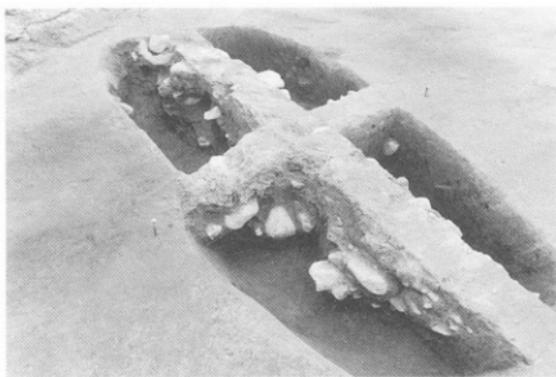


3 遺物出土状況 (拡大)

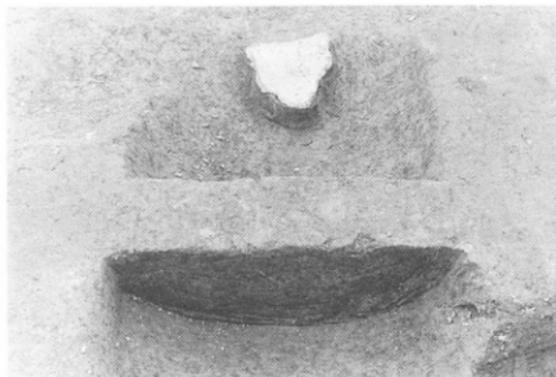
1 SK08
遺物出土状況



2 土層堆積状況



3 SD12
遺物出土状況





SK 02 上層遺物出土狀況



2 SK 02 下層遺物出土狀況



3 SK 02 完掘狀況

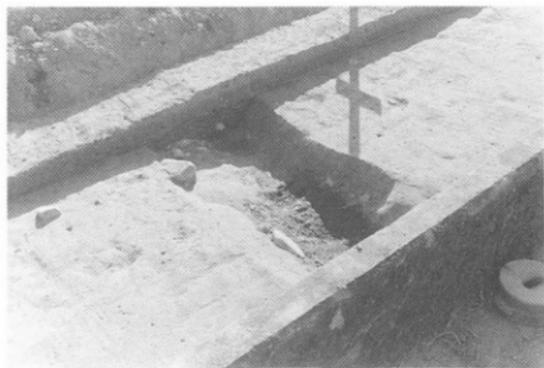
1 SH01 東端土層
堆積状況



2 ガラス玉出土状況

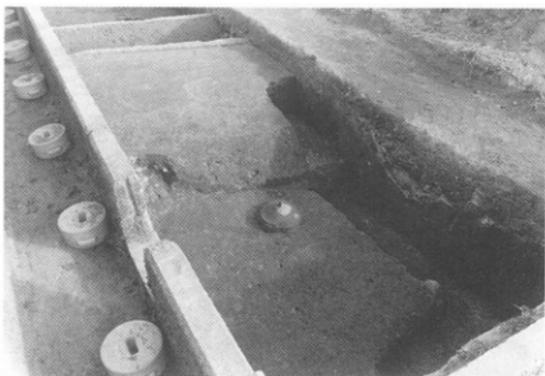


3 SD09 完掘状況





1 SX02完掘状況

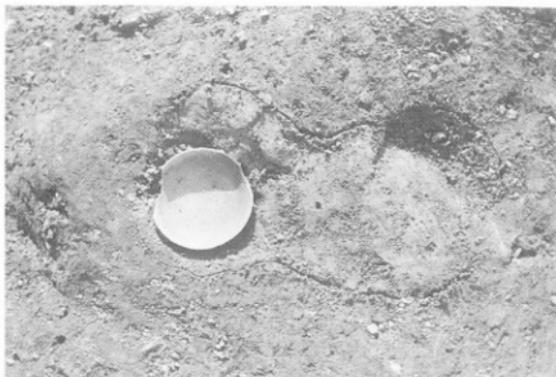


2 同東端遺物出土状況

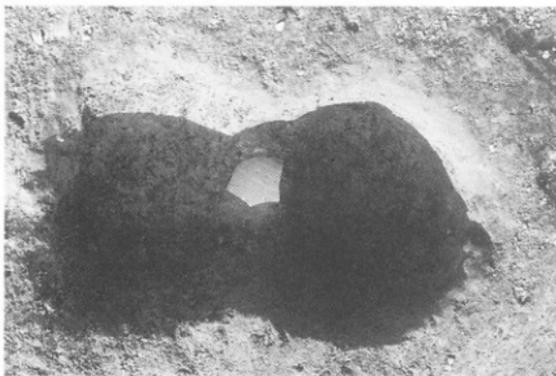


3 SX02
土層堆積状況

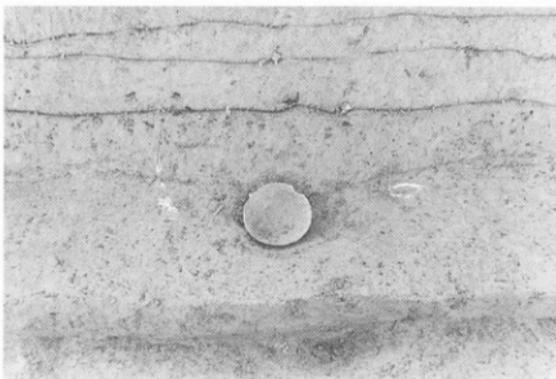
1 SX02西肩
遺物出土状況



2 同下層遺物出土状況



3 ISP23





1 SD19
遺物出土状況



2 SD18 遺物出土状況



3 SD18 交差部分
遺物出土状況

1 SD 2 2 完掘状况



2 SD 1 3 完掘状况



3 SK 3 1 完掘状况





1 SX01完掘状况



2 SD08-2完掘状况



3 SD07完掘状况

1 SD06完掘状況



2 岩田神社横松並木



3 岩田神社参道

